

---

# 幻少女 ~ 僻げにほほ笑む彼女 ~

野木坂 園

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻少女～夢にほほ笑む彼女～

### 【Zコード】

Z1096

### 【作者名】

野木坂園

### 【あらすじ】

大学生である天宮幹士は、同じサークル仲間や高校時代の同級生を誘つて、ある山奥の洋館に旅行に出かける。そこで出会った少女ミキと、仲間達と一緒に過ごすが、そこで不思議なことが起きる。長編ミステリー小説。

休日の朝。住宅街の狭い道を、青年は走っていた。その茶色の髪は汗に濡れて毛先が細くなり、Tシャツの背中には染みがにじみ出ている。

彼は走りながら腕時計を見て、九時半、とぽつりとつぶやいた。その瞬間、スピードがさらに上がる。

久しぶりに全力で走っていた。長いこと運動してなかつた所為か、息が切れて仕方がないけれど。会うのが本当に久しぶりだから。曲がり角をいくつか折れていくと、前方に、白いワゴン車が一台見えた。そこに、懐かしい人影が寄りかかっているのに気付いて、ようやく彼はペースを落とした。

ストレートの長い髪。それが微風に揺れて、彼女の長身に垂れ掛かっている。彼女は車体に寄りかかって、携帯を打っていた。彼は、足を止める。

「只今……天宮幹士、到着しました」膝に手を当てて息を切らしながら、そう言った。

「十分、遅刻」

先生は車体に寄せていた体を起き上がらせて、携帯を折り畳んでそう言い、

「……ほら。暑いから、さつさと中に入りなさいよ」

そう首で促した。

「……わかつてますつて。疲れてるんですよ、今。久しぶりに走つてきたから」

そう言つて車の後部を迂回して助手席に乗り込む。と、その瞬間、凍える冷風が体を包んでぞくりとした。

「寒ッ！ なんだこの低温ッ！」

幹士はすぐに、ダッシュボードの空調ボタンを荒っぽく叩く。

「あーあ、そんなに上げちゃうんだ……って、それより、幸美はど

うしたの？ 一緒に来るはずだつたじゃない？」

「……一足先にデパートに行つて、旅行の買出ししてくるつて。それで、俺達とは後で合流するらしいです」

「そう。何だか悪いわね。一人で行かせて」

「そう言いながら、全然全く気にしてなさそなあなたです。……

幸美は大丈夫ですよ、基喜が後で手伝いに行つてくれるつて言つて。一人でなら、大丈夫でしょう」

「そう」

先生は咳いて、車を発進させる。

会話が途切れで、幹士はぼんやりと助手席の窓を開ける。

日曜の朝の、ひつそりとした住宅街。日差しの強い青空の下で、

蝉がみんみんと声を喚かせていた。するとふと。

「幹士君……幸美とは、つまくやつてるの？」

そう尋ねられた。幹士は一瞬押し黙つてから、

「今まで通り……仲良くやつてるよ」

そう窓の外を見つめてぽつりと言つた。その様子をちらりと見た先生は、

「……なら、良いんだけどね。幹士君が浮氣してそつで、少し気になつたのよ」

「なんだよ、それ……」

幹士がそう振り向くと、先生は無言で笑つた。

先生の濃い眉毛は綺麗に整えられていて、アイラインの入つた目元には、ほくろがある。高校時代に毎日揉んだその顔を、久しづりにじつと眺めてみる。

すると、その視線に気付いたのか、何？ と先生が訊いてきた。

「先生……」

幹士がつぶやく。

「……だから……何よ？」

「化粧濃いですね」

一瞬、沈黙が流れた。

だがその途端、車がズゴツと前傾した。ブレーキを思い切り踏みつけたのだ。

幹士がうわ、と咄嗟に手すりにつかまる。

「どうせ、私は化粧濃いですよツ！！」

ズゴツズゴツ、と車体が何度も傾いた。幹士は、お願いだから止めれつ、と青白い顔で叫ぶ。

すると突然、車の揺れは収まった。

幹士が青ざめた顔をようやく上げて、先生の横顔を窺がうと。先生はぶつぶつと「悪かったわね」と呟きながら、眉を引きつらせていた。

それから幹士が手すりを握り締めながらしばらく萎縮していると、車は三十分ほど大通りを進んだ後に、デパートに隣接するコンサート会場の駐車場で停止した。

一人で会場に入り、ホールへと続くその赤い扉を開く。真っ暗な背景の中できらめくように光り輝くステージが見えた。グランドピアノの前にワンピースを着た少女が座り、指を機敏に動かしていた。

「……あらあら、可愛らしい」

「席は前方ですよ。……ほら、行って行って」

幹士は先生の背中を押して、通路を下つていく。

前方の方まで来ると立ち止まって見渡してみる。見知った顔を見つけ、彼女が座る列へと歩み寄った。

「よう、加賀」

その声に、じっと演奏を聴いていた彼女が、弾かれたように振り返った。浸つていたところを突然跳ね起こされて、少し驚いている。

「天富君」

そう呟きながら、彼女はそつと幹士の横に立つ先生を見遣る。すると、先生は長身を屈めてあいさつする。

「この人、俺が言つてた例の昔の担任な。……先生、この人は同じサークルの仲間で、加賀美代子さん」

幹士はそう囁き声で二人に説明した後で、手を振つて、美代子に

席をずれるように合図する。

美代子は「あ」と声を掛けられてやつと気付いたよつこ、慌てて立ち上がりて席をずれた。

幹士は美代子に向かって、

「春芳の演奏まで、あと何人ある?」  
と訊く。

彼女は、えつと……と、膝の上のパンフレットを開き、「五人かな」とつぶやいた。

「五人……結構あるな」

寝てよつと、と早くも目を閉じよつとすると、横からつねられた。

「……痛つて。何だよ?」

「……あのね、幹士君。せつかく来たんだから、ゆつくり演奏聞いてなさいよ」

先生は、あんなに可愛らしいのに、と、たつた今演奏が終わった少女へ向けて、猛烈な柔らかい笑顔と拍手を送る。「ブラボー!」「はいはい……わかつてるよ」

幹士はそう息を吐いて腕を組みステージをにらむが、ものの数分で、睡魔と手を取り合い、再び先生に腰をつねられたことになった。

すべての演奏が終わり、幹士はゆつくり話しこんでいる先生と美代子を置いて、明るいエントランスホールへと出た。

大人が数人ずつ集まつて談笑し、そのいくつかのグループの隙間を、正装した子供達がきやらきやら笑いながらかけっこをしている。

さて、「コンサートも終わつたし。

幹士はきょろきょろと見回して、見知つた姿がないか、探す。

その時、肩を叩かれて振り向くと、案の定、それは。

「おはよう、幹士」

幹士と並んでも、そう背丈が変わらなそうな彼女は、バイトの帰りなのか、スーツを着たままで、しなやかな長い足がこちらに近寄つてきた。

「……どこのモデルかと思つた

「そりや、どうも」

彼女が不敵に笑う。

「……久しぶりだな、鈴木澄子。お変わりないようだ」

「そつちも。ていうか、フルネームで呼ぶか普通？」

そう笑つて、彼女はふと気付いたように、幹士の体を頭から足の先までじろじろと眺めた。

「なんだ？ その値踏みするような嫌な視線は」、

「いや、少し太つたなつて思つてね。……幸美に甘えてばかりで、働いていない証拠だ」

「会つて早々、説教かよ。……まあ、鈴木らしいけど。……相変わらず口調が男っぽいし」

澄子は、一言余計だ、と笑い、視線を幹士の背後へ ホールの奥へと伸ばした。そこでは、先生と美代子が立ち話をしている。

「おい。茂川先生の横にいるのは誰だ？」

「加賀だよ。俺のサークル仲間。加賀美代子」

お前も挨拶して来いよ、と、ぽん、と彼女のヒップを叩く。すると、その手を、彼女は渾身の力でつねつねつくる。いてつと叫んであわてて手を引く。

「いつまでも、セクハラされて気にしない女と思つてたら大間違いだぞ」

「……痛つて。昔のお前はもつとダンディーだったのになあ。いつの間にか女に目覚めたか」

「なんか誤解を生みそうな表現だな、おい」

そう言つて澄子は、じゃあなと男勝りに笑つて、歩いて行つた。

それを見送つた後、腕時計を見遣つた。

「……そろそろ時間だよな」

ガラス越しに、会場の外で往来する人々の顔を確認する。その中には、彼女の顔はない。

「遅いなあ、幸美。手間取つてゐるのか？」

その時、奥の廊下に、眼鏡をかけた、黒いスーツの若い男を見かけて、幹土は「お」と笑みを浮べた。

「おい、春芳」

声をかけると、春芳がぴくっと身体を震わせて振り向き、

「幹土か……」

「良かったぞ、演奏。お前、自分で言つてた通り、全然緊張してなかつたな。見てて解つた」

春芳は、いや、と首を振る。

「やつぱり緊張したよ。本番になると、手首が震えた。少し間違えたけど、聴いててわからないような箇所だつたから、助かつたよ」

春義は眼鏡を外し、ハンカチで額を拭く。

「幹土もピアノやつてみたらどうだ？ 気分転換になるぞ」

「いい、俺には向かないから。……それより、みんな、もうほとんど集まつてるから、行こうぜ」

ホールを親指で指差して歩きだすと、春芳は浮かないような顔で、ああ、とつぶやいて続いた。

その時携帯が鳴つて、幹人は取り出して「はい」と明るく応答する。

『幹土？ もう田の前まで来てるんだけど

「すぐ行く」

幹土は後ろの春芳へ振り向いて、あそこだとばかりに、ホールの奥で談話している三人を指さす。

春芳は無表情のまま頷き、彼女達に近づいていった。

ガラス越しに外を見ると、片手に買い物袋を下げ、もう片手に携帯を持った幸美が歩いているのが見え、その後ろに基喜が重そうに顔をゆがめて荷物を抱えて歩いている。

外へ出て近づく。

幸美が気づき、「幹土」と笑う。その隣で基喜が顔を苦々しく歪めて、

「……なあ。やたらと重くねえか、これ

手に提げた大きなバックを、かすかに上げて呟つ。

「一体、何入つてんだよ……」

「別に何だつて良いでしょ。……男なんだから、そのくらいの荷物我慢しなさいよ」

そのくらいつて……と泣きやうな顔を浮べる基喜を尻目に、幹士は、

「とりあえず、荷物を車まで移動させよ!」

そう言つたと同時に、澄子たちが会場から出てきて、「よつ、幸美、基喜」と近寄つてくる。先生が「車はこいつよ」と先導して歩いて行く。

基喜が先生の背中ににやけた視線を向け、「また一段とお美しくなりましたなあ」と、先ほど文句を垂れていたのが嘘のように、重たい荷物も何のその、駆け寄つていいく。幸美がこちらへ振り返り、行こ? と手を引いてきた。

「じゃあ、自己紹介でもしておいつか」

高速道路を走る車の車内で幸美のよく通つた声が響く。運転席に座つた幹士が、「やつとくか。じゃあ、前から順番に」と手をあげて促す。

全員と顔見知りの幹士は当然バスされ、トップバッターには、助手席の先生が抜擢される。

「茂川美世、二十六歳。幹士君の担任をやつてました。一応、今回の旅行では、皆さんの保護者に当たるのかな。……いくら成人してるからつて、この三日間、くれぐれも破廉恥な真似は慎むようにね」

そう言つて先生は幹士へ露骨な視線を送る。

「何で俺なんだよ」

幹士が眉をしかめてつぶやく。

「次」

すると、後部座席に座る春芳が眼鏡を押し上げながら、口を開く。

「外海春芳。あまり賑やかなのは慣れていない性質ですが、ご迷

惑にならないよう、最善の注意を以へします

幹士が、おい、と呆れたようにつぶやく。

「そんな自己紹介あるかよ。やり直し」

春芳は視線を伏せ、わかつたよ、と小ちくつぶやく。うけ狙いでないことは彼の無機質な表情が物語つている。

「外海春芳。趣味は、ピアノです。先ほどは、俺の演奏を聞いてくれて有難う。困った事があつたら、何でも言つてくれ。宜しく」全く心のこもつてない声で、淡々と喋り終える。お前も懲りない奴だな、と基喜が横から睨む。すると、先生が助手席から後ろへ振り向き、春芳を見据える。

「君、私のクラスの子に似てるわね。ぶつきらぼうに喋るとこがそつくり」

そう穏やかな笑みを向けられても、春芳は、「そうですか」と興味もなさげにつぶやく。

「気を取り直して、次！」

基喜が、手を叩いて促すと、美代子が口を開く。

「加賀美代子と言います……」

少し緊張してゐるのか、声が震えていた。

美代子がノーマルな自己紹介を終えると、基喜が身を乗り出していくつてましたとばかりにこやかに笑い、口を開く。

「清水基喜、高校の時は、幹士と美術部やつてた。当然、絵は俺が断トツでうまかった。俺が一番最初に描いた傑作の題名は、「長く続きそのうなので、幹士が次、と促す。基喜は、んだよー」と幹士のシートを蹴る。

次に、幸美が、よく通つた声で自己紹介をする。

「……その、幹士と実は付き合つてたりします」

そう言つた途端、春芳がはつとしたように振り向く、

「幹士の彼女だつたとは。……知らなかつた」

そう言つて幸美に頭を下げる。

「幹士からは、あなたのことをよく伺つてて……」

態度をじろりと変えて話し始める。基喜がそれを横田で見て、「外海は、幹士だけには寛容なんだよな。俺への扱いはひどいのつて」

とつぶやく。

「次。鈴木行つてくれ」

「オッケー、幹士。鈴木澄子。美大に行つています。絵を始めたきつかけは、この……」

幸美の肩を掴んで自分の前に引き寄せた。

「この幸美です。幸美が誘わなかつたら、きっと私は今、美大になど進んでなかつた」

「鈴木。お前、彼氏できたつて本当なのか？」

突然幹士が訊くと、鈴木は、え、と声を上げて赤面し、「ほ……本当、だけど」

とほつりとつぶやく。すると、先生が「そうなんだ。良かつたわねえ」と棒読みで言う。先を越されたわ、と小さなつぶやきが聞こえたような気がした。

「どんな奴なんだ？」

幹士は、バックミラーに映る彼女の赤くなつた端整な顔に訊く。鈴木は言いかねるよう視線を逸らした。

「教えてくれたつていいだろ」

幹士がそう追求すると、彼女は何故かむつとした顔を浮かべ、

「幹士よりかはイケメンだよ」

と、ぶつきらぼうりに言つて、そっぽを向いてしまつた。

高速を下りて山道に入った車の中は、いつしか静まり返り、かすかな寝息と幹士の欠伸の声だけが響いた。

山道の周りはブナやモミが多く、光の靄が、背高い木の網をくぐり抜けて、ドアにもたせかけた腕にグロテスクな縞模様を浮かばせる。

……叔父さん、なんでこんなところに洋館なんて持つてんだろ。

そんなことを考へてると、瞼が重くなつてきて、ふと視界が細くなつた時、ワゴン車が道を外れかけた。幹土は寝惚けた頭を跳ね起こさせ、ハンドルを切る。

「……危ないわよ」

美代子が、一人起きてたのか、半田でつぶやいた  
「ごめんごめん。何か眠くなつてきちゃって」

「これ、食べて」

ガムを差し出す美代子。サンキュー、と言つて、口に放り込む。

「加賀は眠くないのか」

「眠いけど。せっかく来たんだし、ゆつくり景色を見たいなあって思つて」

「同じような景色ばっかりだから」

「空気が良いもの。それで十分」

美代子がそう言つと、幹土はドアに設置されたボタンを押して、窓をさらに開けてあげた。

「ありがと」

美代子はそうつぶやいて、心地よさそうに大きく息を吸う。

「……洋館か。相当古い建物らしいし、大丈夫なのかな」

ぽんやりと独り言のように言つ幹土。

「平氣でしょ、きっと。幹土君の叔父さん、使えない建物なんか、幹土君に貸さないよ」

「俺もそう思うけど。どうも、嫌な予感がするつていうか……」

「予感つて……殺人事件でも起こるつて言つの？」

可笑しそうに言つ美代子に、

「ま、山奥の洋館に泊まるつて言つたら、それが定番だよな」

「そう言つて、アクセルを強く踏んだ。

急な坂にかかり、眠つている皆の頭が「こと」と揺れて、いくつかの頭は起き上がつた。

「もう着いたの？」

隣で、先生が眠そうな声を上げる。

「後少し」

幹士はそう言つて先生を見た際、その頭の上にちょこんと青葉が載つてゐるのに気付く。幹士はそれを掴むと、ぽいと外へ投げ捨てた。青葉は風によつて舞い上がり、山を見渡せる高さまで上昇する。その葉の先が、鬱蒼とした林の中で、唯一ぽつかりと開いた一つの空間を指差す。そこには大きな洋館が佇んでいた。まるでそこだけが外界と切り離されているような、そんな幻想的な空氣を滲み出させて。

「でかいな……」「

思わず震えた声が喉から漏れる。

その古びた洋館の前に前庭が広がり、中央の噴水を色々の花壇が囲んで、さらにその周囲を、高い木々が並列している。

「幹士の叔父さんって、ありえないね。こんなところに、広い敷地持ってるんだから」

幸美の声に、「資産家だからな」と返す。

「とりあえず、車置いてこなくちゃな。……先生」

「あ、うん」

周囲の景色に見入つてた先生が頷き、車に近づく。幹士は幸美に、「荷物を、玄関まで運んでおいてくれ

と、足元に置かれた荷物の山を視線で指し、運転席に乗つた。そして。

「いい加減、起きやがれ、アホ」

未だシートに寝そべつてた基喜へ、空のペットボトルを投げつける。

基喜は耳を搔きながら起き上がり、首を左右へ振り向いた。

「…………どこだ、ここ」

「寝惚けてないで、わざわざと降りる。お前の荷物、下敷きになつてるや」

基喜は視線を窓の外へ向け、荷物の山の土台になつた一つのボストンバッグに気付き、「ひつでえ！」と叫ぶ。

すぐさま車から飛び降りると、基喜はボストンバッグを引き抜いた。山が崩れる。

「何すんのよ！」

幸美が駆け寄つて、二つある自分のバックをぎゅっと抱きしめる。

「基喜。どうしてくれるんだ……これ、ブランド物だぞ」

鈴木が、自分の鞄を慎重にぽんぽんと叩きながら、地獄の眼差しを基喜に向ける。

「何で、俺の所為なんだよ！　自業自得だ！」

そう威勢良く言い返すものの、基喜の足は徐々に後ずさり始める。唯一、美代子だけが、「まあまあ」と彼女達を宥めようとしていた。春芳は興味なさげに花壇を見ている。

「大体お前、口調とか性格とか、男っぽい癖に、こいつことだけは女みたいに細かいんだな！」

その声が響くと同時に、幹士は「……終わったな」とつぶやいて、エンジンをかけた。助手席の先生も、終わったわね、と続く。発進すると同時に、基喜が澄子に耳につけたピアスを引っ張られて、悲鳴を上げているのがサイドミラーに映った。

「相変わらず、賑やかね」

煙草に火をつけながらそつまつ先生。

「美世ちゃん、煙草俺にも」

幹士は助手席へ、顎を突き出す。

「何よ、その呼び名。やめなさいよ」

先生は箱から一本抜き取り、幹士の突き出た脣に差し、火を近づけてやる。

「……やつぱり、こんな広い敷地に七人つていつのは、寂しいんじやないかしら」

先生は口紅の付いた煙草を離し、白い煙をなびかせた。

「そんなことないですよ。このくらい広くてちょうど良いんです」

そう言つて、「ほひり」とサイドミラーの中で騒いでいる基喜

たちを顎で示す。

「そうね……違いないわ」

先生はそつ肩を揺らして笑つた。

「……この辺ですね」

建物の横に敷かれた石畳の上に車を停止させる。

「やつと今日の労働が終わつた……」

「「」苦労様、幹士君」

二人は同時に降りて、向かい合つてドアを閉じた。幹士は後ろへ振り返ると、田の前の洋館を見上げる。

「荷物はもう運んだから、さつさと扉を開けてくれ」

玄関へ来ると、春芳が、上着を脱いだワイシャツ姿で急かすように言つ。

「そう焦るなよ」

幹士は鋆びた鉄のノブを握り、懐から鍵束を出して差し込ませる。鍵がなかなか回りにくく、強く捻ると、やつと施錠が解かれた。

「どうぞ」

そう言つて中に入る。そして、田の前に広がる景色を見つめて、「……写真どおり、だな」とつぶやく。

視界に收まりきれない広いホール。その正面にある木製の階段。吹き抜けになつていて、二階の廊下の欄干が視界の端から端まで伸びている。

ホールの左の壁には食堂へ通じるドアがあり、対して右の壁は半分ほどで途切れ、その先は広間へ続く通路になつていて。それから頭上を仰ぐと、シャンデリア風の照明が爛々と輝いていた。

「……ここ、押すよ」

美代子が横の壁のスイッチを押す。シャンデリアから黄色い光が降りる。

「すげー」

基喜が間抜けた声を上げながら、階段の前にボストンバックを降ろした。それにみんなが続き、バックの上に次々と荷物を置いていく。

「おいお前ら！ また俺のバックの上に乗せやがって！」

基喜の非難の声に誰一人耳を傾けない。

幹士達は一階へ上ると、狭い通路に並ぶドアを開いて、部屋をチェックし、その後で振り分けを行うことになった。

「一つ部屋があれば、それで事足りるじゃん」

そう提案する基喜に、澄子が再びピアスを引っ張つて、「テンション下げさせるな」と、引き伸ばされて大きくなつたその耳に囁く。すみません、すみません、と基喜は悶えながら謝つた。

結局、階段から向かつて左の廊下の部屋を女子、男子はその反対を使うことになつた。

各自荷物を持つて部屋へ向かい、幹士はその際に「幸美」と声をかける。

「俺さ、後でそつちの部屋に……」

そう言いかかると、振り向いた幸美は嬉しそうに頷いて、「荷物置いたらすぐ行くから」

と言つて、早足で廊下の先へ消えていった。基喜が背後で、「ごちそうさん」とにやけながらつぶやいく。

幹士は「つるせえ」と言いながら、ドアを開く。

部屋には、大きなベッドが一つと、壁の隅に使い古された机があつた。

その他には正面の壁に、一つだけ窓があり、その黄色いカーテンの隙間から、部屋の中央に敷かれた灰色のカーペットに光の模様が降りていた。

幹士は机へ近寄つて、その前に鞄を降ろす。

机の表面に目を近づけると、文字のような、かくかくした線の羅列が、至る所にあつた。机に載つた空の本立てを見てみると、埃で真つ白になつてゐる。

幹士はティッシュを取り出して埃を拭き取り、それから机の下に引き出しがあるのに気づいて、手を伸ばした。

一段、二段と、何もないように思われたけれど、二段目の奥に、四角い木箱が入つていた。

幹士は取り出して、顔に近づける。

「オルゴールか」

金色の鍵穴に、金色の蓋縁。すしりとした重さを手に味わいながら

ら、少し傾けて眺める。

「ふーん……誰のかな、これ」

そうつぶやきながら、オルゴールを戻そうと手を下ろす。その時、カーテンの隙間から雄大な景色が目に付き感嘆の声を漏らした。その途端、手から、その重い感触がずれ落ちた。

鈍い音を立てて、それは足元に転がる。幹土は慌てて、「……壊れたか?」としゃがみ込んだ。

その時、蓋の開いた箱から音が流れ出した。それは、瞼の重くなるような、夢のような物語を紡ぎだす。

幹土は箱を手に取つて耳に近づけてから、その箱の中の精密なオルゴールをじっと眺める。それは傷一つなく、どんなに大切にされていたか、すぐにわかる。

「……まずいことしたな。蓋、壊れちまつたか?」

オルゴールの蓋を開け閉めしてみる。

「大丈夫か……」

それを元の場所へ戻すと、後ろめたそうに見下ろす。音はゆっくりと途切れ始め、そしてすぐに止まつた。

……なんだ、この感じ。

上着の胸の辺りをぎゅっと握り締める。

懐かしさにも似た感情。それでいて、どこかもの悲しくて、胸を締め付けられるような。

「幹土」

振り向くと、幸美が戸口に立つていた。

幹土は、すぐに笑顔に切り替え、引き出しを無造作に閉めた。

「幹土の部屋、広いよねえ」

幸美は近づいてきて、窓の外へ身を乗り出した。

「危ないぞ」

そんな幹土の声を気にした様子もなく、彼女は欄干に寄りかかって、新鮮な目で山の景色を眺める。

「来て良かつたね」

幹士も彼女の横から顔を外へ覗かせつつ、ああ、と頷く。

「本当は、二人で来ても、良かつたんだけどね」「けど、皆で来れば、それはそれで楽しいし」

幸美は、「うん」とうなずき、

「この洋館、黄、誰かが住んでたんでしょう？」

「……まあ、そななだけど。叔父さんが言つには、親戚が戦前から使用してた建物なんだってさ」

「……どんな人達が住んでたの？」

「……叔父さんと同じ、資産家。うちの家系はどれだけすごいんだか」

そう言つと、ベッドに近づいて寝転がつた。

幸美も、窓から離れて、幹士の隣に座る。少し沈黙が流れた後に、彼女は口を開き、

「どうなの、あのサークルの人達とは」

「どうつて……加賀も春芳も、いい奴だよ。基喜は、高校の時と何も変わってないけど」

「美代子さんつて、良い子だよね」

「どんなところが？」

「落ち着いてて、礼儀正しいところとか」

幹士は目を開け、幸美の方へ振り向く。彼女は、視線を床へ落としながら、どこか不安そうに微笑んでいた。

「気をつけていれば、大丈夫だよ、きっと」

幹士は幸美を宥めるようにつぶやく。幸美はでも、とつぶやいたが、その後に無言で頷いた。

幹士が「大丈夫だつて」ともつて一度言つて、彼女の頬へ手を伸ばしかけたその時、

「幹士君。皆、もつ下に降りてるわよ。昼食番には、お呼びがかかつてゐる」

ノックをしてくる先生に、幹士は体を起こして、「すぐ行きます」と返事をする。

「今日は、俺達が作るのか」

「……面倒ね」

「どこか暗いままの幸美の声に、

「そんなこと言つてたら、うまいもん作れないぞ」

そう軽快に言つて廊下へ出ると、その奥へと歩き出してた先生が振り返つて、

「なんだ幸美、幹土君の部屋にいたのね」

と、にやけた笑みを浮べて引き返してくる。

「この三人でなら、なんとかうまいもん作れるかな」

ふとぽつりと言つと、

「私、無理よ。料理苦手なの」

先生が、言いにくそうにつぶやいた。

「同じく私も」

幹土はもう「存知よね」と言つばかりに、先生とは対称的に、事も無げにつぶやいた幸美。

「頼むわね、幹土君」

「頼んだよ、幹土」

女としての意地がかかつているのか、懇願するような二人の視線に、幹土は息を吐く。

「……やる気ねえなあ、あんたら」

他のメンバーは広間のソファーに座つて、勝手に取り出したティーカップに、湯気を立ち上らせて談笑していた。幹土達が来ると、基喜が、ステーキだの中華だの、無茶なリクエストをし始める。

「そもそもそれを作れる素材がない。……却下」

幹土が冷たくそう言い放つと、

「幹土の料理か。あまり高望みしない方が良いかもな」

澄子がからかうように言つた。むつとした幹土は、

「なら、お前が作れよ。……もつとも、男装の麗人さんに、作れるのなら、の話だけと」

そう鼻先で笑う。すると、澄子は結構堪えたのか、唇を結んで肩を震わせる。そして突然、

「良いぞ、やつてやる」

その長い足で地面を踏み鳴らして立ち上ると、厨房へ歩いていつてしまつた。「ちょっと、澄子」とその後を追つ幸美。

「あーあ。やつちやつたな、幹士

基喜が、唾然としてる幹士をはやし立てる。

「……つたく。これだから、短気な女は」

幹士は首を振つて、隣で笑つてる先生を「行きましょう」と促して、向かつた。

ホールから厨房へと入ると、がらりと空気が変わつた。というのも、部屋全体が新しく改装されてて、キッチンなんて一度も使われてないんぢやないかと思つくらい。

澄子と肩を並べ、争つように食材を洗つていると、

「幹士、お皿、どこにあるの？」

幸美が背後から声をかけてきた。

「……えつと、確かこつちだ」

流し台から離れ、食堂へ通じるドアを開けた。

幸美を連れて食堂へ入つていくその背中を、澄子は横目で見遣つて、ふん、と鼻息を漏らす。

薄暗い食堂の奥の棚に近寄り、皿を取り出して、一人で厨房へ持ち込む。そして、テーブルの上に降ろすと、幹士は氣付いたように幸美の首下を見た。

「幸美、エプロンは？」

忘れちやつたの、と苦笑する幸美。

すると、幹士は自分の背中から紐を解き、彼女の背後へ回ると、それを結んであげた。

「ありがとう……でも、幹士のは？」

「俺、もう一枚持つてゐるから。……取つてくる

幹士は再び階段を上って、自分の部屋の前まで来ると、ノブを引いた。そして、目を瞠つた。窓の前で、小さな影がこちらを向く。少女はその細い足を前へ出して、机に近づこうとしたまま、こちらを見て固まつている。一重瞼の瞳が見開かれ、少女の唇は何かを言おうとする。幹士は、

「誰?」

と、呆然と訊いた。

「誰」

ほぼ同時に訊き返し、少女はゆっくりと後ろの窓へ後ずさる。長い黒髪が、黒いワンピースの背中に溶け込むように揺れた。その顔をじつと見た瞬間、心臓が大きく飛び跳ねた。

この子は。

その顔の輪郭は、記憶に残るあの人のそれと一致し、目、鼻、口

—その一つ一つに、胸が搔き立てられる。

幹士は、ゆっくりと少女に近づき、見下ろした。彼女も、じつと見返してくれる。

そうしてお互ひの目の奥深くから、何かを探し出そうとしたけれど、その無言の会話は、カーテンが突然彼女の首に絡みついたことで、遮られた。

「んつ　んつ！」

声を詰まらせる少女の首に、ますますそれは絡みつき、彼女はもがいて、苦しげに手をぱんぱんと背後の壁へ叩きつけた。そして、彼女の上体が仰け反り　開いた窓の方へ傾く。

「危なッ」

幹士は手を伸ばして背中を抱きとめる。

「ぶはッ」

少女の顔が、カーテンの中から滑り出でてきた。幹士は倒れかけた少女の体を立ち上がらせて、一息吐く。

ありがとう　少女が首に手を当てて咳をしながらつぶやく。

「……親戚の子か?」

そう訊きながら、幹士は窓を閉める。

「もしかして、親戚の人？」

またも同じように訊き返してきて、幹士は「そう。親戚の人」と

頷き、

「天富 幹士って言つんだ」

「私もよ」

少女はそう言つと笑つて、「天富 ミキ」と、明るくつぶやいた。すると、幹士は子供に向ける優しげな笑みで、

「ミキさんは、なんでこの洋館にいるのかな？」

そう訊いてみる。ミキは少し驚いたように、

「私は、あなた達が来る前からここにいたわ。突然やつてきたから、泥棒かと思って隠れてたの」

そこに、と彼女は机の下を指差す。幹士は田を点にする。

「……どういうことだ？」

額に手を当てて考える。、

「こに泊まつてている訳じゃないよな？」

泊まつてるわ。平然とそう切り返す少女。

「……マジかよ」

幹士は深く溜息を吐く。

「叔父さんなら絶対事情知つてるな、きっと」

……知つて何も言わなかつたんだ、あの資産家。

「じゃあミキさん、とりあえず下へ降りて、叔父さんに電話しそうか。そうすれば、ジこの家の子なのかもはつきつする」

「嫌よ」

ミキは、つんとした顔でそう首を振る。

「面倒だもの」

幹士は、見た目と裏腹な彼女の性格に衝撃を受けながら、

「それでも、電話しないと駄目だ」

少し強く言つた。すると、ミキはむ、と唸つた後、わかつたわよ、と肩をすくめる。

幹士は少女を促して、階段を降りた。

広間に来ると、騒いでいる基喜の背後を通り過ぎ、棚の上にある

黒電話の受話器を掴む。

そこで、広間の連中が彼女に気づき、驚いた声を上げる。

「誰だ、その子」

基喜が啞然として言つた。

「俺の子」

えー！ と、美代子が素つ頓狂な声を上げる。

春芳は耳を塞いで、嘘に決まつてゐるだら、と眉をしかめて美代子に言つ。

「俺の親戚の子だよ」

幹士がそう言い直すと、ミキは好奇の視線を三人の顔へ向けて、彼らの座るソファーハと近づき、美代子の隣に腰を下ろした。そして、彼女のティーカップの側にあつた、角砂糖を盛つたミニーボウルから、一つ掴んで頬張つた。

そんな飄々とした彼女の様子に、思わず笑みを零した時、突然、もしもし、と中年の男の声が耳に響いた。

「あ……叔父さん？」

「幹士か？」

どこか沈んだ叔父さんの声。

「これは、どういうことだよ」

「……すまない。親戚の子が一人、そっちにいるだろ。ミキといふ名前の子なんだが」

「聞いた」

「……ミキちゃんは、前からそこの洋館に行きたってずっと言つてたらしくて。お前が友達連れてそこに行くことを、ふと彼女の母親に話したら、それはちょうど良いわって、喜び出してな……」

「そつか、わかつた。ミキさんつてもしかして、良子おばさんの娘だろ？ ……赤ん坊の時、会つた以来だな」

幹士は途端に懐かしそうな表情で、ちらりとミキを見遣つた。

「……ミキちゃん、似ているだろ？……す」「へへ」

突然そつ訊いてきた叔父さんの声はどこか暗い。

幹士は視線を伏せて、「ああ、良く似てるよ。あの人」と頷いて、ミキを見つめる。

「……良子は、幹士君にならミキを任せられた、って言つてな。……今朝、使用人にミキちゃんを洋館まで送らせたんだ。ミキの世話を役よろしくね、と良子から伝言だ」

「どうして断らなかつたんだよ」

「私は断つたさ。けれど、後で電話がかかつてきてな、それがミキちゃんからだつたんだ。……私、ずっとあの洋館に行きたいって思つてたの、ありがとう、叔父さん。そんな嬉しそうな声をかけられたら、もう断るわけにはいかないだろ？」

「あの叔母さん、そんなことを……」

……つまり、叔母さんは、「OK貰つたわよ」とミキさんに嘘を言つて。何も知らないミキさんは大喜びして。そして、さらに、ちゃんとお礼の電話かけておきなさいよ、とミキさんに言つたんだろう。……なんていう凶行手段。俺が電話取つても、抵抗するの無理だ、絶対。

「俺にそのことを伝えて、もし、行くの止めるなんて言い出されたら困るから、今の今までずっと黙つてたわけか……」

「すまない、幹士」

幹士は笑みを浮べて、叔父さんらしいな、とつぶやく。

「だから……ミキちゃんのことば、」

「わかつたよ。平氣。じつちで預かるかい。……何日間、居るんだ？」

「帰る時は幹士と一緒に、と良子は言つてきつてる」

「俺の家まで、連れてくればいいんだな？」

叔父さんは、「そうだ」と安心したような声で言い、

「物分りが良くて助かる。……お前の友達には、迷惑かけてしまつから謝つておいてくれ。……仕事中だからもう切るが、何かあった

ら掛け直せ。……旅行、楽しんでな、幹士」

「ありがとう、叔父さん」

それだけ言って、受話器を下ろした。そして、振り向くと、

「幹士兄さん。誰と話していたの？」

口いっぱい砂糖を詰め込んだひょうたん顔をもじもじ言わせて、ミキが訊いてくる。

「天富 義一。俺の叔父さん」

幹士は行儀悪いぞと呟つように顎をしかめて彼女を見て、ソファ一へ座る。

美代子がカップに紅茶を淹れて、ミキに差し出すと、ありがとう、とでも言いたいのか、彼女は口から雜音を漏らして、カップに赤い唇を付けた。

「マナーといつものまがこの世にあることはじ存知かな、ミキさん」幹士の声に、ミキは返事を返さず とこうより何も言う事ができず、ただ音を立てて紅茶を啜つた。そうして口の中が空になると、「知ってるわ、義一叔父さん。昔、病気で寝込んでる私に、花束を一杯贈つてくれたの」

「そりなんだ。ほり、皆に自己紹介して。これから世話になるんだから」

ミキは観念したよつに頷いて、口を開く。

「天富ミキです。……十三歳になります」

ぶつきらぼうこつぶやいて、静かに立ち上がると、お辞儀をした。その緩やかな動作に驚く。

顔を上げると、ミキは「よろしくお願ひします」と、高らかに言った。

一瞬、ミキがどこかのお嬢様に見えて、啞然としたけれど、彼女が腰を下ろすと、

「ごめんな。迷惑はかけさせないから」

と無言のままの三人に言つ。

「気にするな、幹士。一人一人居たつて大して変わらない」

春芳が微笑んで言った。その横で、基喜が、「良いつて良いつて」

と、どうでも良さそうに片手を振る。一方の美代子は、膝に手を当てたまま、良いや、とだけ。

「悪いな」

そう言って、苦笑を浮べた後に、視線をミキへ戻すと、彼女は鼻歌を歌いながら、角砂糖を積み重ねてピラミッドを作り始めていた。幹土は、再び額にミミズを復活させる。

ミキを厨房に連れて行くと、幸美がちょうどエプロン姿で出てきた。

「どこ行ったのよ」

そう眉をひそめて けれど、すぐに幹士の隣に佇んでいる少女に気付き、「誰、その娘」と啞然とする。

「どこでたんだ……幹、」

続いて出てきた澄子と先生が同じような反応を繰り返したのを見届けると、苦笑しながら事情を説明した。

「幹士の親戚の子なのね」

幸美はミキの手を取つて、名前は何て言つの？ 今いくつなの？ と彼女に喋りかける。

「天富ミキとあります。十三歳になりました」

ミキは幸美が気に入ったのか、退屈そうな態度をこじりと変えて、憎らしげほどに明るい笑顔で答える。

「よろしくね、ミキちゃん」

「よろしくな」

先生と澄子もそう言つて、緩みきつた頬を彼女に向けて近づいた。ミキは澄子と先生を、值踏みを踏むように、足先から頭のてっぺんまでじっと眺めた。

「鈴木は、高校の時の同級生で、幸美の親友なんだ。それでこの人は、」

「私は昔、幹士君の担任をやつていたの」

先生が言葉を遮つて、説明する。幹士は頷き、

「……そういうこと。先生には昔から色々と世話になりっぱなしでね。明るくて美人なんだけど、どういう訳か、男運に恵まれてないようで、」

ね、先生、と幹士は先生に視線を向ける。

「そんな紹介の仕方、ないでしょ」

先生は眉を寄せて、頬を膨らます。

「へえ……」おばさん、先生なんだ

ミキの声に、先生の表情がぴくりと震えて歪み、そして、彼女は堪えるように肩を震わせる。

幹土はうわ、と同情の視線を先生に送った。

「やうなのよ。私、教師をやっててね。色々と大変な職業なんだけど、やりがいはあるわよ。……ミキさんも、担任の先生をあまり困らせたりや駄目よ?」

かるうじで口だけは動いているが、その声は無常と哀しみに震えていた。

先生の言葉を聞いたミキは眉を寄せて、視線を逸らし、「困らせようにも、困らせられないもの」と、ぽつりと零した。幹土はそのつぶやきに気付かず、「……じゃ、とりあえずもう作業に戻るか。……な？」

幸美と澄子に視線を向けると、彼女達は頷いた。

「ミキさんは、広間で待ってなさい」

はーい、とミキは再びつまらなげな顔で、背中で腕を組みながら歩いていく。

その時突然、幹土の脛に、横蹴りが直撃した。

「痛つてッ！」

片足を抱えて振り向くと、先生がにっこりと穏やかな笑みをこちらに向けていた。男運に恵まれなくて、悪かったわね、と静かにつぶやく。

「終わつたな、幹土」

そんなスマートな鈴木の声が背後から聞こえた。

食堂の長細いテーブルは、パスタにかけられたソースの鮮やかな色に、華やかに飾られていた。それを囲つように、木の椅子が並べられて、皆はそれに座つて談笑している。

年月を思わせる食堂の古い壁には、不釣合いな新品のHアコンが設置され、手持ちふたさなミキがそのリモコンをピッシュピッシュピッシュと鳴らせて悪戯する。

「やめろよ、壊れるだろ。ビリしてミキちゃんは、そう悪戯ばっかりするんだよ？」

「暇だと、勝手に手が動いてしまつのよ」

幹士がリモコンを引ったくる。

「……お前の怒り方って、凄みがないな」

見ていた澄子が、肩をすくめる。彼女は、スーツワンピから、涼しい水色のシャツにジーンズといったラフな格好に着替え、プロボーションの良さがますます強調されてる。

隣で美代子が、目を丸くして、「すごいなあ……」とその胸元を見つぶやいているのに本人は気付かずに、フライドポテトを頬張つている。

「だつて幹士は、子供好きだから仕方ねえよ。」いつ、子供や婆さんにはとことん優しいんだよ」

基喜が澄子にそう返すと、将来は親馬鹿ね、幹士君、と一番端の席の先生が笑う。

「何とでも、言つてろ。……じゃあ、皆揃つたことだし、食うとするか。……春芳」

春芳は無言で頷き、数本のシャンパンの瓶を開けて、それを回していく。

「じゃあ、久しぶりの旅行に 乾杯！」

基喜がグラスを掲げると、皆のグラスが一斉に上がり、ガラスのぶつかり合う軽快な音が食堂に響いた。

「お前、よくこんなの作れたな」

さつそく豪快に食べ始めた基喜が、口の端からパスタを垂らしながら、もじもじ言つ。

「当たり前だ。よく家で作るからな。一人暮らしだし、俺」

すると、澄子が悪戯っぽく笑い、

「そりゃ? 家には、もう一人の同居人がいるだろ?」

すると、ミキが不思議そうに幹士を見る。

「いるかよ、馬鹿!」

幸美は、聞こえていない振りをして、グラスを一気に煽り、朱に染まった頬をガラスに映す。

「幹士兄さん、誰かと住んでるの?」

ミキが、無垢な目で幹士を見る。

「いないいない。こいつらの言つ事は信じるな、ミキさん」

幸美はグラスを置きながら、ふと向かいの席に座った美代子を見遣る。

彼女は、会話に参加しようと何度も口を開こうとするが、言い出せずに、下を向いてしまう。

幸美は微笑んで、彼女に声をかけようとすると、ちょうどその時、美代子は意を決したように隣の基喜の、空の皿を取り、パスタをよそつて差し出した。彼女の頬は赤くなる。

「おっ、サンキュー。さすが気が利くな、加賀は」

基喜は、軽快に笑つて、

「どつかのオトコ女とは、訳が違う」

と澄子に視線を向ける。

「何だと、基喜」

ピアスのついた耳に手を伸ばしかける澄子に、基喜が、すみませんすみません、と彼女のグラスにシャンパンを注ぐ。

幸美は、美代子の真っ赤な嬉しそうな顔を見て、なるほどね、と人知れず笑い、自分の空のグラスを満たした。

「ミキちゃんも、いる?」

にっこりとミキに笑みを向ける。ミキは、人形のような白い顔を頷かせた。

シャンパンを注いでやると、ミキはそつとグラスに口をつけ、静かにテーブルに下ろした。その優雅な仕草に、思わず目を釘付けにしていると、彼女がこちらを見て、目が合つた。幸美は慌てて微笑

みを取り繕つて、視線を皿に向けなおす。

……どこかのお嬢様のかしら。

幸美はフォークにパスタを巻きつけながら、けらけらともう一度笑を見て思った。

「春芳君、さつきから静かね」

先生が、黙々と食事を進めている春芳に声をかける。

「食事中は、話さないのが主義なんです」

無機質な声でそう告げ、上品にフォークを扱う春芳。

「春芳君は、彼女はいるのかしら?」

「恋愛とかには興味ないんです」

「そりなんだ。でも、それってあまりにつまらなくない? ……なんなら、私と付き合つてみる?」

パスタを飲み込んだばかりの春芳は大きく咽て、慌ててグラスを煽ぐ。

「な、何ですか。いきなり……」

「冗談よ、冗談」

先生はどこか憎めない笑みでそう言つ。春芳は、調子狂つなあとばかりに彼女を見た。

「春芳君は、なんでこの旅行に参加したの?」

「幹士が誘つてくれたからです」

すぐにそう切り返す春芳に、先生は、ふーん、と探るよつにその顔を見て、

「どうして幹士君だと、良いわけ?」

と訊く。すると、春芳は真顔で黙つて、何か考えるよつにフォークの動きを止めた後、

「たぶん、似ているからだと思います。俺に」

ふーん、と先生は、楽しそうに他のメンバーと会話している幹士を見遣つて、

「何となく、春芳君の言つてること、わかるよつな気がするな。幹

土君つて、すぐ仲間想いで……寂しがり屋さんだから

春芳はそれには答えずに、また無表情に戻つてフォークを動かし始めた。再び心を引っ込めてしまつた春芳に、先生は、つれないわね、とばかりに息を吐く。パスタのハーブの葉が、その息にくるりと回つた。

食後、皆で一丸となつて重い腹を引きずらせて前庭を散歩してから、広間へ戻つてきた。

ミキは、ふああ、とこちらへ喉仏をのぞかせて欠伸すると、「少し寝してくる」と大きな目をとろんとさせて、広間を出て行つた。皆でテーブルを囲み、紅茶を飲む中、

「午後、どうしようかな」

ソファーに寄りかかつてぽつりとつぶやいた幹土に、幸美は突然思い出したように口を開いた。

「良いものがあるの。ちょっと待つてて」

目を輝かせて、広間を駆け出て行く。

「……なんだ、あいつ

基喜が眉をひそめる。嫌な予感がするらしい。

しばらくすると、幸美は大きなバックを抱えて戻つてきた。

「何、その荷物」

呆然とバックを見て言う。

「ふふふ。これはね……」

幸美は上機嫌にバックのジッパーを下ろし始める。まさか……と、持つてたカップを下ろす幹土。

「そのまさかよ」

バックから飛び出したのは、大分くたびれた感じの大きな紙の箱

その表面には、エアホッケーという文字が。

「持つてきたのか……」

呆れたように息を吐く幹土。

「道理で重いと思つたら……こんなもん入れてたのかよ、お前！」

今朝の重労働を思い出したのか、基喜が人差し指を幸美に向けて、まくし立てる。

「誰が何持つて来ようと、勝手でしょ」

幸美は澄ました顔で箱を開けると、ニアホッケーの台を絨毯に置いた。そして、

「やううよ

笑顔を上げて言つ。しかし、幹士は「俺はいい」と首を振る。

「なんですよ。幹士、これ好きじゃん。久しづつにやううよ」

幹士は頬を指先で搔きながら、苦笑する。

「ここまで来てやるもの……なんていうか……ちょっとな」

……だつて、やり出すと、妙なライバル意識燃やして止まらなくなるんだよな、こいつ。

「そんなんあ……」

落胆して、絨毯にひれ伏す幸美。すると、

「幹士なんて放つておいて、私とやうう」

横から澄子が、身を乗り出す。

「俺も、やるぜ。……よく持つてきたな、赤司」

興味が湧いてきたのか、態度をころりと変える基喜。しかし、それを二人は無視して、さつさとマレットを手にし、盤を挟み合つ。

「おい！　聞いてんのかよ！」

すると、お茶を飲んでいた春芳が眉をしかめ、つるをことばかりにカップを強く置く。

「スイッチオンつと」

幸美がスイッチを入れると、盤上から空気が噴出す。基喜は、おおつと叫びながら、ぺたりと頬を盤につけて、涼しそうな顔をする。

「それじゃ幸美。じやんけん……」

顔をへばりつかせている基喜の頭上で、二人は「ほん」と手を出す。

「よし、私からだ」

鈴木はパックを盤上に載せると、すぐにそれをマレットで弾いた。つこりと皿を細めていた基喜の頭に、軽快に当たる。

「何しゃがる、このオトコ女！」

澄子に掴みかかるとする基喜を、美代子が、まあまあ、と後ろから押さえた。その時、

「あら。何やつてるの？」

部屋から戻ってきた先生が、興味深げに覗いてくる。

「じ覽の通りのエアホッケー。先生もやつたらどう？」

幸美はそう言つて、澄子の腕の間に猛烈な速さでパックを貫通させる。澄子は「なんだ、お前」と呆然と幸美を見る。

「あら。うまいじゃない

「だてこの十年間、練習してきた訳じゃないもの。……ね、幹士？」

幹士は「ああ」と苦笑する。澄子と基喜が、何だよそれ、とばかりに非難がましく幸美を見た。それを眺める先生は、「ふふふ」と笑つて、

「私は中庭を散歩してくるわ。……春芳君もどう？」

突然振られた春芳は、危うく口の中のものを零しかける。

「……いい、いいです」

つれないわねえ、と先生は笑つて、広間を鼻歌交じりに出て行った。春芳はその背中を見送ると、溜息を吐いてカシップを下ろす。その時突然、

「……おい、赤司。さっきから幹士が寂しそうにお前を見てるぞ」

基喜の声に、え？ と嬉しそうに振り返る幸美。その隙に、基喜は彼女を足蹴りして、席を陣取る。

「よし、やるぞ。鈴木」

予備用のマレットを手にして、にやける基喜。

「お前とはやる気がしない」

やう言つと、澄子はあっけなくマレットを放り捨てる。「んだけど！」と、またしても顔を真っ赤にするが、しかしすぐに表情を緩め、

「……まあ良い。加賀、一緒にやるつ」

傍観していた美代子は、突然話を振られて、えつ！？ と肩を飛び跳ねる。

「そうだ。加賀さん、君がやれ」

マレットを差し出す澄子。美代子は、えつと……、と視線をめぐらせた後、恐る恐る受け取る。顔が真っ赤だ。

「よし、俺から先攻な」

さつそく基喜はパックを弾き、美代子はきやつ、と何故か悲鳴を上げて慌てて弾く。するとパックは、高速で、幾重にも折れ曲がる軌跡を描き、おまけに基喜の腕を弾いて、ゴールした。

やるじゃねえか。そう言つた基喜は、引きつた笑みを浮べていた。

幹士はぼんやりと、エアホッケーを続けている幸美と澄子の姿を眺めていた。横では、基喜が力尽きたようにぐつたりと伸びている。

「大丈夫？」

白目を剥いているその顔を、美代子は心配げに覗きこんでいる。春芳はというと、何杯目かの紅茶をカップに注いでいるところだ。向かい合つて、わいわいとホッケーを続けている二人。大分慣れてきたのか、澄子が何度もゴールを決める。そんな時は、いつも澄ました感じの彼女の顔が嬉しそうに目を細めた。

幹士は微笑みながら、その笑顔をじっと見つめる。

けれど、そんな自分にふと気付いて、幹士は慌てて視線をずらしてホッケーの台を見た。何やつてんだ、俺。

「きつと……昔の名残つてやつだな」

そう囁いて、苦笑する。しかし、その時突然、バンッ、と大きな音と共に、足元にマレットが回転し転がってきた。視線を上げる。

「大丈夫、澄子？」

駆け寄る幸美に、澄子は自分の指を押さえながら、痛つて……と、唇を結ぶ。その細い指を伝う赤い雲。

「どうした！？」

幹士は目を見開いて、立ち上がつて澄子の横に屈む。

「大丈夫だ。突き指……かな」

痛みをかみ殺しながらつぶやく澄子に、幹士は

「大丈夫つて……結構ひどいんじやないのか、これ」と、指を押さえる彼女の手に、自分の手を重ねる。

「突き指つて確か……引っ張ると良いんじやなかつたつけ」

起き上がつた基喜が、ぽつりとつぶやく。すると、「いつの時代の噂だ、馬鹿」と春芳が言い、

「突き指したら、冷やすのが普通だろ。誰か、ビニール袋持つてくれ」

「幸美、持つてきてくれ」

幹士はすぐにそう言うが、幸美は、「大丈夫？」と心配げに、澄子の背中に手を当てたまま動かない。

聞いてるのか？ と幹士はつぶやき、顔を険しくさせ、

「幸美、ビニール袋持つて来いつて言つてるだろ！」

と怒鳴る。幸美は唖然と幹士を見る。

「大体お前、あんなに本気出すことないだろ！ だから、こんなことになつたんだぞ！」

澄子の手を掴んでそう叫ぶと、幸美は幹士を睨み、

「何よ、それ！ 私はただ……！」

「……何、喧嘩してんだよ、お前ら」

ソファーから立ち上がつた基喜が、冷ややかな視線で一人を見て、

「おい、加賀。……悪いが、持つてきてくれ。あるだろ、ビニール袋くらい」

と、背後の美代子へ、振り向かずに言つ。つん、と美代子は戸惑いがちに頷くと、すぐに広間を出て行く。続いて、春芳が黙つてこちらへ振り返つた後、何かを取りに小走りに出て行つた。

「大丈夫だ、幹士……」

澄子は苦笑して、心配そうにのぞきこんでくる幹士の顔を押し退

かせる。そして、痛、と田元をぴくりとさせた。

「こんなエアホッケーぐらいで怪我してんじゃねえよ、馬鹿」

幹士は、テーブルにあるティッシュを引き抜き、それを彼女の指に巻き付ける。白い生地に赤い染みが広がり始め、それを握る幹士の指が濡れ始める。

幸美は、陥しく眉をよせながら立ち上ると、一人から離れてソファーに座り、顔を背ける。

基喜は、やれやれとばかりに肩を竦めて、ソファーに踏ん反り返つた。

「ほら、これで冷やせ」

氷を詰めたビニール袋を持ってきて、無表情で渡してくる春芳。サンキュー、と幹士は受け取つて、澄子の手をテーブルに寝かせ、その上に袋を当てる。

「どうしたの？」

先生が美代子を携えて、真剣な顔で広間に入つてくる。澄子を見ると、その隣に膝をついて、冷やしている手をじっと見る。

「突き指ですよ。ただの」

澄子はそう言つて、「大体、お前は大げさすぎる」と、横に居る幹士へ視線を向ける、それに無言で苦笑する幹士。

「大変だったんですよ、バカップルが喧嘩し出して。……」いつ時こそ、収め役の教師がいてくれなきゃあ

と、基喜が軽快に言つて、頭の後ろで手を組んだ。

先生は目を伏せて、本当ね、と頷き、「肝心な時に、何もできないのよね、私」と自分にしか聞こえない声で言つて、どこか寂しげな表情を浮べた。

夕食になつて、ようやく部屋から出てきたミキが、

「おやつの時間かしら?」

「おやつの時間かしら?」  
そうほんやりつぶやいてふらふら階段を下りてくるのを捕まえ、食堂に連れて行つた。

夕食中は、幸美とは会話することはなかつた。

食事の片付けの後、春芳と基喜を伴つて、風呂から出でると、

ちょうど先生とミキ、それに幸美の三人がこちらへ歩いてきた。

幹士は幸美をわざと見ないよつて、ミキにつっこりと笑みを向け、「今から、風呂か。この屋敷、男湯と女湯に分かれてるから、広々としてるぞ」

そう言つと、ミキは小首を上げてじつと幹士の顔を見つめた後、「阿呆ね、兄さんつて」

ぱつりとつぶやいた。

胸にぐさりと来るものを感じて、幹士は力なく笑いながら、どうしたこと? とつぶやく。

「確かに阿呆だ、幹士は」

横で頷いている基喜に、お前が言つたか、と睨む。

「確かに幹士君は阿呆だけビ、ミキちゃん、そんな風に言つ事ないんじやないの?」

あんたも言つてるから、とつぶやく。

「とにかく、行きましょう。おばさま」

ミキが、無表情でこちらを見遣りながら、顔をぴくぴくと悲しく引きつらせた先生の腕を引いて、女湯の暖簾を潜つていいく。ぽつんと一人残される幸美。彼女は我に返つて後に続こうとするが、

「行くぞ、春芳」

基喜がその前を行き、赤い暖簾を潜ろうとする。その襟首を掴んで、ずるずると引きずつていいく春芳は、意味ありげな視線を向けてくると、廊下の奥へ消えていった。一人だけ、ぽつんと廊下に残される。

「別に、怒つてないから」

俯いていた幸美が、にっこりと笑つて顔を上げた。

「悪かつたよ」

幹士は視線を逸らす。すると、幸美は、幹士の顔に自分の顔を近づけてきた。そして、

「阿呆」

「お前まで詮づか」

思わず顔を退けて、眉をしかめる。

「だつて幹士、本当は仲直りしたいくせに、自分からじや何にも言ってくれないんだもん。変に意地張つてないで、素直に、私とまたいちゃつきたいです、とおっしゃいなさい」

「はいはい、いちゃつきたいですよ、俺は、と幹士は唇を笑わせて肩をすくめる。

「それで、良し。じゃあ、私は入つてくるから、出できたら一緒にアイス食べよ」

幹士は「OK」と吹つ切れたように笑つて、歩き出す。幸美は暖簾を片手で上げたまま、幹士の背中へしばらく微笑を向けていたが、徐々に表情を消していった。

「……幹士の馬鹿。ホントはめちやくちや怒つてんだから」

雑誌をベッドに広げていると、突然ドアがノックされた。

「はい」

ドアを開くとそこには、Tシャツにトレーニングウェアという身なりの澄子が、長い髪を結えて、そっぽを向いて立っていた。

「何だ？ そんな照れ臭そうな顔して」

「誰もそんな顔してない！ ……とりあえず、入るぞ」

彼女の髪から、シャンプーの匂いが鼻を掠めて、胸がどくんと一鳴りする。

「肝試しに行かないか？」

ベッドに腰を下ろし、澄子は一重瞼をくわいに向ける。

肝試し？

「……俺は勘弁しておくよ。……こんな所まで来て、肝試しかよ、

お前……」

「だつて、つまらないだろ。」、「何にもなくて、刺激に嬉しいんだよ」

「夜は静かに過ごすもんだ

「……つまらない。行こう、幹士」

彼女は顔を不機嫌そうにして、じっとこちらを見てせがむ。

「仕方ねえなあ。でも、一人で行くのかよ

「それはつまらないに決まってる。誰か誘おう」

その時、ちょうど良いところに、春芳がドアをノックしてきた。

「幹士。開けるだ。良いか？」

「OKだ」

澄子が、勝手にそう言つ。春芳は、少し躊躇したのか、ノブを回したまま動かなかつたが、すぐにドアは開いた。

春芳は入つてくると、勝手に部屋の隅の、机の下の椅子に座つた。眼鏡をかけていない所為か、表情の無機質さに拍車がかかっている。「じゃあ、外海君にも、一緒についてきてもらおうか

これみよがしにそう提案する鈴木。春芳は、一人の顔を交互に見て、

「どう行くんだよ、お前達」

そう訊いた。幹士は、肝試しだつてさ、と肩を竦ませ、「やつぱりあそこしかないか」とつぶやく。すると、澄子が口を開き、「夜は外へ出ないよう約束したから、あと残つていろのは、」別棟か、と春芳がつぶやいた。澄子が「そつそつ」と満足げに頷く。

「確かにあんた、別棟に行きたいつて、昼間零してたな」

春芳は、澄子にそつぶつと言つた。

「とにかく、別棟。雰囲気出でて、凄く面白そう

澄子はそう言つて、口元をにやけさせる。

……どうせ、怖がつてて、俺を横からからかつてやねりつ、とでも思つてゐるんだわつ。

いいや、返り討ちにしてやる、と幹士は笑つ。

三人が部屋を出て、階段の前を通り過ぎた時、

「あれ？ どこ行くの？」

階段を上つてきた美代子と、鉢合わせした。

彼女は、ノースリーブの青いシャツに、ホットパンツという身軽さで、風呂帰りなのか、首にタオルをかけていた。

彼女は明るい笑顔を浮べていて、昼間よりはずつと打ち解けてくれているみたいだった。本当は結構明るい女の子なのかも、と少し身近に感じたりする。

澄子は悪戯っぽい笑みで、肝試しだ、とつぶやいた。春芳も、「そういうことだから、今から別棟に行くことになった」ぶつきらぼうにそう説明する。

すると、面白うううね、と美代子は首からタオルを下ろした。

「山奥まで来て、どうしてこんなことしなくちゃいけないんだ」

「山奥だから、だよ。こんな幻想的な雰囲気の場所でやるから、面白いんだ」

母屋と別棟の一階の廊下を結ぶ、細い空中廊下を歩いていると、窓から中庭が見える、そしてその先に、霞がかつた緑の色彩が広がつていた。

幹士はそれを見て、確かに幻想的だよな、と感慨深げに言つ。

「この建物だつて、すごく雰囲気出てるよ」

美代子が言つと、

「そうだな。この洋館、ゴシック様式だし、かなり本格的だからな」春芳が廊下の隅々を、機械的な目で見渡す。

「中庭から続く、別棟の入り口のペディメントなんか、相当装飾が凝つていたし」

独り言のようにつづぶやく春芳の、ほんやりと薄く浮き上がつた顔が、気のせいか、どこか楽しそうに見えた。

……春芳は普段、誰かとつるんで楽しそうにすることなんかないから、誘つてみて正解だったかも。

幹士は横顔を見ながら、そんなことを考える。

別棟の扉の前まで来ると、幹士は、懐から鍵束を取り出し開いた。

別棟の廊下は、窓から差す月明かりに、空中廊下よりもこくらか明るい。

「扉、開けたままにしておけ」

澄子が震えた声でそう言つて、扉を壁際で固定させる。……このつ、怖がつてゐるな。

春芳へ視線を移してみると、彼は動じた様子もなく、さつさと廊下を進み始めている。さすがといふか、何といふか。その時、突然腕を引つ張られる。美代子だつた。

「やつぱりやめた方が……」

「なら、一人で帰れば？」

そう悪戯つぽく笑つて言つと、腕を握つたまま、つひつ、と泣きそうな声で唸る美代子。

幹士は歩きながら、窓の欄干にそつと指で触れてみると、月明かりに指先を掲げると、灰色の粉がこびり付いていた。

……随分長い間、人は入つてなかつたみたいだな。

一ヶ月に数度、叔父さんに雇われた人がここへ掃除に来るといつても、比重は母屋の方が断然大きいのだろう。別棟の掃除は、もしかしたら数ヶ月に一度程度なのかも。

そこで、春芳から大分離れていることに気付き、

「おい、ちょっと待てよ」

と声をかける。それでも、春芳は立ち止まらず、さつさと進んでいく。

「何、あいつ」

無意識に幹士にべつたり体を寄せてゐる澄子が、敗北感を否めないのか、つまらなげに声を上げる。こんなはずじゃなかつたのに、とそんな感じ。

とはいつても、春芳のその動じない様子があつてこそ、幹士達の足が進んでいることも事実で。と、その時、突然幹士は呼吸が乱れてきたのを感じ、唇に手を当てた。

……まずい。やつぱり、来なければ良かつたか？

「どうした？ もしかして、怖いのか？」

澄子が薄暗い中で、悪戯っぽい笑みをのぞかせた。

「怖くなんて、ない……」

その声に本当に余裕がないことを感じたのか、澄子の目が真剣になる。

「大丈夫か、幹士？」

ああ、と幹士は苦しげに笑って、肩に置かれた彼女の手を払った。おい、と彼女が追及するのを無視し、幹士は逃げるよう早足で春芳に近づき、その後を歩く。手持ちぶたさになつた美代子は、しがみつく対象を、慌てて澄子の腕に変えた。

「ここ、何の部屋だ？」

春芳が白いドアが並んでいるのを見遣つて、つぶやく。

「確かに、この階には使用人の部屋があつて、そんで下の階には書斎があるらしい」

幹士は、深呼吸を繰り返して、息をようやく落ち着かせてから、春芳の隣に並んだ。

「お前、大丈夫か？」

突然の春芳の言葉に、「え？」と声を上げる。

「さつきから荒い息遣いが聞こえてたけど、喘息もちだつたか、お前？」

「いや、少し空気が悪いだけだよ」

慌ててそう取り繕う幹士に、春芳は何かあるとすぐ見抜いたのか、「帰るか」

突然足を止めた。そして、振り返つて、背後の一人に、「何にもなさそうだし、この辺で帰らないか」

と、提案する。澄子は美代子を付着させたまま、駆け寄ってきて、「嫌だ」

と断固としてつぶやく。すると、春芳は眉をひそめ、

「明日の朝にでも、また来れば良いだろ」と、有無を言わせない声で言った。

澄子は唸つて春芳を睨んだが、わかつたよ、とつぶやく。

「幹士は何か、調子悪そだしな」

「いや、俺は大丈夫だよ」

澄子の声に、慌ててそう言つ幹士。

「せつかく来たんだし、もう少し回つていいぜ」

幹士は、ほら行くぞ、と歩き出す。

「お前、本当に大丈夫なのか？」

春芳が近寄つてきて言う。

「だから、平氣だつて」

「……みたいだな。さつきは、どうしたのかと思つたが

春芳は、安心したようにそう言つた。その背後で、

「つたぐ。何だ、あの男」

澄子は、春芳の後頭部を睨む。

「外海君、ああぶつきらぼうだけビ、結構優しい人だから、怒らないであげてね」

美代子は澄子の腕を胸に抱えながら、そう言つ。

廊下の突き当たりまで来ると、その横に階段があり、側の窓から、ぼんやりと白い光が床へ垂れている。

すると、突然春芳が、「光なしでは、もう限界だろつ」と言つて、懐中電灯を取り出して、点けた。明りなしで回りつていう取り決めはあつけなく破られる。

あーつ！ と、澄子が声を上げたが、懐中電灯の光を頼りにさつさと階段を下り始める春芳を見ると、彼女は溜息を吐いて、もういいよ、とあきらめたように肩を下げる。

幹士は笑いながら、肝試しには変わりないだる、と彼女の肩を慰めるように叩く。

一階の廊下の一番奥には、大きな木扉があつた。それに空いた金色の鍵穴を見て、

「ここが、屋敷の主人が使つてた書斎だつてさ」

そう言つて鍵を差して捻ると、扉を開いた。

鉄の軋む音が廊下に響いて、膨大な本を腹に収めた巨大な本棚が現れて、四人の視界を塞いだ。

「すごい……すごいぞ」

春芳は感嘆の声をもらしながら、奥へと進む。

幹士は窓際にある机に近寄ると、横の壁からスイッチを探し出した。広い書斎が淡い色に明るくなる。

幹士は机の前の肘掛け椅子に座つて、近づいてきて横に立つた澄子を見遣る。

「……座り心地、最高だ」

幹士はそう言つ。

「……幹士、今日はありがとう」

ふとそんなつぶやきが聞こえた。

「俺は、別に何にもしてないけど

「幸美とは仲直りしたのか？」

「……ああ、さつき風呂場の前で……て、いけね。一緒にアイス食べる約束してたんだった」

あいつ拗ねてるだろ? なあ、とつぶやく。それを見て、澄子が、ふ、と笑みを零し、

「幸美には、頭が上がらないんだな、お前は」

すると、幹士は視線を伏せ、

「……ああ。あいつは、俺を救ってくれた恩人だから」

澄子は、「何だよ、それ」と真顔で言つてくる。

「俺がまだ小学生の時、すつごくショックなことがあつてさ。塞ぎ込んじやつたんだよ。ゲロ瘦せて、栄養失調になつて、医者は、こりややばいぞと血相変えてさ」

そんな時、幸美が俺ん家に来て。何度もチャイム鳴らして出ないから……あいつ、家に無断で入り込んだんだよ。

「確かに幸美は、幹士のことになると、何するかわかんないしな」

澄子はそう言つて、笑う。

「……それでそのまま、俺の部屋のドアを開けて、隅で縮こまる俺へ、怒鳴り散らしたんだよ。泣き喚いたんだよ。何言つてたのか、もう覚えてないけど、それが良く効いてさ。……いつして今、元気によつてるのは、幸美が居てくれたおかげなんだ」

そう一気に喋ると、澄子は穏やかな笑みを浮べて、なるほどな、とつぶやき、

「お前が幸美をすこしく大切にするのは、そういう訳か」

「だから、俺、幸美を裏切ることだけはしちゃいけないんだ」

幹士はそう言つて、澄子の横顔をどこか寂しげに見た。

「でも……俺を救つてくれたのは、幸美だけじゃない。お前らが、居てくれるから、今の俺はやつていけるんだ。幸美だけじゃない」「そんなこと面と向かつて言つもんじやない」

澄子はそう言つて、笑つ。

「でも、本当のことだから。……もし、お前らがいなかつたら、俺はとつぐに……」

そうつぶやいたところで、春芳が本棚から戻つてきて、うなむくして本が読めないんだが、と言いにくそうにつぶやいた。

「結局、何にも不思議なことはなかつたね」

そう零しながら、扉を出る美代子に、

「そりや、ある訳なこさ。肝試しは、単に雰囲気を堪能するものだからな」

そう言つながら澄子が続く。

幹士は扉の前に立ちながら、視界の隅に一人が入り口を出るのを捉え、そして、続いてこちらに来る春芳を見遣つて、

「電気消してくれよ」

窓際のスイッチを指差した。

「ああ、そうか」

春芳は振り向き、壁へ近寄りつとする。しかし、その途端、何も見えなくなつた。

「停電だな」

「何でいきなり……」

空気が張り詰め、四人の心を緊張で締め付ける。どこかで、ことりと物音がした。

春芳はじつと耳を澄ませて辺りに視線をめぐらす。そして、

「確かに今、人の声がしたような……」

「おいおい。驚かすなよ」

幹土は、扉に背中を寄りかからせてそつそつと

「電気消したの、春芳君？」

澄子に身を寄せた美代子が震えた声でそう言い、春芳の影を見る。

「いや。俺じゃないよ」

その無機質な声に、澄子が、

「いや、どうかな。私達を驚かせて結構楽しんでるのかも」

そうからかうよつに言つ。春芳は相手にせず、後ろへ振り返り、壁に近づく。

けれど、幹土は照明が点くのを待ち切れずに、気付けば懐中電灯を取り出して、春芳の背中を照らし上げていた。その時。驚いた。机の横に、幼い少女が立ち、こちらへ顔を向けていた。黒い髪にカチューシャをして、大きな瞳でぼんやりこちらを見据えている。黒いスカートからのぞく細い足が、微動だにせずそそり立ち、足先は黒く搔き消えていた。

消えた。その幻像は、春芳の、スイッチへと伸ばした腕の下で、薄く搔き消えた。それは、一瞬の出来事、瞼を瞬かせるほんの短い間の錯覚。

幹土は荒い息を零しながら、扉の上で背中をずれ落ちかけさせる。幹土は、

「まさかな……」

そう唇を引きつらせて笑い、首を振つた。

「どうした、幹土？」

様子がおかしいことに気が付いたのか、春芳と澄子が同時に訊いて

くる。

「何でもないよ。もう行こ」

「汗びつしょりよ?」

美代子が持っていたタオルで、顔を拭いてくれる。

ありがとう、と幹士は無機質に答え、春芳へ視線を向ける。春芳は頷いて、再び電気を消した。

扉は甲高い音を立てて閉められた。施錠される重い振動が、鍵を握った手に伝わってきて、鼓動の激しい心臓をどくんと強く高鳴らせた。

「どう行ったのよ!」

空中廊下から戻つてくると、幸美はちょうど自分の部屋へ帰つて来たところで、こちらの姿を見つけた途端、大声を上げた。

「ちょっと、肝試しに……」

肝試しつて……、と幸美はちらりと澄子の顔を見て視線を伏せた。そして、

「まあ、良いけどさ。……お化けとは会えたの?」

「あ……会つわけないだろ」

幹とは震えた声でつぶやく。

「鈴木と加賀の怖がりよつはす」かつたぞ。俺の腕にこりつ、膨らみを寄せて抱きついてきてさ」

そう言つた途端、澄子と美代子から肘つきを食らつ。

「勝手に変な描写付け足すな」

「最低、幹士君」

同時にそう言つ一人。

春芳はそれを見て、やれやれとこりみりこり、首を振りながら笑つ。

「……自業自得ね」

幸美はそう言つて、澄子と美代子を従えて、ずんずんと歩いて行つてしまつ。その後りで無言でついていく春芳。

「待つてくれよ」

そう手を伸ばしながら、うつむくと屈む幹士。廊下に誰もいなくなると、幹士は下を向いたまま、息を吐いた。ゆっくりと、後ろへ振り返る。

廊下の先には、たつた今出てきたばかりの空中廊下の扉があつて、その隙間からかすかに黒い空気が漏れ出ている。

「……あれ、錯覚な訳ないよな」

確かに怖かったけれど、あの瞳の中に、黒い感情は感じられなかつた。ただ霧のように存在感の薄い、とろんとした瞳だつた。

「まさか、俺、祟られるわけじゃないよな」

そう言って、やつと自分の口に笑みが戻つた事を、指先で確かめると、すぐに幸美達の後を追つた。

綺麗だつた。軽やかに踊るその姿が。少女の手の先は宙へと伸び、花々を揺らす微風を指に纏わせる。

裸足で踊るその少女はくるくると回転して、フリルのついた黒いスカートが弧を描いた。

幹土は、それを上からじつと見下ろしていた。辺りは中庭で、母屋と別棟はあやふやな白い影となつて、噴水や石畳の地面だけがはつきりと浮き上がっている。

……//キさん？

そう思つてよく見つめてみるけれど、彼女は//キより一回り年下みたいだつた。

彼女がくるくると回転すると、長い髪が日差しに煌めき、流れるよつた舞の軌跡が描かれる。立ち止まると、髪ははらりとその白いシャツへ降りた。

少女は、振り向く。その視線の先に幹土の透明な体は佇んでいて、二人は見詰め合つた。けれど、その目に映つてゐるのは、幹土の顔ではなく、ぼんやりとした青空だつた。

彼女の瞳は、何かに期待を膨らませてゐるよつて、艶々と輝いていて、その透明な輝きに、幹土は啞然とした。

……綺麗だ。

そう思つた時、彼女の髪が、ふわりと風に浮き上がり、幹土の透明な鼻先を撫でて、そして、夢は終わりを告げた。

「……なんだ、夢か」

定番の言葉をつぶやいてみた後、幹土はベッドの上で起き上がり、大きく欠伸する。そして、ふと視線を横へ向けた途端。

「うわっ！」

隣でかすかに寝息を立ててゐる幸美に気付いて、声を上げる。

「あ、そうか……あのまま寝ちゃつたんだな」

自分の服装を確認しながら、昨夜、一人でベッドに腰掛けて、話に夢中になつてたことを思い出す。

彼女の髪を優しく梳ぐと、幹士は起き上がって、部屋を出た。

そして一階へ下り、中庭に出る。

幹士は噴水に近づき、水の満たされていない石の底をのぞいた。

……夢に出てきた子、昨日のあの娘だよな。

あの背丈、そしてあの瞳。間違いない。

幹士はかすかに微笑みながら、身を引いた。

「不思議なところだな、この屋敷は」

そうつぶやきながら、中庭を見渡す。さわやかな朝の風に甘い匂いを乗せて、囲いの中の花々が同じ向きに頭を揺らさせていた。

幹士は石のベンチに腰掛け、別棟を　昨日行つた書斎の窓を見る。カーテンは引かれておらず、肘掛け椅子の背もたれが窓に顔を出していた。その時。

「み、き、と」

頭上から、明るげな声がして振り向くと、窓から幸美がのぞいて、こちらに小さく手を振つていた。幹士は笑つて、「おはよ」と手を振り返した。

「どうだ、俺の目玉焼きは」

基喜が、こげこげに焼かれた半熟の目玉焼きを、指差して言つ。幸美は黄身がべつたりと染み付いた自分の皿と、他の人の皿を見比べた後、一言、

「……あげる」

そう言つて、その皿を幹士へ差し出した。幹士は眉をしかめ、黙つてフォークを刺して口に入れる。

「貴様！　俺がせつかく作つた目玉焼きを！」

「お前が、「唯一」作つた目玉焼き、だろ」

そう言つて、幹士は手の付けていない自分の皿を幸美へ差し出す。ありがと、と幸美は受け取り、皿に載つた形の良い目玉焼きにフォー

ークを当てる。

「慌てて作るからそうなるんだよ、基喜君」

朝食当番だった美代子が、寝坊で仕事を丸劃すつぽかした基喜へ、眉を寄せて言つ。

いつも優しい美代子に言わると、基喜は少ししょんぼりとして、「悪かったよ、一人でやらせて。……だけど、どうして昨日は俺を誘つてくれなかつたんだよ」

基喜は、恨みがましく美代子を見る。

美代子は「だつて……」と幹土へ視線を向ける。

「お前な、ベッドにあんな本をたくさん広げて、にやけて寝てるとこひ、加賀達に見られたら、ショックだろ？」

「お前、見てたのかつ！？」

牛乳を噴き出す基喜。隣の美代子が、きたないつ、と即座に皿をさげる。

「誘おつと思つて部屋の前まで来て、ノックしたんだけど出でこないから、やつとドアの隙間からのぞいてみたら……んなことやつてるし。どつやら奴は寝てるようだ、つて眞には言つて引き返したんだよ」

「ふざけるなー、誰がエロ本なんかベッドに並べて、ダイブするかよー！」

基喜は真顔で、墓穴を掘る。

隣で、「そうなの、基喜君？」と青ざめた顔で、美代子が言つ。ち、違う、これは誤解だ、陰謀だ、と両手を左右へ激しく平行移動させる基喜。

「大体、幹土だつて、何用か持つてきてるだろー。」「持つてきていなゐわよ

幸美が、平然と答える。

「鞄には、必要最低限のものしか入つてないんだもの。幹土つて、本当に、そういうのには興味がないのよね」

そもそもあつさつ言われるとかえつて情けないのか、幹土は、そん

なことないさ、と眉をしかめて、パンをかじる。

「でも幹士君、高校の時は、よくヌードの絵を見てたじゃない。私はてっきり好きなのかと思つてたけど」

静かに食事を進めていた先生が突然、にやりとして言つた。幹士は思わずパンを嗜まずに飲み込み、喉に四角いでっぱりが通り過ぎる。

「熱心な田で、じつ……じつと、色々な部分を見ててねえ」

ジエスチャーを付けて説明する先生。

幹士はグラスを慌てて煽り、

「何言つてるんですか！ あれは、あくまでも美術への興味で見てたんですよ！」

「そうかしら？」

先生は、両肩をわざとらしく上げる。

「おいおこ。幹士、どうこいふことだよ」

基喜が、これみよがしに幹士に食いかかる。

幹士は顔を赤らめて、「だから、」とつぶやくが、

「そう言えば、確かに幹士、裸婦の画集、いっぱい持つてたよね」

口元に指先を当てて宙を見る幸美や、

「むつりだつたんだな、幹士は」

見損なつたとばかりに首を振る鈴木とか、

「お前達、幹士のプライベートにあまり口を挟んだら可愛そうだうう」

少し頬を赤くして弁護する春芳。

美代子はとくに、無言で、意外そうに顔をじつと見つめてくる。

最後のとじめとばかりに、隣のミキが、「変態さん」とつぶやき、笑顔を向けてくる。本気でぐさりときた。

幹士は、「変態さん、か……」と彼女に力ない笑みを向けて、うな垂れた。

朝食の片付けをやつていると、幸美達が来て、

「暇だから、ちょっと別棟の書斎まで行つてくるわ」  
そう言つて、後から幹士もおいでよ、と厨房を出て行つた。

「ねえ、幹士兄さん」

いつの間にか立つていたのか、傍らでミキが囁く。

「幸美達と一緒に行つたんじゃなかつたのかよ」

ミキは、どこか不機嫌そうな顔で、首を振る。

「書斎なんて行つてもつまらないもの」

幹士はエプロンを外して、冷蔵庫にかけてあつたタオルで手を拭く。そして、テーブルにエプロンを置んで置いた。

「そんなこと言わずに行こ」

その背中を押して、厨房を出た。

「いやつたら嫌

腕を払つて、激しく首を振るミキ。幹士は、頭を搔く。

……なんて、わがままなんだ。

そう思つたけれど、本心を言つたら、後で仕返しこ惡戯をすると  
も限らないし。

とりあえず幹士は広間へ連れて行つて、彼女にお茶を淹れてあげた。ついでに、クッキーもつけてやる。

「……良い香り。ありがとうございます」幹士兄さん

よつやぐ「機嫌を直したのか、ミキはカップを鼻に近づけ、幸美に借りただぼだぼのジーパンをふらふらと揺らさせて鼻歌交じりにクッキーを頬張り始める。

「じゃあ、ミキさん。俺はちょっと電話するから」

電話？ 口元にクッキーの粒をつけたミキが小首を傾げる。

「ほら、昨日、言つてた義一叔父さんにだよ。少し聞きたいことがあるんだ。ミキさんも、どう？」

そう訊いてみると、ミキは脇を見て少し黙つた後、

「私はいいです」

とぶつかりながら言つて、クッキーを口の端でがりつと頬張つた。

「そう……」

幹士はそう言いながら、ダイヤルの穴をまたポチッとしそうになつて、「あ、そつか」と苦笑しながらそれに手をかけて回す。

数回の呼び出し音の後、「もしもし、天富です」とどこか威厳のある声が響いてきた。仕事モードに入つてゐるな、こりや。

「忙しい中、ごめん。ちょっと気になる事があつて」

「なんだ? 今、出勤の仕度してゐるんだ。手短にしてくれ

「あ、うん。……あのさ、この洋館に住んでた家族つて、もう他界してゐる?」

叔父さんの息遣いが聞こえなくなつて、しばらくした後、どこか暗い声が返つてきた。

「……死んでしまつたよ。十年くらい前に、両親の後を追つて、娘が屋敷で息を引き取つた。まだ七歳でね」  
……七歳。

「その娘つて、病気持ちだつたのか?」

ああ、と叔父さんの低い声が返つてくる。

「彼女の両親、どうして亡くなつたんだ?」

「その……事故……だ」

叔父さんの声に、幹士は目を見開く。

反射的に蘇る、ある淒惨な光景。一人の女性が、愛する男性の、もう動かないその体へとしがみつき、泣き叫んでいる。

「聞いてるのか、幹士? お前、大丈夫か……?」

心配そうなその声に、はつと我に返つて、

「なんでもない。ちょっとと考え事してた」

そう言つて、幹士は真顔になる。

「……なあ、幹士。できれば、この話は今までない時にしてほしいんだが」

その声が、震えていた。幹士は慌てて、

「ごめんな、こんなこと話して。仕事に差し支えたら困るから、もう切るよ」

「……ああ、そうしてくれると助かるよ。また夜にかけ直せ。その

時に、詳しく述べてやるから。じゃあな、友達やミキちゃんによろしくな

叔父さんは、感情を帯びた声を再び冷静なものへと切り換えて、切つた。

……事故で死んだのか。彼女の両親は。

幹士は受話器を置いたままじつとしていたが、ふとソファーの方へ向いた。

「ミキさん？」

クツキーを頬張っていたはずの彼女の姿が、いつの間にか消えて、ティーカップの中での、冷めた紅茶が、静かに波紋を立てていた。

すぐに中庭へ出でみると、彼女は渡り廊下を別棟の方へ歩いていて、幹士は、「ミキさん！」と彼女に駆け寄る。肩を並べると、

「何ですか？」

ミキは、不機嫌に戻った顔をこちらへ振り向いた。

「どうして、突然出て行つたんだよ」

息を切らせてそう訊く。

「何となく、出て行きたくなつたんです」

「何となくつて……」

幹士は別棟の扉を開いて、彼女を中へ促す。

「つまらない？」

「つまらないです」

廊下を歩きながら、はつきりとそう答えるミキ。気難しい娘だな、と幹士は溜息を吐く。しばらく歩きながら、

「……お父さんとお母さんは、元気かな？」

会話を弾ませようと、ふとそんなことを訊いてみる。

ミキは少し黙つて何かを考えた後、

「……知らないわ」

と、無機質な声で返してきた。

……知らない。なんだそりゃ。

幹士は苦笑して、じゃあ、とつぶやき、

「別の話。ミキさん、学校で何か部活動やつてるのかな？」

「……知らない」

不機嫌そうにただせつづぶやくミキに、幹士は、参ったな、と肩をすくめる。

しかしその時、ぽつりと、

「だつて私、学校なんて行つてないもの」

そう聞こえて、幹士はミキの顔を見遣つて足を止める。

ミキはその横を通り過ぎ、

「行きたくても行けないの」

とつぶやいた。そして、立ち止まって、

「幹士兄さんは、学校、行つてたの？」

振り向かずに訊いてくる。

「……行つてるよ。今は大学」

「良いわね、幹士兄さんは」

振り向いたミキの顔はどこか寂しげだった。ミキは無言で幹士を見た後、睫を伏せて俯き、長い黒髪が胸へと垂れ下がる。

「どうして、ミキさんは……」

幹士は呆然とつぶやく。

「幹士兄さんには、関係ないわ。行きましょ」

ミキは途端に明るい笑みを浮べて、幹士の腕を引いて歩き出す。

幹士は彼女の横顔を見ながら、表情を暗くした。

……今、気付いた。この子がいつもにこにこと笑つてるのは、あつと……。

「幹士兄さん、もつと早く歩けないの、あなた」

そう振り向いて、大きな瞳をにっこりと笑わせるミキ。

彼女が振り向けるその無邪気な笑みが、胸をちくちくと突き刺した。

ミキはしばらく歩いて、幹士の足が遅いのに痺れを切らしたのか、

もういいわ、とばかりに腕を振り解き、背中で手を組んで鼻歌交じりに歩き出す。

……ミキさん。

何に悩んでいるのか、それが聞きたくて、でも彼女の笑みはその問いを寄せ付けないようになつて、いつも崩れることがなくて。

幹土は首を振つて、横の窓へ視線を向けた。林が遠くに見えて、幹土は何とはなしにそれに近づく。その途端、目を見開き、そしてすぐに、穏やかに微笑んだ。彼女が居た。

少女は、カチューシャを頭から引き抜いて、長い髪は紺の輪をすり抜けて、ひらひらとそよだ。

彼女はこちらに背を向けて無言で林の方へ歩き出し、その前でぴたりと足を止める。そして、じつと佇んだ。

「君が、あの」

幹土は穏やかに微笑んだまま、そうつぶやきかける。

黒いスカートをなびかせて、彼女はそつと振り向いた。その無表情な顔が少し微笑んで、そして、瞼を閉じると。もう消えていた。幹土は窓の鍵を解いて、開く。

流れ込む風。くせの激しい髪が逆立ち、幹土は目を伏せて、右手を窓の隙間から外へ出した。

手首に当たる口差し。強い風が腕を揺らし、鉄枠の冷たい感触が肌に当たる。

「似ているな」

幹土はそうつぶやいて手を引き抜き、すっとジーパンのポケットへしのばせると、中にあるそれに指先を当てた。

じつと窓の外を見ていた幹土はふと我に返り、後ろへ振り向いた。

「ミキさん？」

廊下にはもう、彼女の姿はなかつた。

……ミキさん、怒つて先に行つちやつたのかな。

幹土は書斎へと歩き始めるが、ふと足を止めた。

「……行つてみるか」

ぐるりと体の向きを変えて、廊下の先の階段へと向かう。三階まで上がる、その廊下には大きな窓が連なつていて、そこから見える山が朝の日差しに輝いて綺麗だった。

幹士は廊下の奥へ歩いていき、大きな木扉の前で立ち止まつた。そして、鍵を差し込む。

「……失礼します」

一応そう断つてからノブを手前に引き、中へ入つた。

「……」ここが、この屋敷の主人が使つてた部屋か。

薄暗いその部屋を見渡す。

木棚がそろつて左の壁に寄せられて、向かい合つように右の壁には、額物に入つた絵が掛けられていた。

天井にかかつた金縁の吊り輪の照明が、奥の窓から差し込む日差しに光つている。

幹士はそのまま、窓際の仕事机に近づいて、その上に腰を下ろした。

そして、額縁を見遣ると、それは。

「中庭か、これ？」

中央には噴水、背景には別棟。植木の鮮やかなグリーンに、点々と散りばめられた花々の色。

幹士は机から立ち上がり、それを迂回して、大きな肘掛椅子に座つた。

「これも……座り心地、最高だな」

そう言つて、頭を背もたれから後ろへ逆さに垂らし、カーテンを引いてみた。逆さになつた中庭の景色が、視界に広がる。

「……あそこから描いたのか」

今朝に座つた、石のベンチを見遣る。

幹士は背後へ垂れた頭を持ち上げると、正面を向いた。そして。

「……なつ」

息を呑んで、見る。彼女の瞳を。間近で。

少女は、机に身を乗り出し、幹土の顔へ自身の白い顔を近づけて、笑っていた。

彼女の瞳は爛々と光り、純粹な興味に満ちた視線を幹土の顔へ向けていて。

幹土の腕が震えて、肘掛から垂れ下がる。

少女の唇が、三日月に歪んだ。その隙間から声なき笑いが零れて、そして、瞬きすると同時に消える。

幹土は肩を激しく上下させ、椅子に深く背中を沈めて、天井を見た。

「あの娘は……」

間近で見た少女の顔は白く、その瞳は大きかつた。それから鼻は細く、眉毛は少し濃くて、何から何まである人にそつくりだった。

……母さんに。

部屋を出て、扉を施錠していると、背後から、「おい」と怒鳴り声が響いてきた。振り向くと、廊下の先に、鈴木の険しい顔が小さく見えた。

「どこ行つてたんだよ」

鈴木は大股で近づいてくる。

「……少し用があつてな」

「ずっと待つても来ないから、探してみれば、こんなところに」

鈴木は、幹土の背後の扉を見遣つて、眉をしかめる。

「何だ、ここ」

「この屋敷の昔の主人の部屋だよ。別に何もないさ」

そう言つて、幹土は、「さてと」と歩き出す。

……次は、下の階の、使用人の部屋でも見てみるか。

「ちょっと待て。どこ行くんだ？」

幹土の腕をひんやりと冷たい鈴木の手が掴んだ。引っ張られる。

その時、

「あ……」

突然視界がぐらりと傾いた。足の力が抜け、膝が廊下の木の床に付く。

「痛……」

頭を押された。針が頭の芯を突いているような、ちくちくとした痛みが起こる。

「大丈夫か、お前」

鈴木が、しゃがんで顔の高さを合わせ、覗き込んでくる。

「眩暈だよ、ただの」

そう言つて、幹士は立ち上がる。その際に、痛、と歯を噛み締める。

「部屋で休んだ方が良いんじゃないのか?」

鈴木が肩に手を当ててくる。

「平気だよ。幸美が待つてるし」

そう言つて、幹士は肩に載つた鈴木の手を剥がそうとした。

「今は、幸美のことより、体の方が大事だろ」

強くそう言つてくる鈴木へ、

「良いんだよ、別に。……お前には、関係ないだろ」

そう言つて、肩を動かして無理矢理払い除けると、歩き出す。

「何だ、それ……関係ないって……」

すると、腕を強く掴まれ、無理に振り向かせられる。

「何が関係ないだよ! 昨日、お前、私に自分のこと話してくれただろ! 関係ないって何だよ!」

唚然として、鈴木の怒った顔を見る。彼女はそう言つた後、懇願するような視線を向けてきて、幹士はそれから逃れるように目を伏せて、

「離せよ」

静かにやうつぶやく。すると、鈴木は歯を噛み締めたまま、無言で離した。

「もう平気だつて言つてるだろ。……今日のお前、変だぞ」

そう言つと、

「……関係なくなんて、ない……」

彼女はそう震えた声でつぶやいて その結えられた長い髪が幹士の肩に触れた。幹士は無言で、間近に近づいた彼女の顔を見つめる。

「私……本当は、幹士が良かつたんだ」

彼女の言葉に、幹士は視線を逸らす。

「好きじゃないんだよ、私。今の彼氏なんて」

「……なら、何で付き合つたんだよ。相手は氣づくぞ、いつか

そう言つと、鈴木は少し微笑んだ。

「もう気付いてるみたい」

その声に、幹士は唇を結ぶ。

「幹士には、幸美だけしかいないってわかつてゐる。……けど」

彼女の息が、首筋にかかる。

「最初から、駄目だつてわかつても、どうしても。……不可抗力つてやつだよ」

すると、幹士は視線を逸らしたまま、口を開く。

「俺はな鈴木、最初、幸美をただの家族としか見ていなかつた。……他に好きなやつがいたんだ。だけど、俺は幸美と付き合つことにした」

そう言つて、幹士は憂いのこもつた視線で鈴木を見る。

「幸美が、恩人だから？」

静かに訊いてくる。

「違う、大事だつたからだ。……幸美の存在が、彼女を手放したくなかった」

幹士はそうつぶやくと、そつと鈴木の肩に手を回し、胸に引き寄せた。左肩に彼女の頭が載る。

「……初めてだ。幹士の腕の中」

細い体が腕の中でかすかに揺らぐ。幹士は寂しげに微笑み、

「……もっと早く言ってくれれば、きっと俺は……」

そうつぶやき、彼女の後頭部を撫でた。艶々とした髪の柔らかさ

が手の平を滑る。

「私はずっとお前が好きだった」

鈴木はそう囁いた。幹士は黙つて彼女の体を離し、彼女を見据える。

「俺……今は、幸美だから」

そう言つと、わかつてゐる、といつよつに鈴木は静かに頷く。

「でも、あいつは俺がいる所為で、苦しんでる」

幹士は、つらそうに手を落として、頭を押さえた。

……そう。俺の存在が、幸美を苦しめている。

「違うだろ。幸美はお前がいないと……」

「俺がいるからだ。いつか俺は、幸美の心を壊してしまつかもしない。けど、彼女がそれを望むなら」

幹士はそう言つと、笑みを鈴木へ向け、

「お前から言つてみると、正直意外だつたけど……嬉しかつた。でも」

……どうして、今になつてそんな事を。遅すぎた。

「遅えよ、馬鹿」

幹士はそうつぶやいて、歯を噛み締め、鈴木の横を通り過ぎた。すると、

「幸美がいたから、私は何もできなかつたんだ。……出来る訳、ないだろ」

背中にかかる鈴木の涙声に、幹士は立ち止まり、

「この話は、もうなかつたことに」

そう強く言つて、廊下を歩き去つた。

気付いてみれば、頭痛は消えていて。けれど、代わりに胸が軋んで痛みを訴えていた。

「今日は、やたらきつかったな」

プシュッと缶を開ける音が電話越しに伝わつてくる。

「『苦勞様』

「……どうだ？ そっちで何か変わったことはあったか？」

「ありまくったよ。……ホントに色々」

……怪奇現象体験するわ、変な夢見るわ、彼女の親友に告白される

わ……。列挙しようにも切がない。幹士は溜息を吐く。

「ははは、そっちも大変みたいだな。……ミキちゃんはもう寝たか  
？」

「いや。今、皆とわいわいやつてる」

ビール缶とお菓子で埋め尽くされたテーブルを囲つて、宴会をしている皆の中に、いつの間にか溶け込んでいるミキを見遣る。

「……のようだな。あまり飲み過ぎるなよ？ 明日、運転手がいなくなつたら帰れないぞ」

「わかつてるつて」

「……それで、今朝の話、なんだが」

「こん、と缶をテーブルに強く下ろすのが耳に伝わってくる。

「……ああ。ここに住んでた家族の事、教えてくれ」

よし、と叔父さんは言つて、深く息を吸つた後語り始めた。

屋敷に住んでいた夫婦には一人娘がいて、彼女は生まれつき病弱で、屋敷から出ることは許されなかつた。

年を経ても、同じ年の友達はおらず、話し相手は、付き添いの使用者だけ。

そんな彼女も、体の調子の良い時は、中庭へ出て、よく一人で遊んでいた。体は弱いけれど、心は明るくて、芯の強い子だつた。母親にそつくりだつたよ、彼女は。

彼女が六歳の時、両親が交通事故で亡くなつた。ちょうどその頃から、彼女の容態も悪くなつてな。使用者は当然、眞実を打ち明けることができず、彼女はずつとベッドの中で一人の帰りを待ち続けた。

そして、そのまま 彼女は両親の名を呼びながら、亡くなつたんだ。七歳でだぞ。七歳で、まだ外の世界へ一步も足を踏み出せず。同じ景色を、同じ時間を繰り返し味わい続けた。なのに、彼女

は一度も笑顔を崩したこともなく。にっこりとその微笑みを浮べたまま、息を引き取つたんだ。

叔父さんの震える声に、いつしか嗚咽が交じり始めていた。今まで一度だってこんな声は聞いたことがない。

「……叔父さん？」

「私は本当に、何もしてやれなかつた。うんざりしたもんだよ、自分で」

怒りに震えた声が、く、と歯軋りする歯と混じる。

「……叔父さんつてや」

幹士はぽつりとつぶやく。

「すぐに自分を責める癖があるんだよな。色々な事に關して背負いすぎなんだよ。もつと、肩の荷、下ろせよ」

幹士の声が、同じように震えていた。

すると、叔父さんは無言になり、

「……そつかもしれないな。いや、全くその通りだ」

鼻水を啜る音を立てて、そう笑つた。

「自分を責めたところで……彼女はもういないのだから、どうでもならないんだよな」

叔父さんはそつぶやき、

「……幹士は、やつぱり私を一番良く知つているな。……けび、幹士、」

お前だつて、そうだ。……お前は私によく似てゐる。背負こすぎるな。

そう言つて、叔父さんは黙つた。

……背負いすぎるな、か。

いりして電話をしていながらも、頭に浮かんでくる一人の少女の姿。

……俺は一体、彼女の何を知つて、何を背負おうとしたんだらつ。それとも、単なる興味か？ そつ思つて、いや、違う、とすぐさま否定する。

……彼女と出会うその一瞬が、強く心を惹き付けてくるから。だから俺は、彼女を知ろうと心を動かせたんだ。

幹士は、目を閉じて、ふ、と微笑むと、

「余計なお世話だぞ、叔父さん。俺は確かにそつちに似て、神経質で、自分で何でも抱え込む癖がある。……だけどな、俺にはそんな自分を支えてくれる大切な人がいるんだ。だから、大丈夫」

そう言つと、叔父さんは噴き出し、

「そんなことを眞面目に話せるお前が羨ましいよ。……お前の神経質は、私よりも軽いらしいな」

幹士は、そうみたいだ、と笑い、

「ごめんな。悲しい事思い出せちゃつて」

「良いんだよ。……私はもう、かれこれ十年程、その屋敷へ足を伸ばしていないんだが、今でもはつきりと、あの景色と、暮らしていきた住人のことは覚えている。……今ではもう誰も住んでいない古びた屋敷でも、かつて暮らしていた人々にとつては、本当に思い入れの深い場所だつたんだ」

ああ、わかるよ、と幹士は小さくつぶやく。

「だから、幹士も、彼らの大切にしていた屋敷を同じように、大切に扱つて欲しい」

そう言つてから、こんな」と言つて、柄でもないんだがな、と叔父さんは笑う。

幹士は、叔父さんの言葉に、「俺は……」とつぶやいて視線を伏せた。

「ごめん、叔父さん。……俺、今日、昔の住人の部屋に勝手に入つたんだ。使つてた人はこの世にはもういないんだし、いいだろつて、軽い気持ちで……」

「ごめんな、ともう一度つぶやく。すると、叔父さんは、ふ、と笑みを漏らし、

「別に、入つたつて構わないよ。ただ大切に扱つてくれれば良いんだ。その人が大事にしていた物を勝手に持ち出したり、壊したりす

るのには、けしからんがな」

その言葉に、幹士は唇を結んだ。

「……幹士?」

「ああ、いや……もう部屋には入らないよ」するよ。使わせても  
いらつのは、書斎だけにする」

「そりか?……幹士がそりか?」

そう言つて、叔父さんは少し黙つた後、ぽつりと、  
「なあ、幹士。……お前、娘を想う親心つて、わかるかな」

突然訊かれ、幹士は、は? と声を上げる。

「……わからないよ。まだ娘なんて持つてないし」

「真、そうなるだろ?」

そう言つて、軽快に笑つ声が聞こえてくる。幹士は少し顔を赤ら  
めて、

「何で、こきなりそんなこと訊いてくるんだよ?」  
と口を尖らせる。

「……幹士のいるその洋館はね、彼女への想いが強く」められてい  
るんだ」「

……彼女への、想い。

そう心の中でつぶやいて、幹士ははつと氣付く。

もしかして、あの花壇や、噴水は。

そのつぶやきに、叔父さんは「ああ」と答へ、

「すべて、彼女の為に作られたものなんだ。……屋敷が、唯一彼女  
が過ごすことができた場所だったから。父親は、せめてこれだけは、  
と豪華な中庭を作つたんだ」

「そつか、そだつたんだ……」と幹士はつぶやく。

「……この辺で良いか?」

突然つぶやいた叔父さんの声が、再び震えていた。一本目の缶を  
空ける音がする。

「……ああ。仕事で疲れてるのこ、長く付き合わせて悪かったな。  
じゃあ、俺、もう切るよ。明日で帰るけど、何かお土産は欲しい?」

「せひとも、幸美さんとの甘酸っぱい思い出を頂戴したい」

「あがれるか、そんなもの！……ていうか、酔つてゐるだろ、叔父さん……」

せりへりしい、と叔父さんは笑い声を返す。それが涙でぐしゃぐしゃにしづがれでいる」とには、幹士は触れず、

「……あんまり浮かれて飲み過ぎるなよ？ 早めに寝るんだぞ」

も幹士は「うん」と頷き、  
それで言葉にならない声で返事に  
ぞう言いても房でぐる返事に

「……………あ、めやすみな」

穏やかにそれを聞いて、彼は話を終えた。そのあまり深い息を吐した後、ソファの方へ振つ向く。

「どういたよへ」

喜がビルの缶を上げて言う。その横で、さあ、どんどん飲んでください、と鈴木がほろ酔い顔で、瓶を先生のグラスに傾ける。ちょっと、大丈夫なの？ と先生は苦笑しながら、溢れ出しかける泡を吸い込んだ。

「特に何もございません。

喜がビール缶を一つ取つて、幹土へ投げつけた。

「！」わざわざ

慌てて手を伸ばすが、缶は絨毯の上に落ちて転がる。サリの足元へ。

ミキは屈んでそれを手に取り、顔に近づけた。細長い鼻を、その表面に付けて、冷たい、と小さくつぶやいて。そして、大きな瞳をぱちぱちして眺めると、突然プルトップを上げて、口に流し込んだ。

—  
おい！

基喜が、春芳が、そして少し遅れて、顔の赤い鈴木が立ち上がり。ミキは口を真っ白にしながら、爆笑する顔をこちらへ向けてくる。ミキは口を真っ白にしながら、爆笑する顔をこちらへ向けてくる。

「何やつてるんだ！」

怒鳴つても、ミキは気にした様子もなく、せやせやせと笑い転げてこる。

「ジーパンにビールが。あーあ、こんなにちぢめつて、もひ

幸美が苦笑しながら、布巾で彼女の腿の辺りを拭いている。

「駄目だろ、さすがに」

基喜が、呆れたよひてキを見下ろして呟つ。

春芳は、ビールの缶を彼女から離してテーブルの角へ置き、

「何か飲ませた方が良いかもな」

と、手元のミネラルウォーターのペットボトルを、近くのグラスに傾けた。

「ほら、ミキさん。飲んで」

「嫌よ、幹士兄さん。そのグラス、そここの金髪さんが使ったグラスよ」

汚いわ、と払い除けるミキに、基喜がショックで顔を固まらせている傍ら、幹士は額にズを張りさせて彼女の頭に手を当てる。

「君は、何歳だね？」

「……十五歳です」

「十五歳。もう、小さな子供じゃないのだよ。こんな悪ふざけばかりしてるとね、兄さん」

「変な味がしましたわ、兄さん」

ミキが唇に指を添えて笑う。

ミキさん、聞いてるのかね、君、と手を頭の上でぱたぱたと叩いてこるうちに、幹士は自然と笑みを浮べていた。

「ビールつてまずいけど、面白い味。また飲みたいわ」

「それは、成人まで取つておく事だね」

一人のやりとりを遠くから眺める基喜が、

「ひりや、駄目だ。必ず親馬鹿になるぞ、この男」

自分の額に手を当てて、首を振る。

「やうなるわね、これは

鈴木はそう言つと、さうか寂しそうに微笑んで幹士を見る。その側で先生が、

「教師の立場からすると、これは相當まことにだけれど」と、眉をひそめていた。

「別に他言なんてしませんから、平氣ですよ」

美代子がそう笑う。

「……教師失格ね。未成年の子にお酒を易々飲ませちゃうなんて先生はそう言つて、ソファーに腰を下ろした後、腿に肘を当てて、手に頬を載せた。

「少しくらい飲んだつて、平氣ですよ。俺も高校生の時、よく飲んでたし」

春芳が、視線を幹士達へ向けたまま、ぶっきらぼうに言つた。

「あら? もしかして、慰めてくれるのかしら?」

先生がにっこりと笑みを浮べて、春芳に振り向く。

「……違いますよ。単なる事実を述べただけです……ホント!」

先生に顔を背ける春芳。

先生は苦笑した後、再び前を向いて、黙り そして、突然立ち上がる。

「少し酔つたみたいだから、散歩に行つてくるわ。何かあつたら、すぐ呼んでね。中庭にいるから」

ウス、と基喜が頷き、横目で先生の背中を見送つた。

「……どうしたのかしら、先生。少し暗くなつた?」

美代子が言つと、基喜は、「そうかあ?」と、缶を置く。

「まあ、教師つて、色々大変そだからな。こんなご時世で、よく続けられるもんだ。俺にはとても向かねえよ」

「……でも、難しいからこそ、やりがいがあるつて言えない?」

「やりがい、ねえ」

基喜は、ふうと息を吐きながらソファーに背を沈ませる。そして、何かを考えるように宙を見た後、

「……俺が一番求めてるの、もしかしたら、それかもな。やりがい

か。人生にそういうもんは必要だよな……きつとそつだ」

独り言のようにそう言つて、基喜はふと氣付いたように美代子を見る。

「お前、前より隨分話すようになったよな」

美代子は、「え」と声を上げてきよとんとする。

「明るくなつたつていうか……」

「そ、そうかなあ……？」

彼女は少し嬉しそうな顔をする。その時、

「う……」

ほんのり赤くなつた頬が、少し可愛くて、基喜は見入つてしまつ。「そんなこと言われたの初めてだよ。私つて内氣だし、人付き合いも苦手だし。……ありがとね」

そう言つて、茶色いショートヘアの髪を斜めに垂らせて、微笑む美代子。基喜は、口をあんぐりと開けたまま、無言で頷いた。

「ちょっと俺、用事があるから部屋に戻るわ」

突然立ち上がつた幹士に、幸美が「何するの?」と続いて腰を上げようとする。それを手で制し、

「いや、お前はここで皆と飲んでる。終わつたらすぐ降りてくるから」

「誰もいない部屋で、一人することって何だ?」

基喜が耳元で囁くと、幹士はにやりと笑つて、

「今日、書斎で熱心に何読んでたつけ、お前?」

「何を読んでいたの、金髪さん?」

ミキが、幹士の横に悪戯っぽく笑つた顔を並べる。

「ストレッチに役立ちそうな内容が沢山詰まつてたよな? 複雑なポーズが色々載つててさ」

「……お、覚えてねえよ、そんなの!」

基喜が叫ぶのを背後で耳にしながら、幹士は笑つて広間を出た。

階段に足を踏み出したところで、「幹士」と後ろから声がかかつ

た。振り向くと、春芳が苦笑いをして近寄つてくる。

「何だよ」

「書斎に眼鏡を忘れてきたらしいんだ。もう一度行つて取つて来た  
いんだが」

「お前が、忘れ物とは珍しいな」

「そう言いながら、幹土はジーンズから鍵束を取り出し、失くすな  
よ、と渡す。

「すまない。ちゃんと戻さねばするから」

「そう言つと、春芳は再び無表情に戻つて、懐からペンライトを取  
り出すと、渡り廊下へと走つていつた。

幹土はそれを横目に見て、階段を上り始める。手すりを掴む手の  
平に、ざらざらとした感触がしてくる。年季がかつて、今では変色  
した木の手すりに、ギザギザに刻まれた傷が沢山あつた。

……思い入れの深い場所、か。

幹土は、ほん、と手すりを軽快に叩いて手を離して、廊下を進ん  
だ。

部屋に入ると、壁際のスイッチを押して、部屋の隅の机に近づい  
た。そして、引き出しを見下ろして、頭を伏せる。

……「じめんな、叔父さん。

幹土は引き出しを開いて、一つの埃まみれの日記帳を取り出す。

……明日、必ず元の場所へ返しておくから。

椅子を引いて座ると、その日記帳を机の上で開いた。

彼女の名前は、本田佐江子。この洋館に勤めていた二十一歳の使  
用人。

佐江子は「お嬢様」の世話役として、彼女が幼い頃からずっと時  
間を共にしてきた。

毎日決まった時間に部屋にお茶を運んだり、彼女に鼻歌を真似し  
なさいと言われて、恥かしいのを我慢して歌つたり、共謀してオネ  
ショを隠蔽したり。

これまでの飛ばし読みで大体掴めたのは、そんな程度だった。あまりゆっくり目を通すと悪いから、「お嬢様」の文字だけを探して読み進める。しかし、その「お嬢様」の数の多いこと。

ページを捲るにつれて、「お嬢様」との日常が目まぐるしく過ぎていって、そんなある日彼女は……何だこれ。

「君と愛し合つたあの日、俺は心を決めた。君とずっと、繋がつていたい。性的にも、日常的にも。……あの人は、公園で一人つきりになつた時、真顔でこう言つてきた」

これ……プロポーズか。

少し違うような気もするけど、と思いつつも、ぐくんと唾を飲み込むと、血眼を向けて、ページを捲る。

初めて受けたプロポーズに、彼女は使用人の先輩に、助言を求めてみた。すると、

「こんな機会ないわよ、あなた。背が高くて、優しくて、男らしくて……まあ、本当はそんなことどうでも良いんだけどね。その人が、あなたを想ってくれている、それが何よりも大事な事。……結婚しない。幸せになれるわ、きっと」

そう言つて、その先輩は、我が事のように喜んでくれた。けれど、彼女は、

「私は正直、結婚なんて気が進まない。何故なら、結婚すると、この山を下りなくてはいけなくなるから。お嬢様の元を去るなんて私にできるはずがない」

達筆な字がずらすらと続いていく。

……彼女ことを想つていたのは、両親だけじゃなかつたんだな。その後の日記の内容は、プロポーズの件は影を潜めて、再び「お嬢様」の話が現れ始めた。

こうして読んでいると、どうしてか、すじく胸が締め付けられてくる。まるで、実際にこの目で見ているように、「お嬢様」彼女の、仕草の一つ一つが頭に浮かんでくる。

残された片手だけで、ページをペラペラと捲つていくと、すぐに

その手は止まつた。

そこに書かれた、一行の文字。

「ご主人様と奥様が、お亡くなりになられた  
外出先で、事故に遭つて。

その一文の横には、ペンを無茶苦茶に走らせた、黒い傷跡が残つ  
ていた。

夫婦が亡くなつたと同じ頃に、「お嬢様」の容態も悪化した。

「胸を押さえて、苦しげに咳き込むお嬢様の口に、指を差し込んで、  
薬を入れた。彼女はそれを、血のついた痰と共に吐き出した」

「突然彼女がベッドの上で、指を真上へ伸ばした。彼女は何を掴んだのか、その透明なものを握ると、父さんの手はおつきいね、と一  
言そうつぶやいた」

……「んなの、読んでいられるかよ。

歯を食い縛りながら、ページを飛ばす。

彼女の同僚は次々とこの屋敷の使用人を止め、山を下りていつた。  
そんな中で、彼女は。

「私だけは、お嬢様と共にいることを誓います」

涙で干乾びたページに、ぐらぐらに傾いたその字は書かれていた。  
「この家は、雇い主が見つからなくて、途方に暮れていた私を拾つ  
てくれた。でも、それが、決意した理由の全てじゃない。私はただ、  
お嬢様が、あの美しい仕草で、あの純粹な瞳で、私に潤いを与えて  
くれればそれでいい。あの笑顔が、失われなければ」

そして、次のページを開き　　すぐに日記帳を閉じた。そこに描  
かれていたのは。

　お嬢様。お嬢様……。

同じ言葉を、何度も、願いを込めて書き綴り、その無数の羅列が、  
しわがれた紙を埋め尽くしていた。

「彼女は、愛されていたんだな、本当に」

よりよれの表紙に浮かんだ新しい涙の跡に、幹土は指を擦つて、  
視線を伏せた。

書斎は真っ暗で、扉を閉めると、謂れもない閉塞感が襲つてくる。

……結構、暗いのって苦手なんだよな。

こないだの夜は、他の人のいる手前だつたし、意地を張つて澄ました顔をしていたけれど。

外海春芳は机に近づき、ペンライトを机に垂直に立てて、天井に丸い点を浮かばせた。

「おばあちゃんの書斎も、こんな感じだつたな」

淡く浮き上がつた書斎を見渡し、春芳は奥の本棚へ近づいた。

……確かに、この辺だつた気がするけど。

棚の、空いた隙間を覗き込んでいく。三つ田に覗いた隙間に、眼鏡ケースは入つていた。けれど。

「……おかしいな」

基喜は、辺りの棚を見回した。そして、ペンライトを立てた机の方を見て、彼女と目が合つた。

白いシャツに黒いスカート。半袖から出た細い腕が、水平に左右へ伸びると、足が爪先立ちになり、そのまま、彼女はくるりと回転した。目を春芳へ向けながら、彼女は唇を笑わせる。

……誰、だ？

ケースが手から滑り落ちる。春芳は腰を抜かして、背中を棚に打ち付けた。

……何を、する気、だ。

近づいてくる彼女の白い顔が、春芳の見開いた目に映つた。

少女は眼前に立つと、髪をこちらへ垂らして、のぞきこみんできた。

そして、少し顔を傾けてくる。

「君は」

春芳は、彼女の腰の辺りに触れようとした。その途端　ペンライトの光が消えた。

春芳は体を大きく跳ねて、悲鳴を上げた。

「誰だ、お前は！」

春芳は、前方へ思い切り腕を振った。しかし、それは空を切る。突然、椅子を引く音がした。木と木を擦り合わせた甲高い音が、やがてぴたりと収まる。

「……何、だ？」

震えながら立ち上がり、ゆっくりと窓際へと歩み寄る。そして、手を左右へ振つて、ペンライトを探し当てるが、そのスイッチを押す。

少女の影は、もうなかつた。ただ。ケースになかった眼鏡が机の上に置かれ、肘掛け椅子が、座つてくれとばかりに、こちらを向いていた。

春芳は眼鏡を取り、濡れた髪の間へフレームを滑り込ませる。そして、椅子に座り、ようやく笑みを口元に戻すと、

「……全く。不思議なことがあるものだな」

そう震えた声で書斎を見渡す。

……そう言えば、おばあちゃんは。

不思議な話が大好きだった。おじいちゃんが使っていた書斎で、そんな話をいつまでも聞かせてくれて、いつも気付いてみれば夕方になつていた。

「お夕飯の仕度、手伝いましょうね」

そう柔らかく微笑んで、おばあちゃんは、続きをまた明日ね、と書斎の鍵を閉める。

その時決まって差し込む金色の鍵が綺麗で、ある時それをせがんでみたのだけれど。

……これは、魔法の鍵なの。

魔法の、鍵？

……そう。素敵人への出会いを叶えてくれる魔法の鍵なの。

ちょうどいちょうどいと欲しがる孫を見て、駄目よ、とおばあちゃんは意地悪くそれを高く持ち上げてしまった。

……あなたが大きくなつたらあげる。ただし、この鍵は、1回ポツキリしか使えないの。大事にしなさいね。

「ぐぐと頷く孫の頭を、おばあちゃんはにこにこと笑つて撫でた。そこでふと、おばあちゃんは素敵な人に会えたの? と聞いてみたのだ。

「会えたわ。おじいさんの形見のこの鍵を、昔、落としてしまったことがあるの。けれど、拾ってくれた女性がいてね。

優しい人? と小さな口はつぶやく。

「彼女はとっても素敵な人だったわ。年の差はあったけれど、私は友達になつてね。

そう言つて、おばあちゃんはわざと見せびらかすように、それを胸ポケットへと入れたのだ。

「……結局、もらえたんだけどな」

ジーンズのポケットに手を入れて、それを取り出した。ペンライトに近づけると、錆び付いたその鍵は、鈍く煌めいた。

「くれるつて約束したのに、いなくなつてしまつたら、もらいたくてももらえない。だから、俺は。

書斎の机の上に、無造作に置かれていたこの鍵を、自分から手にしたんだ。そして あいつと出会いうことができたんだ。

「……あいつが素敵な人つていうのは、何か変だけどな」

「そう独り言を言つて笑いながら、春芳は視線を前へ向けた。もう恐怖は冷め、穏やかな気持ちがただ溢れていた。

「……おばあちゃんが信じた通り、幽霊つて本当にいたんだ。」

「どうかこれが錯覚じゃありませんよ!」

「今夜の出来事はきっと、おばあちゃんとの思い出を蘇らせる引き金となつてくれる。

「きっとこの思い出は、ビックりもない孤独感から、俺を遠ざけてくれるから。

「……あら?」

中庭を歩いていた茂川美世は、別棟の一室に、ぼんやり明りが点つていてことに気付いた。

……誰かしら。

そう思つて、窓に近づいた時、背後から、「せんせーーー」と呼ぶ声がした。後ろに振り向く。

「……澄子ちゃん」

「酔いはもう醒めましたか?」

「あいにく、まだよ。……一緒にどう?」

美世は、噴水の前で鈴木澄子に手を差し伸べて、にっこりと微笑む。

「お供します」

澄子は凜々しい笑顔を向けてきて、じょうの手に自分の手を重ねた。

手をつないだまま、ゆっくりと噴水の周りを回る。美世はふともう一度、窓を見遣つたが、電気は既に消えていた。

「……どうしましたか?」

「ううん。何でもないの」

「先生つて……彼氏、できましたか?」

「残念ながら」

舌を出して苦笑する美世に、澄子は、「やっぱりそうでしたか」と笑う。

「だつて、作る暇なんてないんだもの。忙しいし」

「大変ですね、教師つて」

美世は無言で頷いて、深いため息を吐き、

「……この旅行に、急に参加したって言つ出したのは……実は、何もかも嫌になつちゃつたからなのよ」

そう言つて美世は、うんざりした顔を夜空へ向ける。澄子は先生の手を引いたまま、振り返る。

「……つまらないですか? 教師つて」

「大変よ。けど、楽しいこともあるわ」

澄子はふと俯いて、こちらに体を向けたまま立ち止まつた。

美世は、ふ、と形の良い唇を笑わせて、「相談したい事、あるん

でしょ？」とつぶやく。

「私……」

「予想するに……幹士君関連かしら？」

黙つて頷く澄子に、美世は肩に腕を回して、彼女を引き寄せた。そして、肩をぽんぽんと叩いて、慰めるように囁く。

「……言つちやつたのね？」

「馬鹿でした。今になつて、なんで私は……」

澄子は、睫に滲んだ涙を月明かりに光らせる。

「いいじやない、すつきりしたんでしょ？ 本当に」と言つたんだもの」

「全然すつきりしてません」

澄子は寂しげな目を、自分の足先に向けた。

「幹士君は、何て言つてたの？」

そう訊いても、返事は返つてこなくて、

「……しじうがないわね。幹士君、真面目すぎるから、折り合いつける為に、どうせひどい言い方したんでしょ？」

「幹士は悪くありません、私が悪いんです……遅すぎたから」

その弱弱しい声に、美世は眉をしかめて、「もひ」と笑い、

「何、自己嫌悪？ 澄子ちゃんは悪くないわよ。幹士君の優柔不断が原因……」

そう言つて美世は、澄子の肩に自分の顔を埋めて、ぽつりと囁く。「幹士君も、昔、色々あつたの。仕方ないのよ、あんな風になつてしまつたのも」

「幹士が、幸美に負田を感じてるのはわかっています。……ただ、私は、今、自分がどうすれば良いのか、わからなくて……」

頬に触れる彼女の髪が、小刻みに揺れ始める。

「普段どおりでいいのよ、別に。……あなた、じつして女の子らしい一面見せてあげれば、幹士君だつて擦り寄つてきたんじゃないの？」

「いやです、そんなの」

澄子は涙声で笑うと、体を離して、

「私は、幹士にこんな弱い姿、見せたくないんですね」  
「そつか、と美世は微笑み、彼女の田元に手の先を当てて拭つてやる。

「……先生も、少しばは恋愛に立ち返つてみればいいのに。仕事ばつかりやつてたら、あつといつ間におばさんですよ?」

「つむさいわね。幹士君と同じようなこと言つんだから」

澄子は肩にかかつた髪を払つて、吹つ切れたように笑うと、

「先に戻つてますよ、先生」

そうつぶやき、中庭を出て行つた。

美世はそれを微笑んで見送ると、

「……私だつて、そうしたいのは山々なんだけどね」

やう言つて、溜息を吐く。。

「帰つたら、あの小僧達、またなんか問題起つてやうね。……ああ、面倒臭い」

氣付けば、本音が出ていた。

……私は今、何を。

自分の口元に手を置きながら、美世は、ふと保護者達から向けられたきつい言葉を思い出す。

「……まったく、やんなつちやつわね、あのオバサン達」

もう一度口から漏れた本音。

美世は首を振つて、いけないわ、と自らを戒める。

……そんなこと言つなら、何で教師やつてるのよ。

美世は、泣きやうな顔を浮べて、花壇の前にしゃがみこみ、膝を抱いた。

……せつかく気晴らしに来たのに、一日中、仕事のことばつかり考  
えてもしょうがないじゃない。もつと楽しまなこと。明日には帰る  
んだから。

唇を震わせて、目頭が熱くなつてくるのを感じていると。

その時、肩に何かが載つたのを感じた。振り向くと、冷たい感触

が頬に当たる。

「酔い、醒めましたか？」

そこに立っていたのは幹士で、彼はペットボトルを差し出して笑っていた。

美世は慌てて前を向き、田をざゅつと瞑つて、涙を絞り落とすと、「ありがとう」と肩の上のそれに手を伸ばした。

「……もう遅いから、部屋に戻りましょ。」

「そうね」

そう言つて立ち上がり、もしかして慰めの言葉でもかけてくれるのかしら、と期待して振り向くと。

幹士はさっさと渡り廊下へ歩き出していた。

美世はむつとして立ち上がり、小走りに彼の背中を追つ。

「冷たい男ね、君は！」

ペットボトルの底で、頭を思いつきつ叩いてやる。

「痛つて！ 何ですか、いきなり！」

「あれを見といて、何か言つことないの、あなた？」

「あれつて……何のこと？」「

本気で不思議そうにひぶやく幹士に、美世は。

「何よ、この男」

そう呆れたように、息を吐く。しかし、すぐに柔らかく微笑むと、「……こんな感じ、かしらね」

不意打ちとばかり、彼の腕を両手で掴み、ぴつたり体を寄せる。幹士は「何ですか？」と眉をしかめて、腕を引っ張る。それをぎゅっと掴んで離さない美世。

「……こりの、久しぶりだなあ」

美世は顔を幹士の肩に載せながら、可笑しそうに笑つた。

「ちゃんと恋人作れば、いくらだつてできるんじゃないですか？」

「……なかなかそういうもいかなくてね。ここ、ちよつと良い実験体があるではないか」

まったく、と幹士は苦笑して視線を下げる。

「……鈴木、何か言つてましたか？」

「せつりとつぶやいた。

「さあね。冷たい男には言つ必要のない」と

「冷たい男つて……」

「……そんなどり行きましょ、ダーリン」

頬を腕にこすり付けてくる美世に、幹士はいい加減眉をひそめ、

「やめてくださいよ。……胸が当たつてますよ」

とつぶやく。こんなのが当たつてるうちににも入らないわよ、と美世はぐいぐこと引っ張つて歩き出した。

先生と並んで広間へ帰つてくると、テーブルをすっかり片付けて、紅茶を飲んでいた幸美が、

「すぐに淹れるからね、幹士、先生」

そう言って、用意していたカップを引つくり返して、紅茶を注ぐ。

「サンキュー、幸美」

先生は、ソファードで軒をかいている基喜を足で転がしてどけ、幹士はすやすや寝息を立てているミキを、優しく腕に抱えて移しスペースを確保した一人は並んで腰を下ろす。

「どうぞ」

美代子がカップを手渡してきて、幹士はサンキュー、と腰を浮かせて受け取ろうとする。その時、視界がぐらりときた。

「ちょっと……！？」

幸美が駆けつけてくるのが、視界の端に見えた。幹士はそのまま倒れ、絨毯に顔を伏せる。

「頭が」

両手で押さえて縮こまる幹士。

「どうしたの、幹士君！？」

先生が耳元で大声を上げてくる。

「頭が、痛い……」

割れてしまふかもしれない。血管の流動は感じられず、ただ、頭の中で光が閃いて、刺すような痛みが広がつていく。

「う　ああッ！」

呻きながら、絨毯の上を転げ回る。

「ねえ！？」　どうしたの！？」

幸美が背中に被さるようにして、訊いてくる。

「駄目だ……本当に。

頭痛は数秒のうちに劇的に激しくなり、幹士は痛みに肩を跳ね上

げる。

そして、突然糸が切れたように、体から力が抜け 意識はそのまま、まどろみの中へと飛

彼女は中庭で一人しゃがんで、花に言葉を投げかけ、くすくすと笑っていた。しかし、彼女は突然立ち上ると、踊りだす。ひどくぎくしゃくとした、機械的な足取りで。

いつか見た彼女の姿とはまるで変わっていた。踊るその足は折れてしまいそうに細くなつて、白い頬は青ざめて大きくこけていた。彼女はふと、空を見上げた。その瞳には、青空も そこに漂う雲も 何も映つてはいなかつた。

以前見た、輝くようなあの瞳は、どこに行つてしまつたのか。あの瞳がまた見たかったのに。

彼女は口元に笑みを浮べて、黒ずんだ瞳をにっこりと細めた。紙切れを顔に貼り付けたような、生氣の抜けた笑顔。

以前の、わんぱくで無邪気なあの笑み。それを、誰が奪つたのか。ひどくいらだちが幹士の心を掠めた。

幹士は彼女の顔の前に、自分の顔を近づけた。俺を見ろ、と。そう訴えるように強くその瞳を見つめた。けれど当然、幹士の姿は瞳には映らず、瞳の中の黒い霧は取り除かれることはなかつた。

ゆつくつと瞼を開くと、体はベッドの中にあつた。隣には幸美が、手を握つて座つている。

田が合つと、幸美は、「幹士」と一言呼んで、良かつた、と田尻を垂れて微笑んだ。

「……いきなり倒れるから。どうしたのかと思つたじやない」幸美はおでこに手を当つててきた。その手を掴んで、額から剥がさせる。

「もつ、頭の痛みはないし、体にはどこも異常はないみたいだから普段どおりの笑顔を、取り繕おうとする。

「……たぶん、貧血だ。少し、はしゃぎやすきたみたいだな」  
顔を濡れたタオルで拭かれながら、そう言った。

「無理したのね、きっと。今日はもう、眠つた方が良いわ」  
その時、ミキが部屋に入つてきて、しょんぼりした顔で近づいてきた。

「あ

幸美はそつぶやいて彼女を見ると、氣まずそつて視線を逸らし、タオルを洗面器に浸す。

「今、起きたところ。もつ平氣だから」

幹士はそう言つて机の椅子を指差し、ミキは振り返つたが、その時には、幸美がもう椅子を引いてきていて、

「はい、どうだ」

優しい声でミキの背後へ置いた。ミキは無言で頭を上げて腰を下ろす。

……じつしたんだろ、この二人。

「どいかよそよそしい様子の二人をじつと見る。

「幹士、あれからじつなつたか、覚えてる?」

沈黙に耐えかねたのか、幸美が口を開く。

「……全く。意識を失うなんて、やばいのかな、どいか」

「……疲労だと思つよ。澄子も、幹士が昼間、眩暈をしてたつて言つてたし」

幸美は視線を逸らして、そつ無機質な声で言つ。

「そつ……なんだ」

幹士は視線を伏せる。

「何にせよ、明日いこを出発したら、病院行つた方が良いわね

」そう幸美が言つた時、

「いめんなさい、幹士兄さん」

ミキは突然椅子から立ち上がり、そつ言つた。

「ミキさん……?」

悲しげな顔を浮べてこるのに面食らつたが、すぐに微笑んで、ミ

キの頭を優しく撫でた。

「どうしたの？　いきなり謝つたりして」

「「Jの子が、」

幸美がそう何かを言いかけて、すぐに黙つた。

「どうしたんだよ。何か、あつたのか？」

「……何も、ないんです。ただ私、幹士兄さんを困らせてしまいました。『ごめんなさい』もつ一度としませんから」

ミキは、もう一度頭を下げる。幹士は「おいおこ」と慌てて上げる。

「何なんだよ、急に」

「「Jの子があんなことするから……幹士が大変なことになつたんだつて……私、責めちゃつたの」

「やつか……なるほどな」

幹士はついついそうな幸美の顔を見て、視線を下げる。

「ミキさん、幸美も悪気があつたわけじゃないんだ。許してやってくれ」

「「Jめんなさい。違つて、私の所為です」

ミキはそう俯いて、再び座る。

「……洗面器の水、入れ替えてくるね」

突然そう言つと、幸美は部屋を飛び出していった。洗面器の水が跳ねて、カーペットに染みを作る。

幹士は溜息を吐いて、

「ミキさんは悪くない。あいつ、怒つた時す「」に剣幕だつたら？」

「……あいつがああなつたのは、俺の所為なんだ」

ミキはそれでも、「『ごめんなさい』と俯いたままつぶやき、震えている。彼女の穿いたジーパンに、ぽつぽつと青い染みができるいく。

「……相当、ひどく言つたみたいだな。呪きのめさんばかりに、強

く。

そう言つて幹士は、視線を下げる。

「あいつ、俺のことになると、すぐ神経質になるかい。ミキさん、嫌いになっちゃったか？……幸美のこと」ミキはきゅっと歯を結んで、頷いた。頷いて一しかしすぐに首を振る。

「だろ？……ああもつ、泣かないでくれよ」

幹士は自分の額に置いてあつたタオルを取つて、彼女の額に当てる。

「……もう遅いから、寝た方がいい」

すると、ぽつりと「頭、痛くないんですか？」と小さな声が聞こえた。

「大丈夫大丈夫。大したことないから」

ミキは立ち上がると、椅子を机に戻し、そして椅子の背を掴んだままじっと佇んだ。けれど、突然振り返り、もうその顔にはいつもの笑顔が浮かんでいた。

「明日になつたら、元気になりますか？」

「なるよ」

幹士は笑つて頷いた。

「おやすみなさい。幹士兄さん」

「おやすみ」

戸口の前でもう一度振り返つて、にっこりと白い頬を緩ませて、「幸美さんのがつこんぶりには、参つたわ」

そう一言零して出て行つた。

幹士は起こしていいた体を横たえ、溜息を吐いた。

「……幸美が怒つたか」

その時、「幹士」と声が聞こえた。幸美が部屋に入つてきて、ベッドに近づくと、崩れるように幹士の胸に顔を伏せてきた。

「皆にひどい」と呟つちやつたよ……」

「仕方ないさ」

幹士は幸美の髪を梳く。

「ひうなつたらもう、あきらめるしかないと。嫌われてもいいやつ

て、開き直つてみろよ」

嫌だよ、そんなの。そんな声が聞こえる。

「……でもな、幸美。たぶん、あいつら、ちょっとやそつとのことで嫌つてくれないと思つぞ。……大丈夫、幸美は十分好かれてるさ」

幹士は、嗚咽を漏らす幸美に、

「何したんだ？」

と優しく訊いた。

「……まず、幹士を運ぶのを手伝おうとした先生の肩を……突き飛ばして。そして……外海君にもひどいハつ当たりをしたわ。それから……」

「もういいよ」

幹士はぽん、と彼女の頭に手を置き、

「皆には、謝ったのか？」

腕の中で、幸美が静かに首を振る。

「幹士の世話は、私一人でやるつて言つたから……たぶん皆、今頃は私に愛想尽かして、もう寝ちゃつてるとと思つ」

「なら、謝るのは明日でいいよ。今日は、ここで寝な」

うん、と静かに頷き、幸美はシーツの中に頭から入り込み、こちらの顔の横から、ひょつこり頭を出させた。

「そうだ、幸美。俺の鞄に小さなポーチが入つてあるから、取つてくれないか？」

幸美は、「うん」とシーツから片手を出して、近くにあつた鞄から白いポーチを抜き出し、無言で手渡してくる。

ポーチを開くと、小さなオルゴールがたくさん詰まつていて、その一つを取り出し、ぜんまいを巻いて、幸美に差し出した。

「この曲でも聞いて、落ち着け。……音質は落ちるけどな」

ペールギュントの「朝」だつた。昔、一緒に行つたコンサートで聞いたこの曲を幸美が気に入り、それ以来、毎朝、朝食の時に流していた。

「これって、北海道に行つた時に買つたんだっけ？」

幸美はポーチから一つずつ取り出していき、ぜんまいを巻いて、

それを幹士の胸の上に載せて並べていく。

そんな中、幸美は突然、「ぶつちやつた」とつぶやいた。

「……どういふことだ？」

幹士は跳ね起きて、胸からオルゴールを転がせる。

「ミキちゃんをね、ぶつちやつたの」

幹士は啞然と幸美を見て、

「強く……ぶつたのか？」

そう訊いた。

一度、強く　幸美はつぶやいて、俯く。

「ごめんね。私、馬鹿だから。自分で……本当に、ごめんね……」

幸美は肩を震わせる。

「謝つたんだる、ミキさんに。……なら、許してくれ。あの子、優しいから。すぐく」

幹士は、幸美の頭を胸に引き寄せて、両手に包んだ。

嫌。

けれど、何故か幸美はそれを拒み、腕を払い除けると、突然ベッドから降り立つた。

「もういいんだよ、幹士。私なんかに、気を遣わなくていい

「何……言つてんだよ……？」

「幹士や、」

澄子のこと、好きなんでしょう？

目を見開く幹士。

「わかってるんだよ、私には」

幹士は啞然と幸美を見遣つたが、すぐに引きついた笑いを浮べて、

「おいおい」とつぶやく。

「こないだのアイスホッケーの」と、まだ気にしてるのかよ。あれは、ただ単に……

「違うわ！」

幸美は幹士の胸を両手で強く押しやった。仰向けに倒れた幹士は、見開いた目を幸美に向ける。

「……それだけじゃない。私は、知ってるもの……幹士が高校の時からずっと、澄子のことが好きだったこと」

幹士は、息を止めた。

「幹士はいつも、澄子を遠くから見つめてた……もう、ばればれよ。……でも、私はそれでも良いと思つた。こうしておき合つてれば、きっといつかは振り向いてくれると……」

幹士は唇を引き結んで、突然起き上がり、

「馬鹿！」

幸美の頬を平手打ちした。

「俺はこんなに好きだっていうのに、お前は……一度も気付いて、くれなかつたのか？」

幸美は、首を横へ向けたまま、目を見開き、涙を溢れさせる。

「俺はとっくの昔に、お前が好きになつていて。鈴木を好きだつたのは確かだけど、今は……今は俺には、お前だけなんだよ」

幹士は、腕を伸ばして、彼女の手を掴み、強引に引き寄せる。そして、抱きしめる。

「泣かせるなよ、男に。馬鹿」

幸美の髪に、熱い零が零れ落ちていく。

「だつて私……幹士が優しいから、べたべた付き纏つて……邪魔じや、ないの？」

「そんなわけないだろ。幸美と出会つて、幸福になつたのは俺の方だ。お前が俺に執着してるように、俺もお前に馴れ馴れしく付き纏つてるんだよ。邪魔であるはずないんだ……好きなんだから」

幹士は、幸美の肩にかかつた髪に顔を押し付けて、涙をそれに滲ませる。

「幹士……『ごめん。私、最低な人間だ』

幸美は目を瞑つて歯を食い縛り、幹士の震える背中をぎゅっと強

く抱きしめた。

また、少女の夢。

彼女の額には、汗に濡れた髪がべつたりと張り付き、それは荒い息遣いと共に揺れていた。

もう長くはない。あと少しで、彼女は。

医師が煙草を銜えたまま、ぽつりとつぶやいた。

それを耳にした隣の女性は、目を見開いた。彼女は、医師の肩に手を伸ばし、触れるか触れないかの距離で制止させた。

それは、本当なのですか。彼女の唇は、そうつぶやいた。

本当です。

医師の、白ひげを被つた赤い唇が、かすかに動いた。

二人の視線の先に横たわる少女。乱れたパジャマの襟からのぞく首筋を、昼間の日差しが照り輝かせる。

目を瞑っている少女は、その白い肌を薄く青色に染めて、苦しそうに喘ぎ、体を右へ左へ……。

……なんで、この子がこんなに苦しんでいるんだよ。

そうつぶやいた時。ふと少女の手が上がり、部屋の隅へと向けられた。

震える指の先には、棚の上の、一つのオルゴールがあつた。

気付いた女性が、それを少女の胸の内に収めてやる。ぎゅっと抱きしめる少女。熱い吐息が、木箱の表面に白い膜を作らせる。

少女はもう一度手を伸ばそうとし、女性はその手を掴み、一つの鍵を握らせた。すかさず、少女は木箱に差し込もうとする。

鍵先は穴を逸れ、しかし女性の手に助けられて、入った。開かれると、あの旋律が奏でられる始める。

その一室に、オルゴールの音階が、悲しく響き渡り、医師は窓の外を無表情で見つめる。短くなつた煙草から、灰が床へ落ちた。その傍らで女性が、顔を覆つて泣き出した。

……「んなことあるのかよ。……笑った顔、見せてくれよ。

幹士は少女の頭をそっと撫でる。確かに、手に残る感触があった。それは、柔らかく、べたついた髪で。けれど、鼻を近づけると、優しい匂いがした。

夢から覚めて、起き上がつて傍らを見ると、幸美の姿は消えていた。

……幸美、大丈夫かな。

彼女の部屋へ行こうとすぐに廊下へ出るが、ふと足を止めた。

「……行つてどうする気なんだ、俺は」

俺が皆に謝つておくから。そんなことを言つて、安心させる氣か。

「……幸美が自分で謝らないと意味がない。それに、」  
幸美はもう決心してゐる。俺が「こじでやひつとしている」とせ、ただの余計なお世話だ。

足先を変える。

「……コーヒーでも、飲むか」

幹士は一階へ下りて、広間で一人でコーヒーを飲み、じぱりくそのまま静かに過ごした。

ふと時計を見て、「まだかな」とつぶやく。時刻はもう八時を回つていた。

……皆そろつて寝坊かよ。昨日、あんなに飲むから……。

幹士はカップを置くと、広間を出て、再び一階へ上がつた。朝食当番の基喜の、部屋のドアをノックしてみた。何度叩いても、出でこない。

……どうせまた、エロ本ダイブして寝てるんだろうな。

仕方なくドアを開ける。しかし、ベッドの上には基喜の姿はなかつた。それどころか、シーツは綺麗に整えられ、散らかっていたはずの床の上には何もなくなつてゐる。

「あの基喜が……よく片付けなんかしたもんだ」

窓へ近寄り、外を見る。そして、目を見開いた。

前庭の、花壇に挟まれた道を、あの少女がゆっくりと歩いている

と思つたら。

「……なんだ。ミキさんかよ」

よく見ると、その影は、あの少女より少し背が高く、何より足取りが微妙。いたさか自信に溢れすぎているというか、あの清楚な歩き方は見る影もない。

幹土は、窓を開けて、

「何してるんだ、ミキさん！」

そう大声で呼んだ。

声が庭に木霊しても、ミキは振り向かず、視界からすぐには消えた。「全く。朝っぱらから何してるんだよ」

幹土は窓から身を乗り出して、歩いていった方向を見る。

……仕方ない、連れ戻すか。

窓を閉めると、部屋を出て、再び階段を駆け下りた。そして驚いた。

広間にいつの間にか春芳、先生、鈴木 それに幸美がそろつていて、彼らの顔が一斉にこちらへ向いた。

「もう起きて平気なのか、幹土？」

春芳がソファーから立ち上がり心配そうに訊く。

幹土は階段の前で立ち止まつたまま、畳然と四人の顔を見つめていたが、すぐに我に返つて、

「あ、ああ……心配させて悪かつたな。貧血だつたみたいだ。……

それより、」

どうしてお前ら……、と不思議そうな顔つきで広間へ近づいてくる。その時、

「よつ、やつとお田覚めか、幹土」

悪役のような声で、厨房から基喜が出てきた。

「起きてたのか、お前……いつの間に」

「そんなに驚くことねえだろ。俺は毎朝早起きだ」

胸を張る基喜に、「昨日、寝坊しなかつたっけ?」と美代子のど

こか怖い声が重なる。

彼女は広間へ入ると、皆の使ったカップをプレートに載せて、「もつもつとでできるから、待つてね」とこちらへ振り向き、厨房へ運んでいく。

「……いつの間に下りてたのか、お前達。俺はここで待つてたんだぞ。どこ行つてたんだよ」

広間に入つて、畳然とした声で言つと、

「は？ 私達じゃ、いつしてのんびりお茶飲んで、ずっとお前を待つてたんだけど。……倒れたせいで、頭までいつちやつたか、幹士？」

そう言つて笑う鈴木に、幹士は眉を寄せて、「本当に、俺はここで……」とつぶやきかけるが、

「幸美が、幹士の部屋で寝てたんだってな」

鈴木が可笑しそうに、けれどどこか震えた声で突然言つて、遮つた。

幸美は、「そつよ、それがどうかした？」と、澄ました顔で言つ。幹士は幸美をじっと見つめた。すると、幸美はこちらへ目を向け、もう大丈夫だから、といつよつに微笑んだ。

「なら昨日は……熱い夜を過ごしたのかしら？」

先生のからかうような声に、幹士はむつとする。

……ああ、そうだよ、確かに熱い夜だった。目頭の熱くなる夜。

「そうだ。熱々の夜を過ごしたんだ」

幹士がそう言つと、「え」と戸惑いの声が皆の口から同時に漏れる。

「ほ、本当に？」

先生が引きつった笑みで訊いてきた。

「本当に」

幹士は、平然と頷く。視界の隅で、鈴木が唇を引き結んで、俯くのが見えた。

「何言つてるのよ、馬鹿！」

幸美は真つ赤になつて、立ち上がる。

「……」「、」こんな話、訊くのは失礼だぞ」

春芳は、じほん、と咳一つして、赤い顔を脇へ向けた。

場に漂うどこか気まずい空氣に、幹士は、ふ、と笑みを漏らし、「冗談に決まってるだろ。そんなマジになつて、うろたえてやんの」そう笑いながら、視線を幸美へ向ける。幸美は頬を紅潮させたまま、「もう」「うつ」とそっぽを向く。

春芳と先生は、

「お前が言つと、冗談に聞こえないんだよ」

「教師の前で、そんな冗談言つて、やめなさいてば」

仲良く声をそろえて言つ。

「じゃあ俺、ミキさんを探してくるから」

幹士は四人に手を上げて、広間を出る。

「どうこうこと? ミキちゃん、まだ澄子の部屋で寝てるんじゃないの?」

先生が訊くと、幹士は振り向く、

「さつき、前庭で歩いてるのが、窓から見えたんだ。ちょっと行って連れてくる」

「私も行こう」

鈴木が立ち上がりうつとする。幸美がちらりとこちらを不安げに見た。幹士は、安心させるみつて幸美に視線を送り、「いいよ、俺一人で」と鈴木を制止する。

「でも」

じつとこちらを見つめる鈴木。

「それじゃあ、遅くなるようだつたら、先に食べてて良いから

「おい、幹士……」

背後から、すがるような声が聞こえたが、そのまま振り向かずに幹士は玄関へ向かった。

「……」「めんな。お前はもう、ただの友達だ。

扉を開けた途端、朝の口差しが眩しく下りてきて、幹士は切れ長の目を細めて、手をかざしながら、ミキの姿を探した。

「ミキさん！」

声が何度も庭に反復するけれど、振り向く影はどこにもなかつた。

……どこ行ったんだよ。まつたく。

しばらく歩き回つて、もう戻りつつ体の向きを変える。そこで、自分の口元が緩みきつていることに気がついた。安心したせいかうか。

……とりあえず、幸美は皆と仲直りできたみたいだし……。

よかつたよかつた、と上機嫌につぶやきながら、玄関の扉を開けよつとする。けれど、ふとその手を離し、自分の田元に当たた。そして、その指先を見下ろす。

「……本当に幸美が好きなんだな、俺は

「……どこに行つたのかしら」

中庭へ続く廊下を歩きながら、幸美は顔を俯かせてぽつりとつぶやいた。

ミキは結局食堂には現れず、朝食の後に幹土が部屋を見て回つても見つからなかつたから、皆で手分けして探すことになつた。

「……あつと、私の所為ね」

渡り廊下へ出ると、顔を上げて中庭を見渡す。ミキの姿はなかつた。

……私は自分のことしか考えていない。こうして探しているのも、きっと幹土の為。でも結局、それは自分の為なんだ……。

昨夜の記憶が蘇る。自分の腕が振り上げられ、あの子の頭に落ちる瞬間、あの子は抵抗しようともしなかつた。

頭を叩かれても何も言わず、あの子は唇を噛み締めてただ目を伏せただけ。それが、気に食わなくて。

「あなたがあんなことしたから、幹土が倒れたのよー。」

広間に響き渡る大声。周囲にいる皆の顔が、一瞬で固まつたのを覚えている。

「……それから、他にもまだ私は

自分の顔を両手で覆う。

……先生を、外海君を。

幹士を部屋のベッドに横たえた後、先生は看病しようと優しい手つきで彼の体に触った。それを見た途端、なぜか怒りが沸いてきて。

……そりやつて触つていいのは、私だけだッ！

そう思つた瞬間、先生の手を払い除けて、

邪魔なのよ！

そう叫んで、その手から濡れたタオルを奪い取つた。幹士は私のもの。誰にも渡さない。そんなうわ言をつぶやいて。

先生は啞然とした顔でじつと見てきて、その横で外海君が、「何も、そんな言い方ないだろ」と先生を庇つた。すると、勝手に口が開いた。

「あなた馬鹿じやないの？ 幹士の何を知つてるつて言つたのよ。私が一番知つてゐる、幹士のことは、外海君はさつさと部屋に戻つて寝なさい」

彼は「な」と驚いたように私を見た。先生は無言でベッドから離れると、ドアを思い切り強く閉めて部屋を出て行つた。その後を、「おい、先生！」と基喜が追いかけて、美代子ちゃんもそれに続く。彼らを見送つた外海君は、

「今の君に、何を言つても通じないな」と呆れたように肩をすくめた。

彼のそんな仕草を見たらカツとして、「うるさいー」と近くにあつた水の入つたペットボトルを投げつけた。彼はわずかに体を震わせ、それを身に受ける。

転がり落ちるペットボトルを、彼は黙つて拾い上げると、私の横に置いて言つた。

「幹士がそんなに好きなのか。でも、君の好きは、ビニがずれてるな。自分がことが好きなんだろ、君は……一番ね」

外海君が部屋を出て行くのを田を見開いたまま視線で追い、その背中が見えなくなつた後、やつと我に返つて。

やつちやつた。

ぼつりとそうつぶやいて、片手で顔を覆つたのだ。

幹士が危ない目に遭うといつも、彼を失うことへの恐怖が一気に膨れ上がり、居ても立つてもいられなくなる。

支離滅裂な思考が頭に飛び交つて、被害妄想が現れてしまつ

そして、気付けば人にひどいことをしてしまつてゐる。

……今まで、必死に気をつけてきたのにな。

幸美は中庭に出て、昨日の朝、幹士が座つていた石のベンチに腰を下ろした。

「涼しいなあ、風……」

なびく横髪に手を当てながら、ぼんやりつぶやいて、幸美は視線を落とした。その時突然、視界の内に、見慣れたスニーカーが入つてきて、それが目の前で止まつた。幸美は、すぐに笑顔を上げる。

「幹

けれど、その顔を見た途端、表情を暗くして、元のように視線を下げた。

「幸美、落ち込んでるのか？」

澄子が隣に足を組んで座つて、幹士に借りたらしいスニーカーの先を、こちらに向けてくる。

「私、最低だなつて……思つてたの」

ぼつりとつぶやくと、突然澄子の顔が視界に入つてきて、いきなり「馬鹿」と言われた。

「馬鹿つて何よ……」

「最低な人間なら、最低な人間らしく、もつと凶太く構えていつてこと」

澄子はそう言つと、顔を離して笑みを向けてくる。幸美は、何よそれ、と顔を膨らませる。

「昨夜、皆は幸美の最低な一面を、これでもかつてほゞ田の当たりにしたんだ。今頃、良い人間にならうつたつて、遅い」

幸美は澄子を睨み、「よく言つわ。この盗人が」と、つぶやく。

澄子は一瞬顔を固ませたけれど、すぐに苦笑して、空の噴水へ視線を向けた。

「盗人呼ばわりか。きついな、幸美に言わると「事実じやない。……聞いたんだからね、幹士に。澄子が告白したこと」

「……言つちやつたのか、あいつ」

「でも、幹士は私に、今はお前だけだつて言つてくれたの」

「あ、そ」

幸美は勝ち誇つたよつに、噴水を見て、そして寂しげに視線を伏せた。

「最低な人間が、ここに一人いるな」

ふと澄子がつぶやくと、幸美は、そつね、と小さく頷いた。

「でも、幸美」

澄子が真剣な声でこちらに向く。

「こんな最低な人間達を、皆は受け入れてくれたんだ」  
その言葉に、今朝のこと思い出す。

「めんなさい。

広間のソファーに座つていた先生へ頭を下げるとき、先生は苦笑しながら、「顔、上げてよ。幸美」と静かに腕を掴んできて、隣に座らせた。そして、

「もう気にしてないから」

その一言で、先生はいつも通りの笑顔を見せてくれるよつになつた。

外海君も彼なりに気遣つてくれたみたいで、いつ謝るうかと言いあぐねていると、突然、「お砂糖、いくつ入れる?」とカップに紅茶を淹れながら、聞いてきた。

「……ふ、二つ」

戸惑いがちにつぶやくと、OK、と彼は薄く微笑んで、二つ二つ、と口で数えながら入れて、「はい、どうぞ」

と笑顔で渡してくれた。果然としながら受け取ると、ぽつりと、

「昨日のことのはもういいから」と小さく囁いてきた。

基喜と美代子ちゃんにも謝った。すると、

「良いって良いって」

基喜は、手をひらひらさせてそう言い、

「私も、もし好きな人が大変なことになつたら、取り乱しちゃうかもしれないし……」

美代子は頬を赤くして基喜をちらりと見ながら、やつれてくれた。

……皆、こんな私を許してくれた。

「私、頑張つて、変わつてみよっかな」

幸美がぽつりとそう言つと、

「私も、今そう思つてたところだ」

澄子も、一つ頷いてみせる。

「最低な人間同士、頑張ろう、澄子」

そう言つと、澄子は、ああ、と静かに頷いて、膝の上に載つたスニーカーを、どこか寂しそうな眼差しですつと撫でた。

……じゃあな、幹士。もう、ただの友達だ。

空中廊下の扉を施錠すると、幹士は真っ暗な廊下を壁伝いにゆっくり歩き出す。

外から伝わる風の唸り声が廊下に反復して、轟々と鳴り続ける。

先ほど階段でつまづいた際に、壊れてしまったのか、携帯は電源が入らなくて、ライトが使えない。

「暗闇ほど、怖いものってないよな」

そんな軽口を叩いてみる。しかし、その声は掠れていて、膝は今にも崩れてしまいそうだった。

あの日の事を思い出す。今までずっと、意識の底に沈んでいたその記憶。

母さんが逝った後、父さんは夜遅くまで働くようになった。幼い自分は、父さんの帰りを待つて、部屋の隅にいつまでも縮こまっていた。

そう、あの部屋は真っ暗だった。何も見えない中、自分の息遣いや体の震えを、ただひたすらに味わい続けて。ただ父さんの帰りを待っていた。

あの日も、寝床に就かずはずつと待っていた。けれど、その時間がいつもより、少し長い気がした。だって、毎晩ぐしょぐしょに濡れる頬が、あの日は既にかさかさに乾いてひりひりしていたから。濡れた頬を拭ってくれる父さんの手が、恋しかったのに。いつのまにか、代わりに拭っていたのは、あの生暖かな空気だった。

帰つてこない　待ち続ける哀しみ、恐れ、胸の苦しさ　それ

らが溢れていって、幼い自分は、徐々にまどろんでいった。そして。居間のドアが、聞き慣れない足音を伴つて開いた時、自分は部屋を飛び出して、そこに佇んでいた親戚の叔父さんを戸惑いがちに見上げた。

「父さんは急な用事が出来て、今日は……いや、しばらくは、帰つてこないんだ」

叔父さんの引きつった笑みをじっと見上げ、数秒の後、幼い自分は目を見開いた。わかつてしまつたのだ。その小さな頭で、父の死を。

「叔父さんの顔つて、何考えてるかわかりやすいんだよな」歩きながら、あの日の叔父さんの顔を思い浮かべて、ぽつりとつぶやく。

笑つて言つたつもりだったが、実際、明りを点けてみれば、そこにある顔はひどく汗に濡れて歪んでいるだろ？

左足が床に擦れる音が、真下から聞こえる。

……まだ着かないのか？ 早く。早くしないと。

胸を上下する度に喉が震えて、高い息の音が廊下に響きだす。始まつた。

突然、足の力が抜けて、うつ伏せに倒れた。顎が床板を叩き付け、頭蓋が揺れる。

「暗闇つて、怖いな。全く」

正面へ向けた顔を震わせながら笑い、そして大きく息を荒げて、伸ばした手は痙攣した。

「暗闇つて、怖いよ」

真つ直ぐ前方へ視線を向け、泣きそうな、震えた声で、もう一度つぶやく。

目を塗りつぶす暗闇の、底の知れない深さ、黒さ、それらを感じて、一層喉を潰されるような、呼吸のできない苦しさが強められる。……闇はすべてを呑み込んで。体を孤独に浸らせる。

今まで孤独を感じなかつたのは、あいつらが 幸美がいてくれたおかげだ。彼らがいてくれたから。だから、暗闇にいても発作は起きることはなかつた。

けれど、今、自分は一人だ。本当に一人。閉ざされた空間の中であの日のように、自分の息遣いを繰り返し繰り返し、耳にし、

涙を口の中に含み、腕を震わせて。

だけど。

「ミキさん……待つているんだ」

涙でぐちゃぐちゃになつた顔を前へ伸ばし 手を伸ばして、床板に爪を立て、這つて進み始める。

荒い息遣い、体の震え、涙の味。あの口と何一つ変わつていないと思つた。けど、違つ。ミキさんの笑顔が、この口には浮かんでいる。

それだけで、倒れ伏した体は再び動き始め、荒い息を吐く口は生氣を噴き始める。例え、発作に体が侵されていても、彼女の元まで地を這つてでも辿り着いて。

扉を開くと、その先から溢れ出した光が目を真っ白に染めてきて、幹士は堪らず瞳を閉じる。

ゆつくりと体をひきずつて、扉の隙間から出ると、幹士はそのまま仰向けに横になつて息を弾ませる。

足近くで、扉が音を立てて閉まるのが聞こえた。

「やつと、着いたか……」

幹士は胸を押さえながら、膝をついて立ち上がると、そのまま、今の自分が出来得る最高の速さで駆け始めた。ほほ、歩いてくるのに近い。

「ミキさん……」

ドアを開いて、ベッドを見ると、そこには、静かに身を起こして、こちらを見つめて微笑むミキの姿があった。

「幹士兄さん」

小さく彼女がつぶやくと、幹士は息を弾ませながら彼女の顔をじつと見て、ベッドに大股で近づいた。そして。

「良かつた……」

彼女の頭を胸に引き寄せて、両手で包み、撫でる。震えた声で繰り返しそうつぶやく幹士に、ミキは顔をわずかに赤く染めて瞳を潤

ませ、「良かつた」と同じよつとつぶやく。

「平気なのか、もう？」

彼女の腕を掴んで体を引き離して訊くと、

「はい。発作は収まつたみたいです」

と、微笑んで頷いた。

幹士は安心したように息を吐くと、彼女の腕を片手で握りつつ、ベッドに寝転がつた。

「……ホントに、驚いたよ」

力の抜けたような声でつぶやく幹士に、ミキは握られていない方の手で髪を掬い、「心配かけて、『めんなさい』と、一言。

「ミキさん、心臓が悪いのか？」

顔を傾かせて、彼女の顔を斜めに見ながら言つ。

「はい、悪かつたんです」

ミキは手を髪に絡ませたまま、それを自分の胸に当てる。すると、

引っ張られた髪は指の隙間から零れ落ち、腕の中で揺れた。

「どうして、俺に黙つてたんだ？」

険しい視線をミキへ向けると、彼女は視線を逸らして、唇を結んだ。

「言いたくなかったんです。ただそれだけ。別に良いでしょ、兄さん」

彼女の腕を握っていた手に、彼女の細い指が滑り込んできて、懇願するようにぎゅっと握り返される。

幹士は、叱りたい気持ちを押さええるかのように、静かに息を吐いて目を瞑つた。

「薬なんて、なかつたぞ。みんな埃にまみれて、飲めそうなものなんてありやしなかった」

「そうですか」

ミキは、どうでも良いように小さく答えた。

「薬、持つてるのか？」

間髪入れずに、「持つてます」と無機質な声で返すミキ。幹士は

眉を寄せて目を開き、

「なら、何で別棟なんかに取りに行かせたんだ?」

「気が動転していたんです。『めんなさい』」

ミキは、例の大人びた暗い顔をまた浮べて脇を見る。

幹士は、ふう、と溜息を吐いた後、仕方ないとばかりに苦笑して、起き上がり、

「寝ていなさい」

と、彼女の肩に手を当て、背中を横たえさせた。すると、ミキは突然腕を掴んで、引っ張ってきた。

「幹士兄さんのカレー、食べたいわ」

小首を傾かせて、じっとねだるような視線を幹士に注ぐミキ。幹士は、肩をすくめて、「良いけど、発作の後にそんなもの食べて平気なのか?」と訊く。

「良いの。平氣です平氣です」

幹士の着るウインドブレイカーの袖をぶるぶると左右へ引っ張つて、ミキは声を上げる。

「わかった。今、あつためて持つてくるから」

幹士は、彼女のおでこに手を載せて擦つて笑い、ベッドから降りると、部屋を出た。

どうも訳がわからない。どうして黙つていたのか、叔父さんも、ミキさんも。話したくないって……一体何故?

幹士は、頭を手で押さえて髪をくしゃりと掴んで考えながら、春芳の部屋をノックする。返事がない。開いてみると、真っ暗。

「どこ居るんだ、あいつ」

途端に陥しく眉を寄せて、基喜の部屋のドアもノックしてみる。

「基喜! 居るのか?」

返事を待たずに握ったノブを押す。電気は点いていなかつた。

幹士は、荒っぽくドアを閉めると、廊下を駆け出した。おかしい。

みんなして、どこ行つたんだ?

女子の部屋も同じように回つたが、誰も居なかつた。

「春芳！ 幸美！」

階段を駆け下りて、広間をのぞき、厨房をのぞき、食堂ものぞく。いない。

「風呂か？ みんなして」  
広間の横の廊下を真つ直ぐ走つて、そして曲がり角を左に折れる。青い簾と赤い簾。迷わず、青い簾へ。

「おい！」

段差の前で靴を脱ぎ捨てる。脱衣場へ駆け入る。真つ暗だつた。幹士は舌打ちして、靴を履かないまま、廊下に出ると、そのまま反対側の簾の下へ潜る。この際、殴られる覚悟を持つて行くしかない。

「幸美！」

その叫びは、空しく暗い部屋に木霊した。

「ここにも、いないのか」

「一体、どこに行つたんだよ、あいつら。

青い簾の中に戻つて靴を履くと、そのまま歩き出す。

ホールへ戻つてみると、幹士はあれ？ とつぶやいて、立ち止まる。違和感を感じた。

ホールの雰囲気が、どこか明るくなつたような気がする。根拠はないけれど、絶対に何かが違う。幹士は、口を小さく開けたまま、ホールの天井を見上げた。

「何で

目が見開かれると同時に、驚きの声が上がる。天井の、シャンデリア あの、鋸びていたはずの金縁が、輝かくまでに光沢を放つていて。黒く霞んでいたクリスタルの表面は雪のように真つ白で。「どういう事だ？」

幹士は、顔を上へ向けたまま、後ずさる。そして、隣の広間を見遣つて、思わず声を上げて驚いた。

ソファーや、テーブル、そして、その下に敷かれている絨毯までもが、変わっていた。全てが新しくなっている。どういう事だ。

「いわゆる、ドッキリって奴だな」

幹士は、ははん、と脣を笑わせてつぶやき、背後へ振り向き厨房を見遣る。

その厨房に明りが点いていた。

「やつと戻ってきたか。幸美達か？」

厨房の机に寄せられた椅子が、今しがた誰かが腰を下ろしていたように、机から引かれていた。そして、背後を見れば、コンロにはいつの間にか鍋がことこと煮えて蓋が揺れている。

誰かが温めてくれたのか、と近づいて蓋を開ける。そして、目を瞠つた。

中に煮えていたのは、赤いスープに浸されたばらのかたまりの牛肉、セロリに、たまねぎ……これは、ボルシチか？

「にしては、臭いを全く感じないんだけどな」

顔を近づけてみるけれど、臭いがない。鼻を吸つてからもう一度嗅ぐ。やっぱりない。

「誰だ、こんなの作れる奴は？」

幸美のレシピにボルシチはなかつたはず。それとも、また新しく加わったのか。

蓋を閉めて、厨房を出ると、幹士は階段を駆け上がる。その時、急に頭に痛みが走り、足が段を踏み外した。

また来た。

咄嗟に手を伸ばして手すりを掴む。滑つた両足が段の上をずれ落ち、幹士は階段にうつ伏せに倒れた。手すりを握つて体を支え、もう片方の手で段の突起を握る。

「何だ、この痛さ」

「冗談じゃなく、やばい。痛みは昨夜の何倍にも増して、目を開けていられない。

幹士の手が手すりを離れ、横たわった体は下へ滑つていき、階段の下の床に足先がついて停止した。

あ、あ 小刻みに零れる幹士のあえぎ声。震える指先が、何か

を掴もうと、段の上を動く。

田を開くと、視界が歪んでいた。ぐにゃぐにゃに、階段が折れ曲がり、その先の廊下が折れ曲がり、そして自分の腕も。

「俺は……」

本気で、これはやばいか。このまま、死んでしまうことも、もしかしたら。自分の死をどこか客観的に考えながら、幹士は、滅多刺しにされた頭をぐらぐらと左右に揺らせて、動かなくなつた。けれど、その時。

「お嬢様の容態はいかがですか？」

高い女性の声が、背後から聞こえた。自分に向けられたものなのが、それとも。

「さつき寝付きました。五木先生も、もう大丈夫だとおっしゃつていました」

突然、頭上から声が上がった。

「良かつた」

背後の女性の安心したような声。

「さて、一段落ついたことだし、私達も食事とさせてもらいましょう」

「ヒヒヒ、と靴底が階段を叩く音が、徐々にこちらに近づいてくる。

「え、でも……」

「少し休まないと。昨日からぶつ続けで動いてたんでしょう？ ほらほら、行くわよ」

歪んでいる視界の端に、白い靴が横切るのが見えた。何だよこれ、夢か？

かもしれないな、と幹士は唇を笑わせる。だって、現実の人間なら、どうしてこの倒れた人間を助けてくれない？ ほつておくなんて、あまりにひどすぎる。

「こうなると思って、ボルシチを抱えておいたのよ。ほら、良い匂いがするでしょう？」

「あら、本当に良い匂い」

くすくすくす、と笑い合つ女性達の声。

その時、突然曲がりくねつていたはずの階段の段が、徐々に引き伸ばされて平らになり、そして元に戻つた。

頭の痛みもいぐらか引き、手に再び力が入つて、幹士は呻きながら立ち上がる。

「誰だよ、今のは

あらかた幽靈つてどこか。だつて、既に何回も田撃していふことだし。

階段の手すりに掴まって、しばらくじつとして、弾む息を落ち着かせる。そして、幹士は冗談じやない、と頭を押さえつづ、厨房へ振り向く。やはり、そこには誰もいなかつた。けれど。

「ふざけるな」

幹士は唇を震わせて、目を見開いてそれを見た。厨房の机には、白い陶器の皿が一枚。そして、その中には、先ほどボルシチが湯気を立てていていた。銀色のスプーンが、一本。

「あいつら

幹士は、周囲を見回して、彼女達の姿を探す。

「どこに行つたんだ?」

俗に言う不法侵入か。汗拭いつつ、幹士はふらつく足で厨房へと近づき始める。けれど、内心、もうわかつていて。これは、もうファンタジーの世界だ。全く狂つた世界。

「頭、いかれちまつたのか、俺」

瞼を閉じて頭を押さえつつ、首を振る。そして、目を開けば。ほら、やつぱり、机の上から、ボルシチの姿は消えている。

いかれたな、こりや。幹士はつぶやいて、先ほどミキが吐いたカレーが床に広がっているのを見て、厨房から布巾を取つてきて、拭いた。そして、投げ出された椅子を元に戻す。

鍋の蓋を取れば、当然そこにはカレーが熱気を上げており、幹士は小皿を取つてカレーを移すと、お盆に載せて、厨房を出て。そし

て、階段を上がった。

「ミキさん。お待たせ」

ノブを握つて開く。

もし、そこに誰もいなかつたら そつ細つと、思わず瞼を閉じてしまつ。けれど。

『幹士兄さん、遅すぎ』

ふて腐れたような声が聞こえて、ゆづくつと田を開く。

両手をこちらへ伸ばしたミキが、早く早くとばばかりに掛け布団の下の足をばたつかせている。

「いめんな。遅くなつちまつて」

幹士は、ベッドに近寄るとしゃがみ、お盆を絨毯の上に下ろして、皿とスプーンを手に取る。「しつかり持てよ」とそれをミキの手に渡す。頷いたミキは、スプーンを構えたが否や、皿にそれを突っ込んで、豪快にぱくぱくと口の中に放り込み始めた。

「おい。そんなに急いで食べたら……」

案の定、ミキの白いワンピースの胸元に、カレーが零れ落ちて、染みが広がっていく。幹士は、手に持つて渡そうとしていたナフキンを下ろし、「あーあ……せつかくの綺麗な服が台無し」と、彼女の胸に濡れた布巾を近づける。

服の生地を引っ張つて、静かにじるじると拭く幹士の顔を、ミキは間近でじつと見つめる。ぼうつと、夢の中を彷徨うような瞳。

「幹士兄さんが、痴漢した」

ぽつりとつぶやいたミキの言葉。幹士は、えつ? と訝のわからぬといつた様子で彼女を見る。

「はい」

無言で目を手渡すミキ。無言でそれを受け取る幹士。

「自分で拭くわ」

胸に当たられた布巾を引っ張つて、ミキは自ら拭き始める。せじでようやく、幹士は自分の手がまざい場所に置かれてこることに気が付いた。

「「」めん、ミキさん」

苦笑して手を離す幹士に、ふて腐れたよつて、「幸美さんにてつてやろうつと」と、痛いことを言つて。

「それ、言わないで、頼むから」

幹士の皿が、少し真剣な色を浮べる。

「あいつ、冗談通じないんだよ。本氣で怒るんだ、そういうの」と言つと

ナフキンを彼女の膝に添えながら、懇願するように四つ。

「きつと幹士兄さん、幸美さんの事を構つてあげてないんでしょ。魅力ないのかしらつて悩んでるよ、幸美さん」

子供の癖にませたことを。幹士は、拳骨を彼女の頭に乗せる。「私だつて、十五歳。もつそのくらいのこと知つてゐるわ」にしては、子供っぽいことを繰り返すよね

笑つて頭を撫でてやる。

「つるさいわ！」

ミキは、顔を真つ赤にして、その手を払い除ける。

「……染み、取れないな」

幹士は彼女の胸元に残る茶色い染みをのぞいて、零す。

「幸美の服、借りてこようか」

そうつぶやいてから、幹士ははつと氣付いて眉を下げ、静かに黙りこぐみ。

「幸美さんの服、大きいんだもの」

そう首を振つて、ミキはナフキンを胸の上に付け終ると、幹士の手から再びカレーの皿を受け取り、例の「」とく搔きこみ始める。

「幸美も、鈴木も、先生も」

濡れた布巾を彼女の口元に当てながらつぶやく。

「春芳も、加賀も」

ミキが、ぴたりとスプーンの動きを止める、

「みんな、幻だつたのかな」

幹士は俯いて、くせの激しい髪の毛の先を垂れた。ミキは、口元

に皿を寄せたまま、皿だけを幹土へ向け、

「違うわ」

と、一言、つぶやいた。

「俺が自分自身で作り出した、ただの幻。そつなんだろ? ミキさん」

幹土から視線を外し、無表情な顔をまっすぐ前へ向けるミキ。

「俺の現実は、きっと、ミキさんだけなんだよ」

静かにミキの両膝へ顔を載せて、ぼんやりとつぶやく。

ミキは皿を口から放して、違つて言つてゐるじゃない、とかレー色に染まつた唇を動かせる。

「全ては、自分の孤独を紛らわせる為に作り出した幻」

「馬鹿幹土」

突然、片膝が突き上がって、載せた頭を蹴り飛ばされ、幹土は声を上げて床に倒れ伏した。頭を押さえて唸る。

「馬鹿馬鹿幹土。馬鹿幹土。馬鹿馬鹿アホアホ幹土!」

ミキは、握っていたスプーンを幹土へ投げつけた。カレーが飛び散つて、幹土の頭にかかる。

「幹土兄さんは、そんなに馬鹿だつたなんて。もう、あなたはただの馬鹿幹土。ただのアホ人間」

今度は皿を振りかざすミキに、幹土は顔を蒼白にさせて立ち上がり、「待つて。落ち着け」とつぶやきながら部屋の隅へと移動する。「そんなこと言つ馬鹿幹土なんて、知らない。見損なつたわ」

ミキは、いつの間にか空っぽになつてゐる皿を、ベッドの横のお盆へと下ろすと、付けたナフキンを取つてぐしゃぐしゃに丸めて、投げ捨てる。そして、そのまま掛け布団を被つて、壁の方へ向いてしまつた。

幹土は、それを見遣つてから、部屋の隅の壁に背中を寄りかからせて、足を伸ばして座り込んだ。そして、頭を壁に付けて、上を見る。

「頭で考へてもわからないのに、何となくで感じて、わかつてしま

う」とつて怖いよな」

そして、気付かなければ良かったと、後悔するんだよな。

「幸美達は、どこの行つたんだろうな、全く。かくれんぼでもして  
るのかな」

そんなつぶやきに、ミキは答えを返すはずもなく。ただ、すすり  
泣く声だけが、小さく聞こえた。

幹士は顔を下げて、静かに目を瞑る。ゆっくりとした息遣いが、  
ワインドブレーカーの襟の中で何度も繰り返され。そして、幹士は  
決心したように瞳を開いた。立ち上がる。

「ミキさん、ほら。起きてくれよ」

幹士は、彼女の被つた掛け布団を剥いだ。ミキはぐずつた  
ような声で唸りながら、それを懸命に離すまいとする。

「えい」

一気に引っ張ると、ミキは掛け布団と共に体をこちらへ向けた。

「ミキさん。一緒に下へ行つて、お茶でも飲もう」

彼女の赤くなつた目に手を近づけると、静かに瞼は伏せられ、そ  
の上をすつと横へ撫でてやる。濡れた指先を離し、それをそのまま  
彼女の小さな腕へと当てて立ち上がらせる。

「何か、見知らぬ人間が徘徊してて、気持ち悪いけど、気にしない  
でね」

幹士はそう言つて、彼女が靴を履いたのを確認してから、腕を掴  
んだまま、歩き出す。

「幹士兄さんにとっては見知らぬ人間。私にとっては、家族」

「そつか。なら、挨拶しとけばよかつたな」

そう言つてから、幹士は、「いや、無理か」と苦笑して首を振る。  
挨拶する前に、向こうが消えてしまつては、仕方がない。

「幹士兄さん」

階段を下りると、先ほどのよつてミキが背を向けて立ち止まる。

幹士は足を止めて、「何?」と微笑む。

「もし、この屋敷に、幹士兄さんと私は、一人つきりでずっと暮らせ

たら、幹士兄さんは嬉しい？」え？ 幹士は、彼女の長い髪が垂れ下がった白い背中を、啞然と見る。けれど、静かに目を瞑つて微笑むと、

「嬉しいな」

とつぶやく。そして、皿を開き、けど、と付け加える。

「幸美を悲しませるのも、嫌だな。あいつ、俺にぞつこんだからさ」そう言って軽快に笑う幹士。すると、ミキは無言でじっと佇み、けれど突然ろへ振り返ると、

「自惚れ幹士」

と、背中で手を組んで、体をこぢらへ乗り出して言った。彼女の白いワンピースの裾が左右へ揺れる。長い髪も。

幹士は広間で、テーブルにミキと向かい合わせに腰を下ろす。ティーセットのプレートの上の、ポットを手に取つて、カップへ傾け、熱い湯気を注ぎ口から立ち上げる。それから、座っているミキの前に、カップを一つ、そして、自分の前にもう一つ並べると、静かにチョコレートケーキの載つた皿を渡した。

「良いんですか、本当に？」

ミキは皿を受け取りつつ、白い顔の赤い唇を動かせる。

「本当は、夕食の後、皆で食後のティータイムする時に出そうと思つていたんだけどね。予定変更。……ミキさん、俺の分、半分あげるよ」

幹士は、自分の皿を手元に引き寄せ、ケーキをフォークで半分に割つた。

「頂きます」

ミキは、静かに目を伏せてそう言つと、カップを手にして、ゆつくりと口に付けた。彼女の白い顔が、白い煙を纏つて、肌が一層、人形のように真っ白に、綺麗に見える。

「いただきます」と

幹士は、カップを手に取ると、軽く啜つた。

「幹士兄さん、音は立てないでよ。」

ミキが、眉をひそめつつ、顔をカップから上げる。

悪い悪い。幹士はそう言つて、カップを下ろすと、半分になつた

チョコレートケーキをさらに割つて、口に運んだ。

結構いけるな。箱入りの、スーパーで売つてる安い奴だけ

「幹士兄さん、食べながら口を開けないで」

「悪い悪い」

ミキは、カップをソーサへ下ろすと、ようやくフォークを手に取つて、ケーキの皿を引き寄せた。その大きな瞳が見開かれて輝く。

「頂きます」

ぶすっとフォークを一刺し。そして。

幹士は、目を丸くして、彼女の拳動を目で追つた。フォークに突き刺したケーキを丸」と口に放り込み、例の如く、あのひょうたん顔をこちらへ見せ付ける。

「おいしいわ」

変な音を交えながら、ミキは横に引き伸ばされた唇を動かしてつぶやく。

幹士は、「ミキさん、汚いぞ」と、眉をしかめて、食べる氣も失せて、フォークを置く。

彼女はしばらくもぐもぐ顎を動かせて、喉がぐくつと鳴ると共に、彼女の頬は元に戻つた。

「幹士兄さんの、もらつわ」

すぐにフォークを差し向けてくるミキに、片手で皿を押しやる。

「全部食べて良いよ。俺、お茶だけで良いや」

幹士はミキの口元についたケーキのかすを手に取つて、ティーセットのプレートの端になすり付ける。

「え？ 良いんですか？」

まん丸の目をさらに丸く、彼女は幹士のケーキの皿を見下ろした。そして、フォークによつて切り取られたケーキの断面部を見て、頬を赤く染める。

「半分は手つけちゃつたから、汚いなら残しちゃつて」

幹士は紅茶を啜りつつ、ミキへ視線を向けずにそつと囁く。

「じゃあ……もらいます」

ミキは、おつかなびっくり幹士の皿を手に取ると、それを引き寄せて、見下ろす。頬を朱に染めて、一口サイズにケーキを切って、震える唇へと運び。ぱくりと思い切つてかぶりついた。

紅茶から上がる煙は、その頬の色を、白く隠すことはできなかつた。赤すぎたから。

「ミキお嬢様」

突然、横から若い女性の声がして、幹士は、危うくお茶を口から零しかけ、慌ててカップを下ろす。

「あら、サエコ」

ミキは皿へフォークを置くと、横に佇む使用人へと顔を上げた。「寝付けないのでしたら、何かお夜食でもお作りしましょうか?」「結構よ。それよりサエコ。こちらは、私の恋人の、幹士さんよ」は? と、幹士は間抜けた声で、ミキを見遣る。ミキは、自慢げに唇をにじり笑わせて、腕を組む。

「ミキ様とお付き合いなされているお方でしたか」

使用人は驚いたように皿を丸くして、こちらを見てくる。しかし、すぐに顔を引き締めて。

「……私、サエコと言います。ミキ様のお世話役として、このお皿敷で働かせてもらつております」

いや、あの。幹士は手を伸ばして、使用人に弁解しようとする。使用人は、ショートの黒髪を垂れて、お辞儀をすると、「今すぐお茶をお運びいたします」と、その場を去る。つとめる。「結構よ、サエコ」

ミキのその声に、使用人は、「しかし……」と困ったようにつぶやいて振り返る。

「良いのよ。喉は乾いていないし。……幹士さん。やうでしょ?」意味ありげな視線をこちらへ投げかけてくるミキに、

「……あ、ああ」

幹士は数回頷いて、使用人へちらりと視線を向ける。そして、カップに注がれた紅茶を見下ろして、握っていた柄を、音を立てないように静かに離した。

使用者は、無言でミキの顔を見た後に、困ったような視線をこちらに投げかけた。苦笑を返すと、彼女は再びミキを見て、「承知いたしました。……何もお出しできませんが、『じゅつくり』礼をして、彼女は背を向けた。幹士は、足音が遠ざかるのを聞きながら、安心したようにカップへ手を伸ばし、一口飲む。そして、顔を上げた時には、もう使用者の姿はどこにもなかつた。

「彼女、とても真面目で、器量も良くて、助かるわ。けど、ちょっと冗談が通じなくて困るの」

ミキは首を振つてそう言いながら、ケーキの上に乗つたチョコレートの玉を指で摘んで口に放り込む。

「あれ、本当に冗談で言つたつもりだったのか？ 恋人つて幹士が眉をしかめて訊くと、ミキは上機嫌に鼻歌を歌いながら、もう一玉。

幹士は、そんな彼女の様子を見ながら、ふと思いつ出す。

「……サエコさん、結婚式挙げたのか？」

突然訊いた幹士に、ミキは、え？ とばかりに顔を上げて幹士を見る。

「いや、もう結婚してるのかなあって……」

幹士は、脇へ視線を逃がしながら、紅茶を啜る。そして、ちらりと横目を向けて、ミキの顔が無表情になるのを見て、やつぱり別れたのか、と気付く。

「別れたらしいわ

案の定、ミキの無機質な声が返つてくる。そつなんだ、と幹士は頷きながら答えた。

「そんなことより、幹士兄さん」

その声に、「ん？」と、顔を上げると。

「はい、あーん」

ミキが、何の漫画で読んだのか、お決まりのポーズで、ケーキを刺したフォークを近づけてくる。幹士は苦笑して、「あーん」と、調子はずれな声を上げて口を開く。

「と言いつつ」

差し向けてきたフォークを、ミキは突然自分の口元へと戻し、かぶりつく。

幹士はそれを見て息を吐いた後、膝の上で頬杖をついてカップを口に傾け、「お決まりのネタだな」と、肩をすくめる。

「つまんない、兄さんの反応」

ミキはぶすっとした顔で、もぐもぐしながら、紅茶をもう一口、口に含んで、カップの底を尽かせ、ソーサに下ろした。

「飲むか?」

ポットを手に取ろうとする幹士を手で静止し、ミキは「いいの」と微笑んで、立ち上がる。

すると、幹士はカップを煽つて、一気に飲み干して、それをティーセットのプレートに置き、ケーキの皿も一緒に載せる。

一人分のティーセットを載せたプレートを持つて、立ち上がると、ミキを隣に従えて歩き出す。

「おいしかったな」

彼女を見下ろして微笑むと、ミキは背中で手を組んで、笑顔を見上げさせて。うん、と一つ頷いた。

その彼女の笑みを見て、その大きな瞳が細められるのを見て、微笑んだ直後に、視界が傾いた。

ホールに響き渡る 陶器の割れる音、砕け散る音、そして水が広がる音が。

床の上で伸びた自分の腕が、熱い湯に浸されるのを感じる。けれど、その泉から手を離すこともできず、痛みを感じることもできず、ただ視界が前みたいに歪んで、頭が弾けているのだけを感じる。これは、死ぬな。たぶん。

「ミキさん」

脣だけが動いてくれた。

「幹士兄さん…」

ミキが膝をつき、床に広がった紅茶から腕を引き離してくれた。垂れたワンピースの裾が、オレンジ色の液体を吸つて、じわじわと濡れていぐ。もつたいたない。

「いやよー」

ミキは長い髪を胸に垂れ下げてきて、ひざく腫んだ顔を近づけてくる。

「いやつたら、いやなのー」

胸板にこれでもかと、両の拳を叩きつけられる。唇が思わず微笑む。

「ミキさんと一緒にいられるなんなら、別に良いよ」

指先をかすかに動かして、彼女の髪を握る。艶やかで柔らかい、

彼女の髪。

「似ていろよ、ミキさんは」

ミキは、胸に胸を重ねて、上体に覆い被さつてきた。泣き声を上げて。

「母さんの田、ミキさんみたいにおつきくて」

色白で。美人で。明るくて。けど。

「心は、すぐに壊れてしまいそうに纖細だった」

ミキさんも、ね。幹士は静かにしつづぶやいて、息を零す。小さく笑つて。

「私の所為で、幹士兄さんが」

ばん、と自分の頭を、胸板に叩きつけて自分を責めよつとするミキ。痛いんですけど。

「別に良いさ。これも、運命だつたつて事で」

そうつぶやいて、田を閉じ、覚悟を決めよつと思考を巡らせた時、急に頭痛が弱まつた。幹士は、気まぐれだな、と笑つて、力の蘇つた体を起こして、ミキの伏せられた頭を膝の上に抱える。

「寿命はまだみたいだ」

「そう軽快に笑うと、でも、もつすぐ来るわ、ミキはすぐもつた

震えた声を上げる。

「それまでは、ゆっくりしてこるわ」

立ち上がる。彼女もすぐに立ち上がる。精一杯その小さな体を寄せ、この身を支えようとする。

「ありがとう」

静かにそつづぶやくと、ふらつく足を一步、一步踏み出して。階段を上つて、廊下を歩いて。そして、部屋に入つて。

「ベッドに横になつて、と」

幹土は、ミキに支えられながら静かに横たわると、ふつ、と深く息を吐いた。

「ミキさん、その鞄、開いて」

ベッドの横の鞄を指差す。

「これですか？」

そつ、とつぶやく。ミキは鞄を開くと、顔を上げて、次の指示を促すように大きな瞳で見つめてくる。幹土は笑つて、「その中に、ポーチがあるだろ？」と、顎を前へ動かした。

「これ？」

掴んで掲げるミキに頷き、彼女が持つてみるとそれを受け取つて、開く。

「ミキさん、オルゴール好きだよね？」

「え？」

「これ、全部あげるから」

ポーチの中のたくさん小さなオルゴールを示す。ミキは、目を大きく開き、良いの？ とつぶやいた。

「あげる。……あ、でもやっぱり、これだけは残しておく

一つ引き抜いて、幹土は天井へ向けて、それを掲げた。ペールギコントの、「朝」。これを勝手にあげたら、怒るだろ？から。幸美は。

「ありがとう」

ミキは、オルゴールを一つずつ摘み取つては、幹土の胸の上に並べていく。幹土はおいおい、と苦笑しながら、自分の胸に並んだオルゴール群を、顔を起き上がらせて見る。

「まずは、これから」

幹土のへその上にあつた一つを、手に取つてぜんまいを巻く。そして、彼女は耳に近づけた。

「カノン」

ぱつりと、高い声でそうつぶやく彼女。

「ミキさんのお母さん、どんな人だつたんだ?」

カノンの旋律と共に。幹土は静かに振り向いて訊く。

「意地つ張りで、わがままで、明るい人だつたわ」

「そうなんだ。

「けど、お父様は、その逆。優しくて、落ち着いていて、静かな人。少し、お調子ものだつたけれど」

カノンの旋律を、オルゴールと声を揃えて口ずさみながら、ミキは言う。

「俺の母さんはね、自殺したんだ、実は」

ミキが、鼻歌を止める。

「皆、病氣で死んだと思ってるけど。あれは、自殺。俺、見たんだ」

ミキが、こちらへ顔を向けてじつと見る。

「母さんが、私の所為、私の所為、つてずつと声を上げて泣いていふところを。見たんだよ。……何度も何度も自分の胸を叩いて、壊れろ、と繰り返していたんだ」

壊れる? ミキが、驚いて啞然とした顔でつぶやく。

「壊れろつて、あれはたぶん、自分が死ねばいいって、そういうことだよ。母さん、ずっと願つてたんだ。自分が死ぬ事を」

その通りになつたんだけどね。幹土は、そう力なく笑つて、天井を見つめる。

「だから、自殺なの?」

ミキはオルゴールのぜんまいを握つて、音を止め、手の平に載せた。

「だつて、健康つて、結構心に左右されるだろ？ 死にたい死にた  
いつて思つてれば、体壊して、本当に死ねるだらうさ」

幹士は、ふ、と口から息を零して、引きついた笑みを浮べる。

「確かに、母さんの所為だつたかもな。ミキさんの両親が死んだの  
は」

ぱつりとつぶやいた幹士の声に、彼女は目を見開いた。え、と小  
さく言葉が漏れる。

「ミキさんの両親が、仕事の関係でわざわざ遠方の都合まで足を運  
んだ時にさ、母さん、偶然その近くまで旅行に来てて。それで、頼  
んだんだよ、一度顔見せてつて」

ミキは、固まつたまま、瞬き一つせずに目を見開いている。

「だからさ、わざわざ叔父さんと叔母さんは、電話の向こうで駄々  
をこねる子供に、会つてやううと、駅前でお土産買って、仕事の合  
間に時間見つけて新幹線に乗つて」

ミキは、両耳を押さえつけて、目をかつと見開いた。彼女の肩か  
ら垂れた髪が、宙で小刻みに揺れる。

「そして、待ち合わせの駅で下りて。母さんが立つているバスター  
ミナルへと早足で向かつて……」

叔母さんは、遠くに見える自分に瓜二つのその顔を見て、たまら  
なくなつて駆け出して。道路を横切つて。危うく轢かれそうになつ  
た。

「そして、幹士兄さんの母さんは見ていられなくなつて道路に飛び  
込んだのね」

ミキが、ゆつくりと耳を覆つていた手をすり下げて、つぶやく。

「飛び込んだ母さんは、捻挫した叔母さんを支えて、バスター・ミナ  
ルへ戻つて。そして、叔父さんが駆けつけてくるのを見遣つた。そ  
の時、轢かれちゃつたんだ」

轢かれちゃつたんだ。幹士はもう一度繰り返し、まるでその光景

を見ているかのように田を天井へ向けて、自分の頭を両手で掴んで震えた。

「きっと、母さん、ものすごく驚いて、啞然として、息が止まって……。それでたぶん、すぐに、死のうつて決意したんだよ。けど、その直後に、もう一人死んじゃつてね。大切な人が」

目の前で、亡骸を抱きしめるもう一人の自分が、頭上を見上げた。そして、見開いた目に、太陽の眩い日差しが刺さり、彼女はそのまま白な視界の中で、舌を強く噛んで。切れるほどに強く噛んで打ち震えて。そして、結局、それは命と共に断たれてしまった。

「母さん、もう頭の中、空っぽになんたんだろうな。病院に運ばれるまで、瞬き一つしてなかつたらしいから」

幹士は、ベッドから身を起こす。胸に載っていたオルゴール達が、ばらばらと左右へ零れ落ちていく。

「ミキさんは、本当に似ているよ

手を伸ばして、彼女の顔を掴み、こちらへ向かせて寄せる。

「ごめんな。母さんに代わって謝る」

ぱたぱたと、ミキの顔に、鼻筋に 透明の雲が落ちて、唇の中へと伝づ。しょっぱい味が彼女の中で広がった。

「ううん。謝らなくて良いの」

ミキは静かに幹士の頬に手を当てて、無表情で見た。

「私、その後すぐにお母様達の後を追つて死んだから。この屋敷で」幹士は、声を漏らして、歯を食い縛った。俯いたその顔を、ミキは見下ろして微笑む。

「母さん達、何で帰つて来ないのかしらつてずっとと思つてたわ。私が病気で寝込んでるのに、一人してずっと出かけてて。寂しかったの」

ミキはすっと頬から手を離すと、ベッドから降りて、机に近づいた。そして、腰を折つて、二段田の引き出しを開けて、その木箱を手に取る。

ぐるんと一回転して、腕に収まつたそのオルゴールをこちらへ向

けて、顔を傾いで微笑む。

「それ……ミキさんなのだろう？」

ベッドの隅に腰を下ろすミキに、幹士は涙を拭いながら言つ。そういうよ、と彼女はオルゴールを開く。

「ごめんな。その鍵、壊しちゃつたんだ。俺が落とした」

幹士は、鼻水を吸いながら、じつと彼女へ赤い目を向ける。いいんです、と彼女は微笑みを浮べたまま、蓋を倒した。

「綺麗な音色だな」

流れ出した旋律を聴いて、幹士は顔をこつこつとさせめる。けれど、

それが突然歪み、幹士は歯を食い縛つて頭に手を当てた。

「これ、お父様とお母様が、外出先で買つて、誕生日に送つてくれたんです」

箱の中で、針を点々と纏つた円柱が、くるくると回転し、振動板を叩いて音を奏でる。それをミキは顔を近づけて、楽しそうに眺めている。

「そ、うなんだ。大事なものなんだな」

震えた声を喉から絞り上げて、幹士は前髪をくしゃりと握り潰し、頭の痛みを必死に堪えた。しかし、幹士は口を開いて続ける。

「ミキさん、この屋敷で生まれてから、一度も外出したことないんだろ？寂しいよな、それって」

何にも変わり栄えのない毎日が淡々と、そして穏やか過ぎる時間が、時に体を締め付ける荒々しいものとなつて流れすぎていき。いつしか彼女は外界への興味を失つて、心に築いてきた明るさを捨て、空虚な目で空を眺め出した。

病気な彼女は、いつもベッドの中に。調子が良くなつて外へ出ても、その世界は垣根の中の範囲内にしかない。それは、寂しいことだ。

「俺、ミキさんとこれからずっと一緒に居るよ。やつすれば、退屈しないだろ、ミキさんは」

涙が零れた頬を懸命に緩ませて、ミキへ言つ。ミキは、オルゴール

ルを握り締めて、首を振った。

「良いの。もう、いっぱい楽しんだから。これで、もう十分」  
ミキは靴を脱いで、両足をベッドの上で伸ばした。幹士と向かい合つ。

「このオルゴールに、私、死ぬ前にお願いごとをしたの」

「どんな事、願つたの？」

「まず、変な人達が来ますようにつけて」

「それ、皆が聞いたら怒るぞ。 それから、優しいお兄さんが私にできますようにつて。体が元気になりますようにつて。」  
彼女の肩が震えていき、声はか細くなつていぐ。

「苦しくなつた時、誰かが側に居てくれますようにつて。恋人ができますようにつて。その人とずっと仲良く暮らせますようにつて」

ミキは、顔を俯け、涙が、箱の中へ零れ落ちて、金色の円柱へ垂れて光る。オルゴールは止まない。

「すべて叶つたよ。……ただし、幹士兄さんを巻き込んで」

ミキは、オルゴールを膝から横へ拝つた。ベッドの上で傾く木箱。「幹士兄さんは、今、夢を見るの。私が見えるつてことは、それは夢なのよ。見えるものは全部、夢」

夢。幹士は震える顎をミキへと向けてつぶやく。

「ある日。ある女の子が、うたた寝をしていた一人の男の人の、頭の上に、薄いシーツを被せて悪戯しました」

ミキが、顔を俯かせて、ぽつりと掠れた声を出す。

「そのうち、そのシーツの上にも、風呂敷やナフキン、ハンカチまで、何でもかぶせていつたのです。その人は、頭が重くなる夢を見ました。夢の中の彼は、息苦しくなつて喉を押さえました」

色々なものをかぶせて、かぶせて。しまいには、本当に息が出来なくなつていきました。彼の口は、シーツの中で苦しそうに歪んでいたかと言いますと、そうではありません。笑っていました。

彼は、頭に色んな物がかぶさつていて、まだ眠つていたのです。彼は、綺麗な女の子と友達になる夢を見ていて、だらし

なく口元を垂らしていました。しかし、彼は、目を覚ました。何も見えずに真っ暗で、頭の上の物を取りついで、うまくいきました。

せん。

助けを呼びました。すると、側で、小さな女の子が声を上げます。「「じめんなさい。悪戯が過ぎました。さっそく取つて助けてあげます」

彼女は一枚一枚、急いで剥がしていきました。側に、色とりどりの布が積み重なつて、山になつてきます。

「彼は、ようやく全ての被りものを取つて、晴れ晴れとした顔で、大きく息を吸つて、目の前の女の子に言いました。もう、こんな事したらいけないよ。女の子は、涙ぐみました。けれど、ふんだ、と言つぶやくと、また元のように飄々とした顔で、彼の側を去つていったのです。彼は、安心して再び目を瞑りました。また、夢を見て、あの綺麗な女の子に会いに行こうと思つたのです。けれど、もうその夢は、その綺麗な女の子は、彼の前に現れる事はありませんでした。彼は、悔しがりました。こんなことなら、夢をあのままずっと見ていたかったのに。けれど、そんなことは絶対に叶いません。彼がその綺麗な女の子と仲良しになつて、恋人になる頃には、彼は天国への階段を全て上り切つてしまつからです。彼は来る日も来る日も、あのシーツを頭にかぶせましたが、どうとつ女の子に会うことはできませんでした」

静かに声を下げる、語り終えたミキは、すぐに顔を上げて、幹士を見た。

「それ。ミキさんが作つたの？」

息を荒げて、頭をベッドに横たえた幹士が、引きつった笑いを浮べる。

「即席で作った話です」

ミキは、ベッドに腰を下ろしたまま、じつと身動きせずに、つぶやく。

「そつか。つまり、俺、夢ばっかり見て起きないから、このまま死

んでしまつと。やつここと?」

ミキは、答えない。ただ、じつと、無表情な顔を向けてくるだけ。「それでも良いよ。だって、俺、妹と一緒にいて死ねるんなら、別に構わないよ。可愛くて仕方ないんだ。君をほつたらかしにして、田を覚ますことなんてできないよ」

片手を頭に当て、そしてもう片方をミキへと伸ばす。それを両手で掴んで自分の頬へと当てるミキ。

「私は、兄さんのお母さんじゃないのよ。こんなに似てるけど、兄さんのお母さんじゃない」

幹士は、息を呑んで、汗だくの顎を震わせた。

「でも、俺は。ミキさんが、孤独になるのが許せないんだ」  
あんなに輝いていた瞳。それが、こんなに空虚に 空虚に。  
唇がそんな心のつぶやきを、気付けば吐き出していた。ミキは微笑んで、

「そんな事ないです。見てください、私の田」

ゆつくりと彼女の瞳を。その中に映る自分を見た それは濡れていて、光っていて、けれど決して空虚ではなかった。むしろ、輝いていた。透明に。

「私、とても楽しかつたです。ありがとう、幹士兄さん」

掴んだ手を静かに離される。

幹士は、靴下のまま床に立ち上がったミキへ、おい、と手を伸ばそうとするが、頭が軋んで、すぐに押さえて唸る。

歪んだ視界。歪んだ部屋。歪んだ彼女の笑顔 それは涙に濡れて、とても綺麗で。その手に握られた木箱、そしてその中のオルゴール。光り輝いて、くるくると円柱が回っていて。音が紡ぎだされ。それが、突然止まり、ミキは箱の中に手を入れて、円柱を掴んでいたが、ゆつくりともう片方の手を箱から離す。そして。「こんなもの、捨てていれば良かつたのよ。サエ」

腕を振り上げると、木箱が宙を裂き、ミキの頭上へ掲げられる。

その腕を振ったミキは、泣き叫び、そしてそのオルゴールはなだ

らかな軌跡を描いて部屋の壁に激突する。

古びたオルゴールは、軋んで軋んで、蓋を割られ、金属が高く鳴り軋み、そして落下する。木箱が碎ける。

それと共に、頭を覆っていたシーツが脱げた。最後に目にする彼女の白いワンピースが、踊るように空中を流れるのを。

彼女は、最後まで微笑みを絶やさなかつた。その七歳の命が、細い細い綱をようやくつなぎ止めており、彼女はその上を軽やかに舞つて歩き、綱渡りを続けていたけれど。綱はいつしか断ち切れてしまつた。彼女は落下する。助けの手を彼女に差し向けようとも、誰一人、救う事はできなかつた。彼女は、手元にあつた一つのオルゴール、それだけを頼りに、心を繋ぎ止めて、底の知れない闇の中へと落下していったのだ。

いくつの涙が、そのオルゴールの上に流れただろう。その金縁の蓋を濡らしだらう。

落下する体が、くるくると宙で回る中、彼女は、オルゴールを開ける。そして耳にする。それを聞いている時、彼女は色々な想像を膨らましたのだ。

私の願いは　たさやかなものです。私くらいの子のほとんどは、こんな願い、ありきたりで、ひどく退屈なものに過ぎないかもしれません。けれど、私にとっては、それは嬉しそうなもので、もしそれを手にできたら、嬉しくて嬉しくて、屋敷の周りを何周もしてしまうでしょう。

彼女が死ぬ間際に書いた、一つの作文。何かの本で、小学校に通う彼女くらいの歳の子は皆、授業で作文を書かされると載つていた為、彼女はそれを真似したのだった。けれど、退屈なその作業はすぐ彼女の意識の外へ　そして、またオルゴールを手にして、うつとりして聞くのだった。

七歳の命が幕を閉じた時、綱が断ち切れてからずつと落下し続けていた彼女の心は、ようやく死という安泰な地へ降り立つことがで

きたのだ。

けれど、彼女はここに至るまでに心を削つて、その心の砂を、あのオルゴールの中へと注ぎ込んできたのだ。何度も何度も願い、繰り返し繰り返しそれをオルゴールに聞かせたミキ。彼女の想いを纏つたオルゴールは、自分に触れたその人間の心へ、溢れる願いを想いを注いだ。

物に込められた想いは、とても美しく、そして儂げで。けれど、その夢は、彼の心の隙間を潤してくれた。

ミキはとうの昔に死んでしまったけれど。彼女の想いはあのオルゴールに宿つて、そしてオルゴールと共に碎け散つたのだ。

俺は何も彼女にしてやれなかつた。残された想いが形作つた幻影へしか、俺は手を触れることも、優しくその髪を梳いてやることもできなかつたのだ。けれど。

俺はきっと、あの幻影の彼女を救つてやることができたのだと思う。彼女の目が。そう信じさせてくれた。

白いワンピースが舞つて、あの長い髪が舞つて。そして、彼女の想いも風と共に軽やかに舞つて。消えていったのだとそう信じてる。

幹士……幹士……。

弱弱しい声と共に、誰かの腕が胸を揺さぶつてくる。その細い手をすつと掴んでやると、ぴたりと動きを止めた。

静かに起き上がる。すると、幸美は顔を上げて、真っ赤になつた目を見開き、「幹士」と呆然とつぶやく。

「……今、何時？」

ぱつりと、間抜けた声で言つと、幸美は、

「馬鹿幹士！」

いきなり胸に頭突きを食らわしてきた。

「痛つて……。いきなりなんだよ、おはようぐらいい言つてくれないのか？」

「何がおはよう、よ！ 馬鹿幹士！」

幸美は頭を下げたまま、肩を震わせる。

幹士は笑つて、静かに彼女の頭を抱いて引き寄せた。そこで、男の静かな声が聞こえる。

「ようやく、目が覚めたか。……色んな意味で」

壁に背中を寄りかからせた春芳が、隈のできた目を、こちらへ向ける。窓から差す日差しが、その横顔を白く染め上げる。

「……春芳」

そう言つた時、「幹士」と戸口から声がして振り向くと、鈴木が唖然とこちらを見つめていた。

もう一度、彼女の唇が、幹士、と震えた。その途端、彼女はこちらへ駆け寄り、突然目の前に立つたかと思うと、

「ふざけんな！」

思いつきり頬を平手打ちされた。

反対の壁へ向いた顔を、幹士は呆然と戻す。

「もしかして、かなり心配させたか、俺？」

小さくそつと訊くと、鈴木のロングの髪が肩の上で小刻みに揺れた。

そして、突然彼女は幹土の首に腕を回してきた。

私は……なんでこんなことやつてるんだろうな。もう、ただの友達だつて自分に言い聞かせたはずなのに。

耳元でそうつぶやくと、静かに嗚咽し始める。幹土は驚いたように、自分の首にかけられた彼女の腕を見つめ、そして静かに微笑んだ。視線の先にいる春芳が笑つて、やれやれとばかりに首を振る。

「み、幹土……何してんだよ！ そんなうらやましい」

突然、部屋に絶叫が響き、見てみると、基喜が、女性一人を纏つた幹土を凝視して、戸口に立つていた。その背後には、うわあ、とかそんなつぶやきを零して、頬を赤くした美代子の姿が。その背中を、誰かが「ほら入つて入つて」と軽快な声で押す。先生だ。

「良かつた。何とか立ち直つたみたいね」

先生は、安心したのか、肩を下げる息を吐いた。

「俺、どんなましいことになつてましたか？」

頭を搔いて訊くと、壁に寄りかかった春芳が唇だけ動かせて答える。

「相當ましい事になつてた。俺達のこと見えていないように、うわ言つぶやきながら屋敷中を歩き回つて……とうとう幹土の頭がいつしまつたかとうな垂れたぞ、俺は」

それに、先生が続く。

「……本当よ、幹土君。夢遊病みたいになつてたのよ、あなた。ひどい熱があつたし、意識が混乱したのね、きっと。……いきなり廊下で叫びだすわ、突然女湯に駆け込んでくるわで、大変だつたんだから」

「……そ、そうだつたんだ」

幹土はどこかちくちくする顔に、やつと納得したように頷く。

「何にせよ、良かつたな、幹土。俺はてつきり、薬でもやつたのかと思つた」

部屋の隅の椅子に座り、ぼりぼりと金色の頭を搔く基喜。その横

で、美代子が机に片手をついて言つ。

「突然意識を失つて、どうなるかと思つたけど。」いつして元の幹士君に戻つたみたいで良かつたわ」

基喜が、本当に、と頷く。

「でも、少し拍子抜けしたわ。部屋が騒がしいから駆けつけてみれば、幹士君、こんなにけろりとしてるんだもの」

先生はそう言つてから、幹士にしがみ付く一人を見遣り、苦笑いを浮べる。

「何だか、私も仲間に入りたい気分ね」

突然先生はベッドの前で靴を脱ぐと、とうーーと大きく腕を広げて飛び跳ね、被さつてきた。

先生の胸に視界を覆われた幹士は、苦しいんだけど、と頬をぽつこり寄せて言つ。

「なあ、幹士。……呼んで来い、早く

突然春芳が横からそう言つた。

「きつと、まだ広間で蹲つてるぞ、彼女」

「……彼女？」

「そう。彼女が」

春芳は「早く行つてやれ」と頬で促した。

……まさか。

幹士は彼女達の腕を引き剥がし、ベッドから降りて靴を履く。そして、数歩歩いた後、立ち止まり「ミキさん」そうつぶやいてすぐに駆け出した。部屋を飛び出すその背中を、階は静かに微笑んで見送る。

階段を走り下り、ホールを真つ直ぐ突つ切つて広間へ。そして、見る。ソファーの上で縮こまつた小さな影を。

「ミキ……さん」

田を見開いて、つぶやく。

すると、その影はぴくりと震えて、肩をゆづくつと「ひかりへ振り向かせる。

ミキさん 唇がもう一度そつと動く。ミキは、ソファーの背に手を載せて立ち上がり、兄さん！ と大きく叫び、飛び越えた。

走り寄つてくる。細い足が、白いワンピースの裾を揺らして。

彼女は、そのまま首に抱きついてきた。幹士は、頬に触れるその柔らかい髪の感触に、ただ呆然とする。

ミキの足が、床をゆらゆらと揺れた後、静かに床へついた。そして、彼女は見上げてくる。

幹士はゆつくつと、ゆつくつと視線を下げる。

「幹士兄さん」

見上げていたのは、違う瞳だった。あの瞳よりも少し茶色っぽい。それに、髪は肩までしかない。

彼女はぽつちやりした頬を涙で濡らせて、笑顔を向けてきて、

「……良かつた」

「……誰だ？」

啞然としたが、すぐに記憶が蘇る。彼女は、天宮美希。良子叔母さんの娘で、俺の従妹。

何故忘れていたのかと、不思議に思いつつ。美希ちゃん、と優しくつぶやいた。

「幹士兄さん……本当の幹士兄さんだ」

美希は、感触を確かめるように幹士の腕を掴む。幹士は瞬きして、歪んだ視界を元に戻し、微笑んだ。

「ずっと、ここで待つてたのか」

うん、と美希は涙声で頷く。

「俺という夢遊病者は、美希ちゃんに何か変なこと、してないよな？」

「したわよ」

幹士は本気で驚くような顔をしたが、すぐに複雑そうな笑みを浮べた。

「その時の」と、全く覚えてないんだ。今のは冗談？ それとも……

……

「幹士兄さんが思つてゐるよ「うなことはなかつたわ。けど、変なことしたのは事実」

美希はそう言つて幹士に背を向け、腕を組んだ。

そのまま彼女は黙りこくる。その小さな肩が揺れてくるのを見て、幹士は微笑み、すつと背後から彼女を腕で包み、その小さな頭に自分の顎を載せた。

「……ごめんつてば」

幹士がそつとぶやくと、彼女は涙声で何かを言つて、そしてすべに声を上げて泣き出した。

幹士はそのまま、彼女の背中を胸に寄せて、じっとする。寂しく、悲しそうな笑みを浮べて。

美希を連れて戻つてくると、ひとまず一階へ下りて、笛で軽い食事を摂ることになった。

その前、先生は幹士を引き連れて広間へ行き、叔父さんに電話をかける。少し話した後、受話器を渡してきた。

「……」「めんな

受話器を耳に当たる途端、幹士はそう言つた。

「最初に言つことがそれか。なんでお前が謝る必要があるんだ?」「心配かけたから。

そう言つと、叔父さんは深く溜息を吐いた。

「確かに、心配したさ。けど、そんなことなどいひでも良いんだ。とにかく、お前が無事でいてくれて……」

叔父さんの声がか細くなり、鼻を啜る音が聞こえてくる。幹士は、「昨日は朝から、どうも頭が痛かつたんだ。それで夜にすごい熱が出て、その所為だと思つんだけど……やつぱり、帰つてから精神病院行つた方が良いかな」

「馬鹿! 何言つてるんだ! ……幹士が熱のせいだと言つんなら、私はそれを信じる。病院なんか行く必要はない」

真剣だけれど柔らかい声で返してくる。幹士は「叔父さん」とつ

ぶやき微笑んで、

「俺、ミキさんに会つたよ」と、ぱつりと言つた。

「ミキさん……って、美希ちゃんのことか？」

「違う。もう一人の……ミキ」

その真剣な声に、叔父さんは押し黙つて、

「どんな子だつたんだ？」

と訊いてくる。幹士は視線を電話に据えながら、思い出すように笑つて、

「明るくて、素直で。わがまま。……本当に優しい子だつた。母さんによく似ていたよ」

叔父さんは、そうか、としばらく黙つた。その後で、

「姉さんが死んで、そしてミキちゃんが死んで、十一年になるのか」

ぱつりとつぶやいた。

「義兄さんが交通事故に遭つて、それで姉さんが自殺して、舌を切るなんて、本当に馬鹿なことをしてな。ショックを受けた幹士の母さんは、その後、病氣で死んでしまつた。ミキちゃんも、姉さん達が死んだ後すぐに、屋敷で亡くなつた。……私は、」

何もしてやれなかつた。叔父さんはそうつぶやいて、かすかに嗚咽が聞こえる。

目に手を当てて、歯を食い縛る叔父さんの姿が受話器の向ひに見えた。

「叔父さんは十分近くしてあげたわ」

「そんなはずはないんだ。看取つてやることさえしてやれなかつた」  
「間に合わなかつたのなら、仕方ないさ、こんな山奥だし。……ミキさん、叔父さんが花をいっぱい贈つてくれたこと、忘れてなかつたよ」

幹士がそう言つと、突然叔父さんは嗚咽を止め、「お前、本当に

……と驚いたようにつぶやく。

「だから、本当だつて言つただろ。ミキちゃん、十五歳になつててさ、すごく可愛かつた」

叔父さんは数秒の沈黙の後、堰を切つたよつに嗚咽し出した。

幹士は、「じゃあ、切るね。毎じう出発するから」と囁いた後、少し返事を待つてから、受話器を置いた。

食事の後、食堂を出る際に、先生に部屋で休むよつに勧められたが、平氣ですと断つた。

幸美と部屋に戻つて、鉛筆とスケッチブックを抱えて出ると、ちよつど春芳が、階段から上がつてきたといひだつた。

春芳は幹士の腕の中にある物を見ると、

「昔やつた趣味に勤しむのか……いいかもな」

ジーパンのポケットに手を入れて何かを抜き出し、その上端を幹士に見せてきた。

幹士はそれを見て春芳に頷き、幸美へ振り向くと、「先に行つてくれ」と言つ。

幸美は、ちらりと春芳を見遣つてから、「わかつたわ」と頷いて、階段を下りていつた。

幹士は階段の側の欄干に腕を組んで、春芳と肩を並べながら階下を見下ろす。

春芳は、黙つて「真を差し出した。幹士は受け取ると、上下の向きを正して眺める。

「すまない……美希ちゃんに渡し損ねた」

「いや、良いんだ。元々これは、他の人にあげるつもりだつたから幹士が独り言のよつに小さくつぶやくと、春芳は幹士を怪訝そうに見た。しかし、すぐに視線を再びホールへと落とす。

幹士が「迷惑かけた」とほつりと言つと、まつたくだ、と春芳は返す。

「昨日の幹士は、俺達が見えていなかつた。何かに憑かれたよつて、屋敷中を駆け回つて……それで、いきなり、」

春芳は、横の階段を指差し、「ここで倒れるしな」とつぶやく。

「幸美、取り乱しただろ？」

「いや、平気だった。俺も最初、驚いている幸美さんを見て、これは駄目だと思つたけど、鈴木さんが何とか彼女を落ち着かせたから」

「……そうか。あの幸美が、よく引き下がつたもんだな」

幹士は安心したように微笑み、ホールの天井から下がるシャンデリアを見る。一時、輝くまでに新しくなつたはずのそれは、今はクリスタルは煤け、金色の縁は錆びて鈍く光っていた。

「幸美さんにも、謝つておくんだな」

幹士はああ、と頷く。一人は黙つてホールを見下ろしたが、ふと幹士が、あのさ、とつぶやく。

「俺の部屋にさ、オルゴール、なかつたか？ 結構大きい箱なんだけど」

その言葉に、春芳は眉をひそめて、視線を逸らす。

「そんなもの、あつたか？ 俺は知らないぞ」

それより、と春芳はすぐに話を変えてくる。

「書斎の鍵、貸してくれないか？ もう一度あそこ、見ておきたいんだ」

「良いけど、出る時はちゃんと閉めておけよ」

幹士は、ジャケットのポケットをまさぐつて鍵束を取り出すと、春芳の手に載せた。

「ありがとう。行つてくるよ」

二人は背を向けて歩き出だが、「幹士」と春芳が呼び止めた。

「ありがとな、誘つてくれて。色々あつたけど、この旅行、すごく楽しかつた」

今までに見たことのない、明るい表情。幹士は驚いたようにその笑顔を見つめたが、その背中が廊下の先に消えると、笑みを漏らした。

「あいつ、やっぱり寂しかつたんだな。」

いつも澄ました顔して、人を寄せ付けない空氣を出して。そんな

な春芳がいつか、部室のグランダで、珍しく煙草なんかを吸つて、遠くを眺めていたことがあった。

その目が似ていると思った。鏡で幾度となく見てきた自分の目に。孤独に苦しむ人間の目に。

中庭に入ると、幸美はベンチに座つて噴水の方を眺めていた。けれど幹士に気付いた途端、ぶんぶんと腕を振つて合図していく。

幹士が近づき、「お邪魔しますよ」と言つて腰を下ろすと、お邪魔してください、と彼女は笑顔を見せる。

幹士は座つた途端、いきなり彼女へ体を向けた。じつと見つめられて、幸美は戸惑いがちに、何よ？ とつぶやく。

突然幹士は、彼女の頭に手を載せて、強く撫でた。

「何？ やめてよ、恥ずかしい……」

幹士の手首に手を重ねて、慌てて辺りを見る幸美。幹士は笑いながら、

「よく頑張りました」

そうつぶやく。それで、幸美は気付いたのか、幹士を上目遣いに見ると、

「……本当。頑張ったのよ、私」

頬を赤くした。

幹士は幸美の頭から手を離すと、写真を取り出して、間に置く。

誰、この娘？ と、幸美が手に取る。

「子供の頃の母さん。美希ちゃんに似てるだろ？」

スケッチブックを開き、中庭を見渡す。

本当、そっくりねー幸美の声を耳にしながら、幹士はあの夢の情景を頭に思い描いた。

少女の足は軽快に跳ねて。黒いワンピースの裾はふわりと風に乗つて、長い髪はなびいて。そして、あの綺麗な瞳は空を映して。

幹士は、写真を幸美の手から抜き取ると、顔に近づけて、その中の少女の顔をじっと見る。そして、無言でそれを渡し返すと、鉛筆を取つた。

彼女の仕草、声、表情　　思い描ける全てを注ぎ込んで、彼女を蘇らせる。

鉛筆は止まらずに、紙の上をゆるやかに移動する。あの踊りを再現するよつ。

春芳は、書斎の扉を閉めると、微笑を浮べて窓際の机に歩み寄り、その肘掛椅子を優しい手つきで掴んで自分の方へ向ける。そして座ると、息を吐いて書斎を見渡す。

「もう一度、顔見させてくれないかな」

何となくつぶやいたその言葉が、思いの他大きく、書斎に響き渡る。

少しの間、じつと黙つて薄闇に目を凝らしていたが、すぐに首を振つて、そんな上手い話ないよな、と笑つ。

……じうして昼間見てみると、この書斎、おばあちゃんの書斎よりも少し大きいな。

春芳は、頬杖をついて、暗い奥へと視線を向ける。……いた。

「なんだ、意外とサービス精神のある幽霊なんだな、君は」

春芳は、視線を斜め右へと向けたまま、つぶやく。返事はない。

「幹士が君を見たら、驚くだろうな。写真の少女に瓜二つだから」

春芳は視線を彼女の顔からゆつくりと下げる、白い靴下を履いた足が近づいてくるのを見る。

「何の用、俺に？」

真正面に立つた彼女へ、恐がる様子もなくつぶやく。

彼女の赤い唇が、ゆつくりと動く。ミ、キ、ト……。

「何か伝えて欲しいのか？」

すつと手を彼女の髪に伸ばしかけたが、春芳は思い留まるよつてその手を引かせた。

少女は背中で手を組んで、大きな瞳をじつと春芳に向けて微笑み、もう一度、ミキト、と唇を動かせる。

「幹士がどうしたんだ？」

すると、彼女の唇が横へかすかに引き伸ばされ、そして、縦に小さく開かれる。イ、テ。

「居て……欲しいのか？」

彼女はただじっと笑みを浮べたまま春芳を見つめる。しかし、突然身を乗り出して、春芳に顔を近づけた。

間近で見える大きな瞳。それが、鼻先に迫つて、春芳はようやく恐怖を感じ、喉から声を漏らした。

少女の顔は、触れそうな距離まで来て、止まつた。その瞳に映つているのは、自分の顔ではなく。

白いワゴン車だった。それは、宙に浮いて垂直に傾き、運転席には、茂川先生、そしてその隣には幹士が見える。車の背後にあるのは崖、つまりこれは。

美世は、窓から中庭の一人を眺めていた。指先から立ち上る煙草の煙は、染みの多い天井の下をゆっくりと徘徊する。

「いのヅッコンめ」

幸美が幹士の横顔を嬉しそうにじっと眺めているのを見て、美世は無表情でそうつぶやき、煙草を口から離して、細い煙を吹いた。昨日の晩。幹士君が倒れた時、自分がいなかつたら、きっとあの子達は混乱し、事態はもっと悪化していた。自分がいたから、こうして彼らは笑顔を取り戻せたのだ。

「自惚れかしら……」

……でも、あの時、皆を落ち着かせられたのは、やっぱり私だけだった。教師の、私だけ。

自然と頬が緩んで、笑みが零れる。……少し、誇つても良いのかしら。

……散々生徒に憎まれて、彼らの保護者には罵声を浴びせられて。役立たず。

……そう言われた私だけど……いのづして役に立つてる。

この旅行から帰れば、たくさんの非難の声が、私を待ち受けてい

るだろ？。けど。

「それでも私は……」

美世は煙草を、窓枠に置いた灰皿へ押し付けると、急に明るい笑みを浮べて窓を開け、顔を出す。

「幹士君！ 幸美が今、鼻ほじつたわよ！」

その大声が中庭じゅうに響き渡ると、幸美がえ？ と顔をこぢらへ振り向け、すぐに「何言つてゐのよー？」と顔を真つ赤にして叫ぶ。

幹士はわずかに幸美を見た後、別段気にしないようにスケッチに意識を戻す。

ちがうの、ちがうから、絶対に。黙々と描いている幹士に、幸美が横から必死に説明する。その様子を眺めながら、美世は箱からもう一本取り出して、微笑む口に銜えた。

「これで、もう良いんじやないか？」

その重い木箱を机に下ろすと、鈴木は傍らにいる美希へ言った。美希は、うーん、と浮かない顔で、その箱を指ですつと撫でた。割れていた部分から、でこぼこした感触がする。

「これ以上はもう、私の手では直せないよ」

困ったように美希の横顔へ言つ鈴木。美希は答えずに、オルゴールの側面にじつと目を近づけ、

「……この辺りは、ヒビも消えて、良いんだけどなあ

「大体どうして、あんなことしたんだ？」

鈴木の言葉にやはり答えずに、彼女は箱を引つくり返す。

昨晚、幹士はホールで倒れた後、美希に支えられて部屋へ戻り、ひどく頭が痛そうな様子で、ベッドに横たわった。

幹士は美希に鞄からポーチを取り出させ、そこに入っていたオルゴールを美希にプレゼントした。嬉しくなつた美希は机の引き出しに一つのオルゴールがあるのを思い出し、取り出して見せた。すると、幹士はいきなり美希の頬を掴み、彼女の顔へ自身の顔を近づけ

た。

幹士兄さん……な、に？

突然の事に、彼女は鼓動を高鳴らせて、幹士の瞳を見つめた。そして、そこに映つたものを見る。

自分の顔ではなかつた。見知らぬ少女の顔。肌がとても白くて、大きな瞳が瞬きせずにじつと見つめてきて。

美希は慌てて顔を離すと、手元にあるオルゴールにふと皿が留まつた。

……誰、今のは。

そう驚くと同時に、頭の隅に、何故か彼女への憎しみが激しく沸き起つて、気付けばそれを手に取つて、壁に投げつけていた。その古いオルゴールは、いとも簡単に壊れた。同時に幹士は気を失つて倒れた。

おい、幹士！ しつかりしろ！

見守つていた皆が騒ぎ出す中、彼女は呆然と立ち尽くした。

どうして、私は。……あなたは。

美希は、オルゴールを開く。音は鳴らない。もう、あの綺麗な音を聞くことはできない。

「ごめんなさい」

美希は沈んだ顔でオルゴールに言葉をかけて、蓋を閉じると、机の引き出しを開けて、そこにしまう。

「……これ、誰のオルゴールなんだろうな」

ぽつりと背後で鈴木がつぶやく。

美希は返事をせず、目を閉じて手を合わせた。それを見た鈴木は、何故に合掌する？ と首を傾げたが、やつておくかと美希に倣う。

……どうか安らかに。

じつと祈つた後、美希は瞼を開き、静かに引き出しを閉める。

「このオルゴールのことはもういいよ。ミキちゃんの叔父さんも、話したら許してくれたんだし」

背中を押されて戸口へ歩き出しながら、美希は「でもなあ……」

と、まだ氣にかけるよつに振り返つた。

「行こつ」「ひつ」

そつ強く促され、よつやく彼女は視線を前へ向けた。しかし、その時。

あの音階が、ゆつくつと部屋に響き出した。一人はびくりと体を震わせて立ち止まる。振り向くと同時に、その音はすぐに途絶えた。

「……氣にしない、氣にしない」

鈴木は真顔になつてそう言い、美希の腕を強く引いて部屋を出ると、ドアを強く閉めた。

「早く幹士達のところへ行こつ。私達がいないと、あの一人、調子に乗つていぢやつきはじめるから」

ドアへ振り返る美希の視界を遮るよつに、鈴木はわざと顔を傾けて、明るく言ひ。その笑顔が、もう関わるな、と無言で訴えかけてきた。

部屋から遠ざかっていく中、耳を澄ませば、かすかにその音が聞こえてくる。……彼女が、鳴らしているのかな。

広間は静まり返つていて、奥で開いていた大きな窓から涼しい風が流れ込んでくる。

基喜と美代子は、向かい合つてソファーに背を沈め、それぞれの前にはティーカップが置かれて湯気を立ち上らせていた。

「つるさい奴らがないと、こつもゆつくりとくつろげるんだな」

基喜はいつもみたいに踏ん反り返ることなく、姿勢良くソファーに座つていて、わざとらしい丁寧な仕草でカップを口に運ぶ。それを見ている美代子が、くすくすと笑う。

「何だよ?」

「つうん、なんでもない」

美代子は首を振つて、自分もカップを手に取る。

「……本当に大丈夫なんだろうな、あいつ」

ぱつりと、基喜がつぶやく。その言葉に、美代子は少し黙つてか

ら、

「大丈夫だよ、さつと。さつきあんなに元気そうだったじゃない」  
「どうか暗い声でそう言った。

基喜は、何かを考えるよう、手に持ったカップを口の前で静止させる。

「正直、どう思つた？」

「どうつて……」

基喜の質問に、美代子は視線を逸らして、カップを置く。

「本音を言つと、俺は引いた。熱だけあんなことになるか、普通？」

「どうかいらいらしたような口調で、基喜が言つ。

「ならないね。……普通なら」

「だろ？……本当のところ、どうなんだよ」

美代子の顔をじつと見つめる基喜。美代子は伏せていた目を上げて基喜を見る。

「昨夜の幹士君、すゞしく怖かった。さつき食事した時も、私、幹士君を避けてたの」

基喜はそれを聞いて深い溜息を吐くと、だよな、とソファーに踏ん反り返つた。

「俺もだよ。今日はどうも、いつもみたいにエンジンがかからねえ」  
一人は沈黙する。風が、ソファーの背に載った基喜の金髪を揺らした。美代子は、じつとカップの中の水面を見下ろし、でも、とぼつりとつぶやく。

「今日の幹士君、本当に何でもなさうに見えたわ」

それを聞くと、基喜は、沈んでいた表情をわずかに明るくさせ、

「ああ、いつもの幹士だった。いつもの……幹士」

ほんやつと繰り返す。美代子は顔を上げて、笑つた。

「やつぱり、幹士君は良い人だよ。気さくで、優しくて。誠実で」

「べた褒めしてんな、お前」

基喜は、そう言って笑つ。

「確かに昨日は変だつたけど……幹士君は幹士君に変わりないんじやないの？」

基喜は一瞬顔を固ませた後、突然、

「そうだよな！」

そう叫んで、吹き切れたように笑つて立ち上がつた。

「たとえ薬中でも、あいつはあいつだ！」

そう言つて、大きく頷く。美代子は座るよつに手で促しながら、何言つてゐるよ、と苦々しく笑う。

「とにかく今まで通りで良いよな」

自分に言い聞かせるよつにつぶやきながら、基喜は再び腰を下ろして、大股を広げる。

「ちょっと……何これ」

啞然とした美代子の声が聞こえて、基喜は、うん？ と、笑みを彼女に向けた。その途端、基喜の視線が彼女の手へ向かつて釘付けになり、何やつてんだよ、とすぐに美代子の顔を驚いたように見る。「私じゃないわ」

美代子は、基喜をじつと疑うよつな目で見ながら言つて、自分の手が握つているカップへ視線を戻した。

そこに盛られた大量の角砂糖。半分も飲まれていらない紅茶が、カップから溢れ、細い線を伝わせている。

「二人はお互ひを探るよつな目で見てから、ほぼ同時に、『だから違うつて』と声を漏らした。

少女は窓の欄干の上に座つて、にっこりと微笑み、一人を見つめていた。その髪はカーテンと一緒にひらひらとそよぐ。彼女の無邪気な視線に、二人は気付かない。

「荷物、これで最後ですか？」

「うん。このおつきなので終わり」

基喜のボストンバックを先生から受け取り、幹士は空いた隙間へと差し込む。少し体を離して、荷物がトランクに綺麗に収納されて

いるのを見ると、満足げに頷いてドアを閉めた。

先生が運転席に乗り込むと、幹士も迂回して助手席のドアを開く。

「寒いですね、相変わらず」

そう言つてドアを閉めると、幹士は指先をダッシュボードのボタンへ向けようとして、しかしその指を掴まれた。

「良いの。……このぐらいがちょうど良いの！」

そう叫んで、先生は指を持ったまま、出納のコップを煽る。

「はいはい、そうですか」

指を先生の手から引き抜いて、そう笑つ。

その時、春芳が玄関から歩いてきて、助手席の窓を叩いた。

「何だよ

窓を開いてそう訊くと、

「俺が運転するよ。良いよな、茂川先生？」

幹士の頭越しに訊く。

「いいのよ？ 別に、私が運転しても」

「俺がします」

春芳は先生の言葉を遮る。

「そんなに運転したいなら、させてあげればいいだろ」

春芳の背後を通った鈴木が、美希の腕を引きながら、からかうようにつぶやき、後部座席のドアを開く。春芳は眉をひそめて彼女を見た。

「……わかったわ」

先生はどこか納得していないように、コップを出納にかぶせて運転席から降りる。すみません、とつぶやいて入れ替わる春芳。

「……お前、免許持つてたのな」

「ああ。去年の冬に取った」

視線の先で、幸美が美代子と基喜を連れてこいつへ向かってくるのが見える。

「なあ、幹士」

突然、春芳が真剣な声でつぶやいた。

「なんだよ？」

振り向くと、春芳は真顔を向けてきた。

「信じてもらえないかもしないけど」「

どこか震えた声。春芳は口を開きかけたが、すぐに、思いとどま

るよう閉じて、静かに首を振る。

「……なんだよ、はつきり言えよな」

そう言つただけで、幹士は別段追求しようともせずに視線を前へ戻した。

「さ、出発進行だぜえ！」

三列目の座席に乗り込んできた基喜が、ピシッと前を指差す。

「なにキメてんだよ、アホ。荷物運びも戸締りもやんなかつた人間が

その指先をテロップンで弾きながら、身を伸ばしてきた幸美から鍵束を受け取る。春芳は無言で車を発進させた。

「何だか、すぐ疲れる旅行だつたわね」

「本当。……誰が原因なんだか」

先生の言葉に頷く鈴木。うるせえ、とつぶやく。

「……でも、楽しかつた」

そう嬉しそうに言う美代子へ、

「無事に成就したし、本当に言つことない旅行だつたでしょ？」

幸美が言つと、美代子は恥じる風もなく、「うん」と大きく頷いた。基喜が、おいおい、と顔を赤くして肘をつく。

「もうわかつてるんだから、隠すなよ」

鈴木がやれやれと肩をすくめる。美希だけが、「なになに？ 何のこと？」と、興味深そうに鈴木の腕を引いた。

次第に洋館が遠ざかっていき、車は花壇の並ぶ十字路を真っ直ぐ突き進んだ。けれど、門前で、突然停止する。

「どうした？」

春芳へ振り向くと、

「いや。不思議な屋敷だったなつて思つてさ」

春芳は、バックミラーに映るその古びた建物をじっと見つめる。

他の皆も振り返って見る。

「なに感慨に耽つてるんだよ」

鈴木が、重苦しい沈黙を払いたいのか、そう言つた。けれど。「ああ、不思議なことばかりあった。……ここでは」

幹土が、バックミラーを煽いで、ぼんやりとつぶやく。その声に鈴木は俯いて、春芳は無言でアクセルを踏んだ。

車はアーチ状の門をくぐり抜けると、停止し、幹土は車から降りて、門扉を施錠すると、その先に見える大きな洋館を見た。

……じゃあな、ミキさん。

門前で広がつてゐる花の景色を見るだけで、彼女の踊る姿が田に浮かぶ。この洋館のどこを見ても、それは一緒。

幹土は鍵束を握り締めると、車に乗り込む。

「出発進行」

「ぱつりとつぶやくと、春芳は無言で車の向きを変えて、山道へ入つた。

「いじつして見ると、でかいわ、やつぱ」

基喜は窓を開けて、そう言つ。美代子も顔を並べて、「一生にいつぺんだろうな、こんなところへ来れるのは」とどこか勿体無げに言つた。

「また幹土に頼んで、連れてきてもらえばいいよ」

鈴木は、風になびく自分の長い髪をゴムでまとめながらそう言つ。「やめとくよ。もう俺はここへは来ない」

幹土が無機質な声でつぶやいた。すると、鈴木は視線を下げて、「そうだな。やっぱり私もいいや」

山道を覆つ青葉の隙間から下りた光が、小刻みに揺れる車体に斑点を浮かばせる。風は涼しく、車の走りは軽快で。けれど、車内はどこか重苦しい空氣で満たされていた。

サイドミラーに流れる、無数の緑の横線をぼんやり見つめながら、幹土は欠伸する。そして、バックミラーを見遣つて。息を止めた。

一列目のシート 頬杖をしている鈴木と、ぼんやり外を眺めている幸美。彼女達の間に座っていたはずの美希が、消えて。そして。

「ミキ、やん……」

そこで足をぶらぶらと揺らして座っている少女。長い髪を白いワンピースの肩に垂らして。真っ白な顔を、大きな目を。真っ直ぐ前へ向けて。

その瞳が、じちらへゆつくり動いた。

「幹土兄さん。行つちゃ駄目だよ」

突然唇をにつこりと笑わせて、顔を傾けて笑つ。

行つちゃ駄目。もう一度そうつぶやいて、ミキは笑みを消す。そして突然、前、とつぶやいて顎を前方へしゃくつた。

幹土は振り返り、ミキの視線の先を 道の曲がり角の向こうにかすかに見えたそれに、はつと目を見開き、

「止めるー！」

叫んだ。

その声に、春芳が歯を食い縛つてすぐにブレーキを踏む。全員の頭がぐらりと傾き、沸き起こつた悲鳴を、タイヤが地面を擦る甲高い音がかき消す。

車は山道を大きく横へスリップし、停止した。

ブレーキを強く踏んだまま、春芳は呆然と前を見る。

そこには、頭上高くまで隙間なく積もつた土砂が、岩壁から降りて、反対の崖へ傾斜していた。

じつと沈黙が車内を覆つた後、鈴木が降りて、車の背後へ回る。息を切らせて前を直視していた幹土は、我に返つて、後ろの座席へ振り向いた。そこにいるのは、彼女ではなく。

唖然として震えている美希だった。彼女は、幹土の視線に気付いて、すぐに身をすり寄せてきて、「怖かった……」とつぶやいた。

「……もうすぐだったな、これは」

サイドミラーに映つた鈴木が、崖のラインを飛び越えかけた後部タイヤを見て、つぶやく。

先生は、どうなってるの？ と車から降り、彼女の背中に走り寄る。しかし、それを見た途端、

「あ……」

そうつぶやいて、鈴木の肩を震えながら握る。

「どうなってるんだ？」

幹土もすぐに降りて、走り寄る。その後を美希が続いて、幹土の腕を握る。

「あ……ぶねえ……」

眼前にある崖を見て幹土はつぶやき、力が抜けたよじしゃがみこむ。

ゆっくつと近づいてきた春芳が、青白い顔で、宙に浮いた後部タイヤを見る。

「まさか、本当にこんなことになるとは。……不思議なことがあるもんだな」

何か弱弱しくつぶやく春芳に、鈴木が険しい顔を振り向かせ、

「何が不思議だ、馬鹿」と、言い直す。

「……幸美」

ふと車の方を見遣つて幹土は立ち上がり、崖を離れる。すると、その手を美希の細い手が掴んで後に続いた。

「春芳の言う通りだな」

幹土は歩きながらぽつりとそうつぶやく。

……不思議なことばかり起こる。

「……行かないで」

その時突然、彼女の声がして、幹土は足を止める。

「私、嫌だよ」

幹土は、震える顎を横へかすかに向ける。

「幹土兄さん」

懇願するような声。視界の隅に映る、長い黒髪。髪先が、風に上下に揺れて。

「……ミキさん。いつかまた来るよ。その時は、」

幹士は震えながら微笑み、

「必ず外へ連れ出してやるから」

その嘘は、枝が揺れる音にかき消されて。けれど、彼女は、うん、と嬉しそうに言つてくれた。

幹士は振り向く。その瞬間、唇に柔らかいものが重なった。

……ミキさん。

強い想いが、彼女の息と共に口になだれ込んでくる。幹士はその想いを吸つて、唇を離した。

風が大きく吹き、頬に触れていた長い髪は離れ、搔き消えた。もうそこに立つているのは、彼女ではなく。不安そうな眼差しで見上げてくる美希だつた。幹士は微笑む。

「……やっぱりませてるな、ミキさんは」

ぱつりとそつづぶやいて、美希の腕を引くと、後部座席のドアを開いた。

美希が背後で、「どうして私がませてるのー!?」と、不服そうに言つたが、幹士は気にした様子もなく、シートの上の幸美に、「大丈夫か?」と明るく手を差し伸べた。

薄暗い部屋の片隅。そこに、足の折れかかった古いイーゼルが立てかけてあつた。それに掲げられた一枚の紙。

そこに描かれた彼女は、瞳が大きく、髪は長く、微笑みは子供っぽくて……。

指を差し向けて、紙の上の細い線をすつと撫でてみる。

唇の薄さも、明るい表情も 何から何までそつくり。

「幹士兄さん……」

彼女はその紙を顔に近づけた。涙が落ちていく。けれど、その絵がにじむことはない。

……手に取ると、こんなにも、悲しくなるの。でも、この絵を見ると、すごく嬉しい……。

そうして彼女は、微笑む。

……どうしてもっと早く、気付けなかつたのかしら。これは私にとって、最初で最後の恋。もつと早く気付けば、私は。

その時、ドアがノックされた。お嬢様、お茶の時間ですが、いかがなさいましょう?

「すぐ行くわ」

ミキは、すつと顔を引き、田元の涙を払つてドアへ近づき、ノブを握つた。

けれど、もう一度振り返ると、窓の外を見る。

「約束だからね。兄さん」

山が連なるさらに遠くに 薄い青が広がつてゐる。そのぞひで遠くに……兄さんと行きたい。

彼女はそう思つてみて、笑つた。涙が頬を伝い、寂しそうに笑う唇を濡らす。

彼女は出て行く。そして、床に点々と落ちた涙の跡が、すつと薄くかき消えた。それは初めからなかつたよつて傳げに 綺麗に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1096j/>

幻少女～夢にほほ笑む彼女～

2011年9月10日23時55分発行